

543

28



始



543

28





天津

保物語

上

大正
15. 9. 29
内交

緒言

宇津保物語上册の校訂成り、將に緒言を草せんとするに方り、校訂者會、病を獲て筆を援ること能はず、荏苒日を送りて發刊の期正に迫る。乃ち止むことを得ずして、單に校訂に關する用意の概要を記して讀者の参考に供し、其の他の言説は姑く之を他日に譲らんとす。宇津保物語は古來難解の書として傳へられ、其の名徒らに高くして之を讀む者甚だ稀なり。これ其の文の錯簡と卷の順序の錯誤と共に甚だしきに因るものなり。本書は文化二年補刻の刊本を以て底本とし、左記の諸本を参照して、義の通じ易きもの、又は詞づかひの最も穩かなるものを探り、上欄に異同を註せり。但し上欄の甚だ窮屈なるを以て、一々には異同を註せず。これ一には重きを通俗に置く本文庫の主意に拘せられたる也。本書の参照に用ひたる本左の如し。

村田春海校正本

山岡俊明校正本及び小山田與清校正本に據りて刊本を正したるもの。

宇津保物語玉琴（卷三以下）細井貞雄

契沖校正本、山岡俊明校正本、田中道麻呂校正本、菅原久樹校正本、荻谷望之校正本
及び古寫本二本に據りて刊本を考へ、異同を抄出したるもの。

宇津保物語新治（卷五以下）巨勢利和

塙檢校本、久永氏本、土佐家本及び一本に據りて刊本を考へ、異同を抄出したるもの。
久米幹文本

田中道麻呂本、羽倉在滿本、塙檢校本、馬陽本、古寫本及び他の二本に據りて刊本に
異同を註したるもの。

東京帝國圖書館藏古寫本二本

之を數ふるに、若し一本又は古寫本などと記せるものにして相重複することなくば、本書
の本文は二十一種の本を以て對校せるものと謂ふを得べし。

順序につきては、はじめ古來の諸家の説に求めて之を決せんとせしに、諸説紛然として適

從する所を知らず。よりにて翻つて本書に就きて之を考ふるの寧ろ捷徑なるを思ひ、本文を
玩索して事實の前後敘述の筆癖等を精勵し、全く自家の見地によりて順序を一定し、又翻
つて之を諸家の説に對照するに、細井貞雄氏の玉琴の順序最も予が順序に近く、其の相異
なるは、唯彼は「吹上」の下巻を「祭の使」の前に置けるに、我は「祭の使」を「吹上上」
と「吹上下」との間に置けるの一事のみなることを見出せり。

人名はもと殆どすべて假名がきなるを、今讀過の便をはかりて假に漢字を宛て、その文字
は大概「宇津保物語新治」に用ひたるを其儘に襲用したり。

本書の校正につきては塚本哲三星野亮太郎二氏を煩はしたること多し。爰に記して謝意を
表す

大正四年五月病中に記す

校訂者 武笠 三

大正四年五月廿三日... 本館の刊行... 大正四年五月廿三日... 本館の刊行... 大正四年五月廿三日... 本館の刊行...

宇津保物語 上 目録

俊 蔭 一

藤原の君 九五

忠こそ 一六七

嵯峨院 二〇九

梅の花笠 一名春日詣 二七七

吹 上 (上) 三二一

祭の使 三六九

吹 上 (下) 四三二

菊の宴 四六三

あて宮……………五十一

初秋……………五八九

一名とばかりの名月
又相撲の節會
又内侍のかみ

田鶴の村鳥 一名沖つ白浪……………六九九

宇津保物語

俊 蔭



概 梗

● 清原俊蔭の生ひ立ち。其の穎悟。● 俊蔭遣唐使に立つ。彼に羅に漂流す。琴を習ふ。● 俊蔭伐木の響を尋ねて西に行く。阿修羅に遇ひて琴を得。梅檀林の中に琴を弾く。● 俊蔭天女の歌に随ひて向西に行く。仙人に琴を習ふ。● 俊蔭朝。源氏の女を娶る。式部大輔兼左大辨に任ぜらる。一女を生む。● 俊蔭琴を所々に奉る。● 琴の師仕るべき勅を辭す。● 俊蔭三條京極に隱居す。女に琴を習はす。治部卿兼參議に任ぜらる。● 俊蔭夫婦逝去。遺言。家道の琴蔭。孤兒の寂しき生活。● 藤原兼正父に隨ひて賀茂に詣づ。歸途密に俊蔭女の許に宿す。● 兼正の行方不明。藤原一家の騒動。兼正父の監視に苦む。● 俊蔭女の幽愁。兼正の悲嘆。● 俊蔭女懐胎。忠實なる老婢。俊蔭女仲忠を生む。貧居。● 老婢の死去。● 俊蔭女懐胎の孝養。天助。● 俊蔭女仲忠を導きて北山の空洞に移住む。● 母に琴を習ふ。● 幼くして琴の妙を極む。● 奇譚。俊蔭女なん風の琴を弾く。● 兼正、琴聲を尋ねて北山に入る。● 兼正仲忠父子の懸答。● 兼正再び北山に入る。● 俊蔭女を伴ひ歸りて三條堀川の邸に置く。● 俊

俊 蔭

一

●清原俊隆の生ひ立ち。其の顛情

- (一)母の皇女なるをいふ
- (二)年不相應に
- (三)來聘の高麗の使節に
- (四)かうぶり元服
- (五)試験場に出でたる
- (六)清原王の子の名
- (七)りほろ一吏部卿

- (一)清原の王一清原の大納言
- (二)七歳なる子一七歳に
- (三)中臣一なりとみ一み

隆女の榮華。●仲忠諸藝を習ふ。侍從に任ぜらる。●五節の試
樂に仲忠御前にて琴を彈く。●兼正相模の還養を行ふ。源正賴、仲
忠を強ひて琴を彈かしむ。仲忠仲澄と兄弟の約を結ぶ。●正賴、其
妻穴宮に還養の有様を語る。

むかし、式部大輔左大辨かけて、清原の王ありけり、御子腹に男子一人もた
り。其の子、心の敏きこと限りなし。父母、「いと怪しき子なり。生ひ出でん様を
見む」とて、文も讀ませず、言ひ教ふることもなく、おほし立つるに、年にもあ
はず、たけ高く心賢し。七歳になる年、父が高麗人に逢ふに、此の七歳なる子、
父をもどきて、高麗人と文を作り交しければ、おほやけ聞召して、怪しう珍らし
きことなり、いかで試むと思す程に、十二歳にてかうぶりしつ。帝、「有難き
才なり。年の若き程に試む」と思ひ、唐土に三度渡れる博士、中臣門人と云
ふを召して、難き題を出させて、試させ給ふ。度々登りたる學生の男ども、才有
るをのことども、手まどひをして一行の文も奉らぬに、俊隆は、りほうの文をい

- (一)語釋
- (二)秀才は俊士の下なり。
- (三)賢あらん歟
- (四)答案
- (五)一人子の大切さは眼にまさるをいふ
- (六)遣唐使の船
- (七)逆風

- (一)考異
- (二)なりぬ一なれり
- (三)同じ博士一同じ博
- (四)日たかく一日たかき。
- (五)心に隨ひて一問ふに
- (六)唐土船一唐土に船
- (七)夕の一夕に
- (八)出で立つ一出で立
- (九)血の涙一血のしナ

●俊隆遣唐使に立つ。波
新羅に漂流す。琴を習ふ

とになく作り出して奉れる時に、一天下の人、皆言ひあざみて、其の度、俊隆一
人進士になりぬ。又の年同じ博士を召して、秀才の題を賜ふ。校書殿にて日たか
く題を賜ひて、かたく問はる。俊隆心に隨ひて答ふるに、えせぬ事なく、同じく
作れる。對策の思ふまよに答へたる。對策の文ども、面白く興有り。帝驚かせ
給ひて、即ち式部丞になされぬ。其の程俊隆がかたちの清らに才の賢きこと、更
に譬ふべき方なし。父母眼だに、「有りと思ふ程に、俊隆十六歳になる年、唐土
船いだし立てらる。此度は殊に才賢き人をえらびて、大使副使と召すに、俊隆召
されぬ。父母悲しむこと、更に譬ふべき方なし。一生に一人有る子なり、かたち
身の才人に勝れたり、朝に見て夕の遅なほる程だに、紅の涙をおとすに、遙か
なる程に、相見んことの難きみちに出で立つ。父母俊隆悲しび思ひやるべし。三
人の人、額を集へて血の涙を落して、出立ちて、遂に船に乗りぬ。
唐土にいたらむとする程に、あたる風吹きて、三つある船、二つは損はれぬ。多

〔語釋〕
 (一)法華經普門品に「若有百千萬億衆生、爲求金銀琉璃瑪瑙珊瑚珠等寶、入於大海、假使黑風吹其船舫、飄墮羅刹國、其中若有乃至人稱觀世音菩薩名者、是諸人等皆得解脫羅刹之難」

〔考異〕
 (一)だに見えぬ―だにも見えぬ
 (二)歩き嘶く―歩いて嘶く
 (三)ふと頸に―ふと鞍に
 (四)林の―ナシ
 (五)遊ぶ―遊び居る
 (六)日本國王の―日本の王の
 (七)同じき皮を―同じ皮を

くの人沈みぬる中に、俊蔭が船は、波斯國に放たれぬ。其の國の渚に打寄せられて、便なく悲しさに、涙を流して、俊蔭「七歳より俊蔭が仕うまつる本尊現れ給へ」と観音の本誓を念じ奉るに、鳥獸だに見えぬ渚に、鞍置きたる白き馬出來て、躍り歩き嘶く。俊蔭七度ふし拜むに、馬走り寄ると思ふ程に、ふと頸に乗せて跳びに跳びて、清く涼しき林の、柀檀の陰に、虎の皮を敷きて、三人の人並び居て、琴を弾き遊ぶ所に下し置きて、馬は消え失せぬ。

〔畫詞〕 ことは、三人の人並び居て、琴ひき遊ぶ。

俊蔭林の下に立てり。三人の人問ひて曰く、「彼は何ぞの人ぞ」俊蔭答ふ、「日本國王の使、清原俊蔭なり。有りしやうは斯うく」といふ時に、三人の人、「哀旅人にこそあなれ。暫時宿さむかし」といひて、並べる木の陰に、同じき皮を敷きてするつ。俊蔭もとの國なりし時も、心に入れし物は琴なりしを、この三人の人唯琴をのみ弾く、されば、添ひ居て習ふに、一つの手残さず習ひとりつ。



俊

蔭

五

俊隆伐木の響を尋ねて西に行く。阿修羅に遇ひて琴を得。桐林の中に琴を弾く

〔語釋〕
(五) 琴一つ造るだけの木を獲ん

〔考異〕

- (一) 俊隆—その時俊隆
- (二) 思ふ様—思ふほに
- (三) こころ—そこら
- (四) 尋ねて—尋ねゆきて
- (六) 出し—出して
- (七) 年もくれぬ—一年なほくれぬ
- (八) ちさをしき—ちさましき
- (九) 空につき—雲につき

花の露、紅葉の雫をなめてあり經るに、翌年の春より聞けば、此林より西に、木を倒す斧の聲、遙に聞ゆ。其の時に俊隆思ふ、程は遙なるを、響は高し。音高かるべき木かなと思ひて、琴を弾き、文を誦してなほ聞くに、三年此の木の聲絶えず。年月の往くまよに、己がひく琴の聲に響かよへり。俊隆思ふ様、こよら四つの隅、四つの面を見めぐらすに、此處より離れて山見えす。天地一に見ゆるまで、又世界なきに、琴の音にかよへる響のするは如何なるぞ。此の木のあらむ所尋ねて、いかで琴ひとつ造るばかり得むと思ひて、俊隆三人の人に暇を乞ひて、斧の聲の聞ゆる方に、疾き足を出し、こはき力を勵みて、海河峯谷を越えて、其の年暮れぬ。又明くる年も暮れぬ。

三年といふ年の春、大きな峯に登りて、見めぐらせば、頂天に付きて嶮しき山、遙に見ゆ。俊隆いさをしき心、早き足を出して行くに、辛くして其の山に至りて見渡せば、千丈の谷の底に根をさして、末は空につき、枝は隣の國にさせる桐の木を、倒して割り木づくる者あり。頭の髪を見れば剣を立てたるが如し、面を見ればほむら燃ゆるが如し、足手を見れば鋤鍬の如し、眼を見れば金椀の如くきらめきて、いみじき姫翁、子ども、孫など率下、頭を集へて木を切りこなす。俊隆さだめて知りつ、我身は此山に亡しつ、と思ふものから、いかしき心をなして、阿修羅の中に交りぬ。阿修羅大きに驚きて曰く、「汝は何ぞの人ぞ—俊隆答ふ、「日本國王の使、清原俊隆。此の木切る音を尋ぬること三年になりぬ。今日をもてなん此の山を尋ね得たる」といふ。阿修羅怒れる容貌をいたして、阿修羅「汝何によりてか、阿修羅の萬劫の罪の半過るまで、虎狼蟲けらと雖も、人のけちかきをあたりて、寄せず、山のほとりに翔り来る獸は、阿修羅の食とせよと宛てられたり。如何に思ひてか、人の身を受けて、汝が此處に来れる。速かに其の由を申せ」と眼を車の輪の如く見くるべかして、牙を劍の如く喰ひ出して怒る。俊隆涙を流して答ふ、あなかしこ、此の山を尋ぬること、烈しき巖齧出るまで、獸のはげし

- 〔語釋〕
- (三) 勇猛なる
- (五) 佛敎の六道の中、三善道の最下級、猜忌の心深く闘争を好むといふ
- (七) 萬劫を経て始めて滅すべき罪、劫は非常に永き時間の稱
- (二) くるく—と動かし
- 〔考異〕
- (一) 面を見ればほむら燃ゆるが如し。ナン。一面を見ればほむらたけるが如し
- (二) いみじき姫翁子ども—いみじき女翁をさなき子ども—いみじき女をさなき子ども
- (四) いかしき—はしたなき
- (六) 此の木切る音を—此の音を
- (八) 罪の半—罪半
- (九) 食とせよ—食にせよ
- (一〇) 如何に思ひてか—いかずか
- (一一) 輪の如く—輪のごと
- (一二) 牙を—齒を

木を、倒して割り木づくる者あり。頭の髪を見れば剣を立てたるが如し、面を見ればほむら燃ゆるが如し、足手を見れば鋤鍬の如し、眼を見れば金椀の如くきらめきて、いみじき姫翁、子ども、孫など率下、頭を集へて木を切りこなす。俊隆さだめて知りつ、我身は此山に亡しつ、と思ふものから、いかしき心をなして、阿修羅の中に交りぬ。阿修羅大きに驚きて曰く、「汝は何ぞの人ぞ—俊隆答ふ、「日本國王の使、清原俊隆。此の木切る音を尋ぬること三年になりぬ。今日をもてなん此の山を尋ね得たる」といふ。阿修羅怒れる容貌をいたして、阿修羅「汝何によりてか、阿修羅の萬劫の罪の半過るまで、虎狼蟲けらと雖も、人のけちかきをあたりて、寄せず、山のほとりに翔り来る獸は、阿修羅の食とせよと宛てられたり。如何に思ひてか、人の身を受けて、汝が此處に来れる。速かに其の由を申せ」と眼を車の輪の如く見くるべかして、牙を劍の如く喰ひ出して怒る。俊隆涙を流して答ふ、あなかしこ、此の山を尋ぬること、烈しき巖齧出るまで、獸のはげし

〔語釋〕
 (一)「はむら」はこむら
 (勝)の悪弊
 (二)大般若波羅密多經
 (二五)上の「あさき」は行
 文にて、心配の深くなら
 ぬ前に顔を見せよの義な
 るべし

〔考異〕
 (一)「匪を」肌を
 (三)「至り」至りて
 (四)「尋ね」尋ねて
 (五)「別れし日より」別れ
 しより
 (六)「昔の犯の深き」より
 一「昔犯し」罪により
 (七)「あれど」あれども
 (八)「父母あり」と「父母の
 あり」と
 (九)「申すに」よりて「ハ
 ば」
 (一〇)「命を」罪を
 (一一)「大なる」思ひの
 (一二)「一生に」一生
 (一四)「嘆」嘆を
 (一六)「あひ向へ」あひむ
 かへむむかへむ
 (一七)「多くの」ナシ

き中を分け出づる時は、ほむらは炎熱く、劍脛を貫き、悪をふくめる毒蛇に向ひ
 て、もとの國より此の國に至り、棲みし林より此の山を尋ね、父母が手を別れし
 日より今日までのことを答ふ。阿修羅、「我等昔の犯の深きによりて、悪しき身を
 受けたり。然あれば、忍辱の心を思ふ輩にあらす。然はあれど、日本の國に忍
 辱の父母ありと申すによりて、四十人の子どもの悲しく、千人の眷屬の悲しきに
 よりて、汝が命を免しをはんぬ。汝速に罷り歸りて、阿修羅の爲に、大般若を
 書きて供養せよ。汝日本の父母に向ふべき便を與へむ」といふ時に、俊蔭伏し拜
 みて曰く、「日本より山を尋ねる大なる心ばへは、父母が愛子として、一生に一人
 子なり。親のかへりみの厚く、慈悲の深かりしを捨てて、國王の仰の長かりしに
 よりて渡れり。其の父母紅の涙を流して宣はく、汝不孝の子ならば、親に長
 き嘆あらせよ、孝の子ならば、あさき思ひのあさきにあひ向へ、と宣ひき。さる
 を俊蔭、あたの風、大なる波に逢ひて、おほくの輩を滅ぼして、一人知らぬ世



〔語釋〕
 (三)勞せるの義なるべし
 (七)欲界、色界、無色界の三界の中、欲界の第二天
 (八)前世の父母
 (一五)現在の阿修羅道の身を解脱してよき道に生れんと
 (一六)我さへ此の木の一
 分を己の物とする事能はず
 〔考異〕
 (一)然れば一然れば
 (二)子一人
 (四)此の木一寸を此の木一寸を
 (五)下りまして一ナシ
 (九)段は一段をば
 (一〇)山守に山守と
 (一一)花の園一花園
 (一二)まし〜て一まし
 (一三)罪だにあり一罪だにあり
 (一四)悪しき様一悪しき
 (一七)汝が一分あたらしむ一汝に一分與へ一汝に與へむ

界に漂ひて、年久しくなりぬ。然あれば不孝の子なり。此の罪を免れむ爲に、倒さるゝ木の片端を賜はりて、年頃らうせる父母に、琴の聲を聞かせて、其の報となさむ」といふ時に、阿修羅いや益々に怒りて曰く、阿修羅、汝が累代の命を止めんとて、此の木一寸を得べからず。其の故は、世の父母、佛になり給ひし日、天稚御子下りまして三年掘れる谷に、天女くだりまして、音聲樂をして植ゑし木なり。さてすなはち天女宣はく、此の木は、阿修羅の萬劫の罪半すぎむ世に、山より西にさしたる枝枯むものぞ、其の時に倒して、三分にわかちて、上の段は三寶より始め奉りて、切利天までに及ぼさむ、中の段は先の親に報い、下の段は行末の子どもに報いむ、と宣ひし木なり。阿修羅を山守になされて、春は花の園、秋は紅葉の林に、天女下りまして、遊び給ふ所なり。たはやすく來れる罪だにあり。況んや許多の年月、撫でおほし立てて、萬劫の罪滅ほさむ、悪しき様免れむとてまもり木造れるを、己が一分の徳なし。何によりてか、汝が一分あたらしむ」

〔語釋〕
 (六)前に述べたる天女の命令に思合せて悟りたる也
 (九)恒河沙は極めて大なる數をあらはす詞
 (一四)中央の處を二分して作れる琴をひく時は
 〔考異〕
 (一)食まむ一かまむ
 (二)書けること一書ける詞に
 (三)施せ一施す
 (四)書けり一ありけり
 (五)をがむ一をがみ
 (七)子にこそ一子にてこそ
 (八)上中二つの段は一上中の段は
 (一〇)降りまして一降りまして
 (一一)降りまして一降りまして
 (一二)織女に一ナン
 (一三)出來て一吹き出て

と言ひて唯今食まむとする時に、大空かい暗がりて、車の輪の如くなる雨ふり、雷鳴り閃きて、龍に乗れる童、黄金の札を阿修羅に取らせて昇りぬ。札を見れば書けること、「三分の木の下の段は、日本の衆生俊陰に施せ」と書けり。阿修羅大に驚きて、俊陰を七度伏し拜む。阿修羅あな尊。天女の行末の子にこそおはしけれ」と尊びて曰く、阿修羅、此の木の上中二つの段は、大福德の木なり。一寸をもちて空しき土を叩くに、一萬恒河沙の寶湧き出づべき木なり。下の段は、聲をもちてなむながき寶となるべき」といひて、阿修羅木を取り出でて割り木づくる響に、天稚御子降りまして、琴三十造りて昇り給ひぬ。かくて即ち、音聲樂して、天女降りまして、漆塗り、織女に絡捻りすけさせて登りぬ。かくて三十の琴を造りて、俊陰、此の林より西にあたる梅檀の林にうつろひて、此の琴の音を試みむ、とて出で立つ程に、旋風出來て三十の琴を送る。其處にて音を試みるに、二十八は同じ聲なり。半を二に造れるは、山くづれ地割れ裂けて、

俊蔭天女の教に隨ひて
尚西に行く。仙人に琴を
習ふ。佛の蔭等に過去未
來の因果を示す。俊蔭波
斯國に還る

(七)此句句を隔てて「便
なきすまひはする」へか
かる

(考異)

(一)音を一音の

(二)當れる一當る

(三)試みる一試む

(四)春の日の長閑一春の
日のいと長閑一春の日長
閑

(五)霞縁に霞みわたり

(六)面白く面白し

(八)阿修羅の阿修羅が

(九)木得たまひし一木を
得たまへる

(一〇)賜はりし一賜はれ
る

(一一)天人一天女

七山一つにゆすりあふ。

俊蔭清く涼しき林に一人詠めて、琴の音を有るかぎりかき立てて遊ぶに、三年といふ年の春、此の山より西に當れる花園に移りて、琴ども並べ置きて、大なる花の木蔭に宿りて、我國のこと、父母のこと思ひやりつと、聲まさりたる二つの琴を試みる。春の日の長閑なるに、山を見れば霞縁に、林を見れば木の芽けぶりて、花園の花さかりに面白く、照る日の午の時ばかりに、琴の音をかきたて、聲ふりたてて遊ぶ時に、大空に音聲樂して、紫の雲に乗れる天人、七人連れて降り給ふ。俊蔭ふし拜みて猶遊ぶ。天人花の上に下り居て宣ふ、「哀何ぞの人か、春は花を見、秋は紅葉を見ると、我等が通ふ所なれば、蝶鳥だに通はぬに、便なきすまひはする。若し、これより東に阿修羅の預りし木得たまひし人か」と宣ふ。俊蔭「其の木賜はりし衆生なり。かく佛の通ひ給ふ所とも知らで、しめやかなる所となむ思ひて、年ごろ籠り侍る」と答ふ。天人の曰く、「さらば、我等が思

(語釋)
(二)家を與すべき人、俊蔭をいふ

(五)習ひ得て

(考異)

(一)なりけり一なめり

(三)我その昔一我は昔

(四)こよりは西一こより西

(六)西へ猶行けば一西に行けば

ふ所ある人なれば住み給ふなりけり。天の掟ありて、天の下に琴ひきて族立つべき人になむありける。我その昔、些なる犯ありて、こよりは西、佛の御國よりは東なる所に降りて、七年ありて、そこに我子七人とまりにき。其の人は、極樂淨土の樂に琴を弾き合せて遊ぶ人なり。そこに渡りて、其の人の手を弾き取りて、日本國へは歸り給へ。この三十の琴の中に、聲まさりたるをば我名づく。一つをばなん風とつく。一つをばはし風とつく。この二つの琴をば、かの山の人の前にてばかり調べて、また人に聞かすな」と宣ふ。天人「此の二つの琴の音せん所には、娑婆世界なりとも、必ず訪らはむ」と宣ふ。

俊蔭、天人の宣ふに従ひて、花園より西をさして行けば、大なる川有り。其の河より孔雀出來て、其の川を渡しつ。琴をば例の旋風おくる。其れより西へ行けば、谷有り。其の谷より龍出來て越しつ。琴は旋風おくりつ。其れより西へ猶行けば、嶮しき山七つあり。其の山より仙人出でて越しつ。其れより西へ行けば、虎、狼

〔語釋〕
 (一) 満山
 (六) 天人が仰せられしに
 よりて也
 (二) 打連れて

〔考異〕
 (二) 歩いて来て―象犀出
 来て

(三) 七人の人―七つの人
 (四) 宣ひしが如くに―い
 ひしが如くに

(五) 参り来つることは―
 参りつる事は

(七) 其の時に―この時に
 (八) 日本の人なれど花園
 よりと―日本のみかど花
 園よりと
 (九) 同じ木―同じき木
 (一〇) 琴どもを皆同じ如
 く―琴ども皆同じごと
 (一一) 試みて―ナン

ひと山騒ぐ所有り。象いで来て其の山を越しつ。其れより西へ行けば、七つの山
 (二) に七人の人有りて、宣ひしが如くに棲む所に至りぬ。一つと云ふ山を見れば、梅
 檀の木の陰に、林に花を折り敷きて、琴弾く人、年三十ばかりにて有り。俊蔭立ち
 居拜む。山の主大に驚きて、「是は何ぞの人ぞ」俊蔭答ふ、「清原俊蔭。参り来つ
 ることは、しかぐ宣はせしかばなむ」其の時に山の主、「あはれ蓮花の花園、己
 が親の通ひ給ふ所よりか。日本の人なれど、花園よりと聞けば、佛の通ひ給はん
 よりも尊く」とて、同じ木の陰にするて、事の由を委しく問ひ給ふ。俊蔭初より
 の事を委しく申す時に、つじ風例の琴どもを皆同じ如くおきつ。其の時に山の主、
 俊蔭が琴の音を試みて、悲しび給ひて、俊蔭とつらね給ひて、「二つといふ山に入
 り給ふ時に、其の山の主珍しがり給ふ。まらうとの聞え給ふ、「あやしう、蓮花の
 花園よりといふ人の有りつれば、母の恩の悲しく、乳房の戀しさになむ、率て参
 りつる」と宣へば、主哀がりて、三人連れて、三つといふ山に入り給ふ。其處に

〔考異〕
 (一) 四つといふ山に―奥

(二) 地は瑠璃なり―地は
 皆瑠璃なり

(三) 鳳凰―ナン

(四) 山の主―その山の主

(五) 其の乳房の戀しき―
 母の乳房の戀しき

(六) 供養と―供養に

(七) 乳房と―ナン

(八) 親天上―親の天上

も同じごと宣ひて、四人つれて四つといふ山に入り給ふ。其處にも同じごと宣ひ
 て、五人つれておくへ入り給ふ。其處にも同じごと宣ひて、六人つれておくへ入
 り給ふ。其處にも同じごと宣ひて、七人つれて入り給ふ。其の山の様は心殊なり。
 山の地は瑠璃なり。花を見れば匂ごとに、紅葉を見れば色ことにほごりに、淨
 土の樂の聲、風にまじりて近く聞え、花の上には鳳凰孔雀つれて遊ぶ所に、七人
 つれて入り給ひて、其の山の主を拜み給ふ。山の主喜び畏まり給ふ時に、客人
 申し給はく、「日本人、蓮花の花園よりとて来たれば、其の乳房の戀しさになむ、
 花園をかけてもいふ人なれば、山の輩舉りて、率てまうで来つる」と宣ふ時に、
 山の主俊蔭に宣ふ、「己は、天上より来り給ひし人の御子どもなり。此の山に下り
 給ひて、七年棲み給ひし程に、一年に一人を當てて、七人の輩となりにき。己
 等がいとけなきを見捨てて、天上へ歸り給ひにしかば、乳房のかよひ給はぬ所に、
 いとけなき輩、花の露を供養とつけ、紅葉の露を乳房となめつとあり經るに、親

(語釋)
 (一)世話する人もなき
 (四)瞬間に
 (五)三界二十八天の中の
 欲界の第四天

(考異)
 (一)此の響—此の響の響
 (二)見にゆけ—とみに行
 (三)見にゆけ—とみに行
 (六)事難し—事なり難し
 (七)かくと—ナシ

天上し給ひて後、天つ風につけても訪れ給はず、知る人もなき天の下に止め給ひて、劫のかはるまで訪れ給はぬを、仄かに聞けば、是より東なる花園になむ、春と秋と下り給ふなるを、花園よりと承はれば、親の御あたりの戀しさに、娑婆世界の人の通はぬ所なれども、對面するぞ」とて、此の琴八つを一つつ調べて、七日七夜弾くに、此の響佛の御國まで聞ゆる時に、佛文珠に宣はく、「是より東、娑婆世界より西に、天上の人の植ゑし木の聲すなり。見にゆけ」と宣ふ時に、文珠獅子に乗りて、利那の間に至りて問ひ給はく、「汝は何ぞの人ぞ」と問ひ給ふ時に、七人の人皆禮拜して申さく、「我は昔都卒天の内院の衆生なり。聊かなる犯ありて、切利天の天女を母として、此の世界に生れて、七人の輩同じ所に棲ます、また相見る事難し。然あるを、乳房の通ふ所よりとて渡れる人の悲しさに、七の輩集ひて承はるなり」と申すに、文珠歸りて佛にかくと申し給ふ時に、佛文珠を引き連れて、雲の輿に乗りて渡り給ふ時に、此の山川常の心地せず、山のす

(語釋)
 (一)阿彌陀の名號を一心不亂に唱へて感通念佛を行ふをいふこと
 (二)不詳
 (三)佛が帝釋に向つて説きし神呪、之を念ずれば一切の苦を除き福徳を得るの効ありといふ
 (四)比類なく専らに
 (考異)
 (一)變りて—變り
 (二)等—ナシ
 (四)深く犯は—深く犯は
 (五)生れたり—生れたたり
 (六)人の身—淨土の身
 (七)故を—故は
 (八)然れば—然れば
 (九)して—しつゝ
 (一〇)八生—五百生
 (一一)千人—二千入
 (一二)又—ナシ
 (一三)母一人—子一八
 (一四)人なり—機なし
 (一九)誦して—勤めて

の大空響きて、雲の色風の聲變りて、春の花秋の紅葉、時分かす咲きまじる儘に、遊び人等、いとど遊びまさる程に佛渡り給ひて、即ち孔雀に乗りて花の上に遊び給ふ時に、遊び人等、阿彌陀三昧を琴に合せて七日七夜念じ奉る時に、佛現れて宣はく、「汝等は、昔勤深く犯は浅かりしによりて、都卒天の人と生れにき。今あさましかりし瞋恚の報に、國土の衆生に生れたり。其の業やうく盡きたり。又此の日本の衆生は、生々世々に人の身を受くべきものに非ず。其の故を如何にといへば、前の世に、淫欲の罪はかりなし。然れば輪廻して、一人が腹に八生宿り、千人が腹に各又八生宿るべし。其の宿るべき母一人、人の身を受くべき人なり。然あれど、昔大そんはむなといひし仙人ありき。其の仙人のせしことは、昔慳貪邪見なる國王ありて、國亡びて、諸の衆生國土の人、穀につかれし時ありき、其の時に此の仙人、萬恒河沙の衆生に穀を施して、尊勝陀羅尼を無等三昧に行ひ誦して七年ありき。其の時に日本の衆生、三年謹みて、彼の仙人に菜摘み

〔語釋〕
(五)第七の山の仙人也

〔考異〕
(一)得たるなり得たり
しなり

(二)故なり故に人にな
り

(三)至りて入りて

(四)七人七人の子

(六)其の果報其の報

(七)の人ナレ

(八)宣ふ一宣ふ礎

水汲みせし功德の故に、輪廻生死の罪を滅ほして、人の身を得たるなり。尊勝陀羅尼を念じ奉る人を供養したる故なり。今も亦人の身を受けんことは難しと雖も、今此の山に至りて佛菩薩を驚かし、懈怠邪見の輩に忍辱の心を起さしむる故に、此の山の七人残れる業を滅ほして天上に歸るべし。日本の衆生、此の因縁に、生々世々に佛に逢ひ奉り、法を聞くべし。又此の山の族七人に當る人を、三代の孫に得べし。其の孫、人の腹に宿るまじき者なれど、此の日本の國に契結べる因縁有るによりて、其の果報豊なるべし」と宣ふ時に、遊び人等禮拜し奉る。俊蔭此の琴を佛より始め奉りて菩薩に一つづつ奉る。乃ち雲に乗り、風に靡きて歸り給ふに、天地震動す。

かくて俊蔭、今は日本へかへらむと思ふに、此の七人の人に、琴一つづつとらす。七人紅の涙を流して惜しむ。俊蔭往き難にして歸る。七人の人音聲樂して、孔雀の渡しと川の邊まで送る。其れより歸るとて宣ふ、「我等日本まで送り奉らま

ほしけれど、山口をだに出でやらぬ輩なれば、別の悲に、こよまでだに参り來つるなり。こよにて日本國まで送り奉るべき人をさふらはせむ」と宣ひて、聊かなる法を作りかけつ。彼の國まで持て歸るべき琴には、おのがたぶさの血を

〔語釋〕
(二)手くび

(五)村田春海曰、三十の琴の中佛に奉り仙人に贈りし残りの中天女仙人の名づけしは十二也。尚名もなきが残りたるを白木といふなるべし

(六)太子

〔考異〕
(一)ゆれどゆれども

(三)はそを風はうを風

(四)やどもり風やどり風

一つをばやどもり風、四つをば山もり風、五つをばせた風、六つは花園風、七つをばかたち風、八つをばみやこ風、九つをばあはれ風、十をばおりめ風と書きつけて、七人の人歸りぬ。俊蔭歸れば例の旋風出來て、琴をば巻き取りつ。天女の名付け給ひし、とりあはせて十二、白木のもとり加へて、巻き揚げつ。俊蔭三年棲みし山に至りて、事の様を語りて、月日の様など委しくいふ程に、旋風、此の巻き揚げし琴を此の三人のついで居たる前に巻きもて來て下し置きつ。そのかみ俊蔭、此の白木の琴を此の人々に一つづつ奉る。珍らしがり喜ぶこと限りなし。

かくて俊蔭、日本へ歸らんとて、波斯國へ渡りぬ。其の國の帝、后まうけの君に

- (一) 語釋
- (二) 琴を調ふる間は
- (三) 琴を調ふる間は
- (四) 白骨
- (五) 腹に服す
- (六) 立派なりし
- (七) 學問の道

俊隆朝、源氏の女を娶る。式部大輔兼左大辨に任ぜらる。一女を生む。

- (一) 召す參れるに召して
- (二) 召す參れるに召して
- (三) 召す參れるに召して
- (四) 八十歳なる一八十歳に
- (五) 八十歳なる一八十歳に
- (六) 思へども効なくて一思へども効もなくて
- (七) 申さずれば一申し奏さずれば
- (八) 申さずれば一申し奏さずれば
- (九) 事は一事をば

此の琴を一つづつ奉る。帝大きに驚き給ひて、俊隆を召す。參れるに、事の由を委しく問ひ給ひて宣はく、「此の奉れる琴の聲、荒き所あり。暫し弾き馴らし奉れ」と宣ふ。帝他の國の人なれど、渡りて久しくなりにけり、其の程は勞りて候はせむ」と宣へば俊隆申す、「日本に年八十歳なる父母侍りしを、見捨てて罷り渡りにき。今は塵灰にもなり侍りにけむ。白き屍をだに見給へむとてなむ急ぎ罷るべき」と申す。帝哀がり給ひて、暇を許し給ひつ。

交易の船につきて、二十三年と云ふ年、三十九にて日本へ歸り來れり。父かくれて三年、母かくれて五年になりぬといふ。俊隆嘆き思へども効なくて、三年の孝送る。公に事の由を申さずれば、帝、(六)「いとるせかりしもの歸りまうで來れること」と喜び給ひて、召して事の有様問はせ給ふ。俊隆有りし事の限り奏すれば、帝哀がり興せさせ給ひて、式部少輔になされぬ。殿上聽されて東宮の學士仕るべき由仰せらるる程に、(七)「道の事は俊隆に預く。ついで残さず、才に従ひて出立て、世に従ひ、人しづめ、憂あらずな」と宣はす。容貌有様すべて人に勝れたれば、我もくと娘、妹持ちたる人は、婿にせむくと宣へど、佛の淫欲の罪重きを、たてよ宣ひしかば、つよしみてのみ過しけれど、(八)「一世の源氏の心魂人に勝れ給へりけるを得て、其の腹に女子一人生まれませつ。かなしうする事限なし。俊隆位まさりて、式部大輔にて左大辨兼けつ。」

- (一) 語釋
- (二) 特に
- (三) 源姓を賜はりし人の子源野王といふ人の娘をること末に見えたり
- (四) なん風はし風
- (五) 俊隆を所々に奉る。琴の師仕るべき物を辭す
- (六) 宣へどよよと
- (七) たてよよかた
- (八) つよしみてつよ
- (九) 思ふやう一思ふはに
- (一〇) 千隆一ちかか

女四になる年の夏より、大きに、心も敏く賢し。父が思ふやう、今は我女物習ひつべき程になりたり。我が身を捨てて習ひし琴、此の女に習はさむと思ひて、彼の波斯國より持て渡りし琴どもを取り出でて、(九)「二つの琴をば、人にも知らせで、今十を、りうかく風をば、女のにす。ほそを風をば我がにて、やどもり風といひしを殘して、今七つを持たせて、内裏へ參る。せた風をば帝に奉る。山もり風をば后宮に奉る。花園風をば東宮に奉る。みやこ風をば東宮の女御に奉る。かたち風をば左大臣忠經に奉る。おりめ風をば右大臣千隆に奉る。」

〔語釋〕
 (一) 學問の道
 (二) 俊隆に劣るとも

〔考異〕
 (一) どもは—どもをば
 (二) なりぬるに—なりにけるに
 (三) 悉く—くはしく
 (四) これが聲—この聲
 (五) 弾きつかうまつるに—つかうまつるに—ひくにひつき高うて
 (六) 上の—ナシ
 (七) 給ひ—ナシ
 (八) ゆいこく—ゆうこく
 (九) くせこゆくはら—くせとゆくはら
 (一〇) 傳—ナシ

帝^{みかど}琴^{こと}どもを試^{こころ}み給^{たま}ふに、おどろくしき聲^{こゑ}出^いで來^く。驚^{おどろ}き給^{たま}ひて宣^{のたま}はく、^(一)此^{こゝ}の琴^{こと}どもはいかで作^{つく}りしぞ。手^て觸^ふれで久^くしくなりぬるに、聲^{こゑ}もしらまず、七^{なな}つながら同^{おな}じ聲^{こゑ}にはいかで調^{しら}ひたるぞ」と問^とひ給^{たま}ふ時^{とき}に、有^ありし様^{よう}を悉^{ことごと}く奏^{そう}す。帝^{みかど}大^{おほ}に驚^{おどろ}かせ給^{たま}ひて、感^{かん}ぜしめ聞^き召^めす事^{こと}限^{かぎ}なし。^(二)嵯^さ峨^あ「これが聲^{こゑ}未^まだなれずなむある。調^{しら}へて奉^{たてまつ}れ」と仰^{おほ}せらるゝ時^{とき}に、俊^{しん}隆^{りゆう}せた風^{かぜ}を賜^{たま}はりて、聊^{いささ}かかき鳴^ならして大^{たい}曲^{きよく}一つを弾^ひきつかうまつるに、大^{おほ}殿^{どの}の上^{うへ}の瓦^{かへら}碎^{くだ}けて花^{はな}の如^{ごと}く散^ちる。今^{いま}一つつかうまつるに、六^む月中^{げつちゆう}の十^{じゅう}日の程^{ほど}に、雪^{ゆき}ふすまの如^{ごと}く凝^こりて降^ふる。帝^{みかど}大^{おほ}に驚^{おどろ}き給^{たま}ひて宣^{のたま}ふ、^(三)嵯^さ峨^あ「けに此^{こゝ}の調^{しら}べは、珍^{めづ}らしき手^てなりけり。これはゆいこくといふ手^てなり。くせこゆくはらといふ曲^{きよく}なり。唐^{たう}の帝^{みかど}のひき給^{たま}ふに、瓦^{かへら}碎^{くだ}けて雪^{ゆき}降^ふる、となん言^いひ傳^{たづ}へたる。此^{こゝ}の國^{くに}には未^まだ見^みぬことを、怪^{あや}しう珍^{めづ}らしき人^{ひと}の才^{さい}かな。昔^{むかし}二度^{たひ}試^{こころ}せしにも、其^{その}の道^{みち}の珍^{めづ}しうすぐれたりしかば、官^{つかさ}をも其^{その}の道^{みち}に賜^{たま}ひ、學^{がく}士^しをも仕^{つか}うまつらするに、文^{ふみ}の道^{みち}は少^{すく}したじろぐとも、其^{その}の筋^{すぢ}は多^{おほ}かり。此^{こゝ}の琴^{こと}は此^{こゝ}の國^{くに}に俊^{しん}



俊
隆

〔語釋〕
 (二)琴を東宮に教へたら
 (七)琴を東宮に教へ奉る
 勇氣はなしの義歟

〔考異〕
 (一)難いたすべき難ず
 (三)納言の位―直衣の位
 (四)申オ―ナシ
 (五)父母を―父母に
 (六)悲しび―悲しみ
 (八)無禮―みらい
 (九)する―するの
 (二〇)勝りて―勝る
 (二一)一つ残さず―一つ
 も残さず

俊隆三條京極に隱居す。女に琴を習はす。治部卿兼琴議に任ぜらる

陰一人こそ有りけれ。學士をかへて、二琴の師をつかうまつれ。東宮さとり有る御子なり。物の師せん人の難いたすべき御子にあらず。心に入れて、残す手なくつかうまつらせたらば、納言の位賜はせむ」と宣ふ時、俊隆申す、「いとさなき程に、父母を離れて、唐土へ渡されぬ。あたの風、大なる波に漂はされて、知らぬ國に打ち寄せらる。深き悲しびこれに過ぎたる事なし。辛くして歸りまうで來たるに、父母亡びて、空しき宿をのみ見る。昔、宣旨にかなひて、度々の試を賜はりて、唐土に渡されぬ。父母に逢ひ見ずして長く別れて悲しびは餘りありと雖も、學びつかうまつる勇はなし。無禮の罪にはあたるとも、此の琴は學びつかうまつらじ」と申して、罷り出でぬ。

かくて、公にもかなはず、官位も辭して、三條のする京極の大路に、廣く面白き家をつくりて、女に琴を習はす。女一わたりに曲一つを習ひて、一日に大曲五つ六つを習ひとりつ。同じくかきならす聲、父に勝りて、父がひく手、一つ残さず

〔語釋〕
 (七)夜が明けさへすれば
 (二)巨勢利和云、「公に仕へて叶ふまじき」などあるべし。

〔考異〕
 (一)貧しくて―貧しくして
 (二)あたりも光り―あたり光り
 (三)世に―世の
 (四)我も御返事聞えず―悉くも御返り聞えず
 (五)御返―御返も
 (六)めぐり―めぐりて
 (八)竝みたれど―竝み居たれど
 (九)取り入れもせず―出て入りもせず
 (二〇)經る―ける
 (二二)二十五歳に―「に」ナシ

俊隆夫婦の逝去、遺言、家道の零落、孤兒の孤しき生活。

習ひ取りつ。此の程家貧しくて、思ふ程にしたてず。十二三になる年、容貌更に言ふ限なし。あたりも光り輝きて、見る人眩ゆきまで見ゆ。心のらうくじき事世に聞え高くて、帝東宮、父に召し、女にも御文賜へど、我も御返事聞えず、女にも御返せさせず、さらぬ上達部、御子たちは、まして御文見入るべくもあらず。俊隆「女は天道に任せ奉る。天の掟あらば、國母女御ともなれ。掟なくば、山がつ、民の妻ともなれ。我乏しく貧しき身なり。いかでか高き交らひはせさせむ」と言ひて、良き人の宣へど、耳にも聞入れず、家の門は、めぐりさして、帝東宮の御文持たる御使、なべての人の使は、明けたてば立ち竝みたれど、取り入れもせず、唯琴を習はしてあり經る程に、公に叶ふまじきものなりとて、治部卿かけたる宰相になされぬ。

かゝる程に、女十五歳になる年の二月に、俄に母かくれぬ。それを嘆く程に、父病づきぬ。父弱く覺ゆる時に、女を呼びて言ふ様、俊隆「我ありつる世には、我子に

〔釋語〕
(四)人に交れんとする時わが物なりと辯解する

(五)我が死後

(九)沈香

(一一)紐をなせる兵士

〔考異〕

(一)經ければ―ふれば

(二)庄々―威々

(三)誰かは―誰か

(六)爲に―に―ナシ

(七)一丈ばかり―「はかりナシ

(八)其れが―その

(一〇)さち―に―たよ

たよに

高き交らひもせさせむと思ひつれども、若くては知らぬ國に渡り、此の國に歸り來ても、公にも叶ひつかうまつらで程經ければ、貧しくて、我子の行先の控せずなりぬ。天道に任せ奉る。我領する庄々はた多かれど、誰かは言ひわく人あらむ。ありとも誰か言ひ纏はし知らせむ。但し、命の後、女子の爲に、氣近き寶とならむものを奉らむ」と宣ひて、近く呼び寄せて、萬の事を言ひて、彼處、此の家乾の隅の方に、深く一丈ばかり掘れる穴あり。其れが上下ほとりには、沈を積みて、此の弾く琴の同じ様なる琴、錦の袋に入れたる一つと、褐の袋に入れたる一つ。錦のはなむ風、褐のをばはし風と云ふ。其の琴、我が子と思さば、ゆめさらさらに、人に見せ給ふな。唯其の琴をば、心にも無きものに思ひなして、永き世の寶となし、幸あらば其の幸極めん時、禍極まる身ならば、其の禍限になりて、命極まり、又虎狼熊獸に交りさすらへて、獸に身を施しつべく覺え、若しは伴の兵に身をあたりぬべく、若しは世の中にいみじき目見給ひぬべから

〔語釋〕

(三)容面の字音なるべし、容貌

(六)俊隆が

(七)收入もなく

(一〇)催促せし時こそ持つても來りしが

(一一)差配の者の得分になりて仕舞ひたり

(一四)家人どもが

〔考異〕

(一)琴をば―「ば」ナシ

(二)若しは―「は」ナシ

(四)ようめい―ようみやう

(五)遺言し―遺言をし

(八)ありけるをぞ呼びつかひける―ありけるを呼び使ひけり―ありけるを呼びつかひける

(九)言ひし如―言ひしが如

(一一)はたりし―はたりもて來し

(二三)騒ぎに―騒ぎに皆

(二五)皆―ナシ

む時に、此の琴をばかき鳴らし給へ。若しは子有らば、其の子十歳のうちに見給はむに、敏く賢く、魂とよのほり、ようめい心人に勝れたらば、其れに預け給へ」と遺言し置きて絶え入り給ひぬ。又同じ頃ほひに、めのともし亡くなりぬ。

心と身を沈めし程に、ことに身の得もなく久しくなりにしかば、まして一人のつかひ人も残らず。日に従ひて失せ亡びて、物の心も知らぬ女一人残りて、物恐ろしくつよましければ、有るやうにもあらず、隠れ忍びてあれば、人も無きなめりと思ひて、萬の往還の人は、家どもも毀ち取りつれば、寢殿一つのみ、寶子もなくて有り。程もなく、野の様になりぬれば、女は唯乳母の使ひける從者の下屋に曹司してありけるをぞ呼び使ひける。父主の言ひし如、所々の庄より持て來しも、使やりなどしてはたりし時こそありしか、斯くむけになりぬれば、唯預りのものの喜びにてやみぬ。はかなく打使ふ調度なども、親たちの亡くなりける騒ぎに取り隠してしかば、皆失せ果てにけり。世の中も知らぬ若き心地に、いと哀

〔語釋〕
 (一)めのとの従者
 (三)或本に器用の字を嘗てたり

(一〇)藤原某
 (二)身分卑き樂人

〔考異〕

(二)いへども「も」ナシ

(四)をかきし面白き

(五)なき所なれば「なけ

(六)凝りて「ひろごりて

(七)一人明け暮れ「明け暮れ一人

(八)木草「草木

(九)八月中の十日「八月十日」八月二十日

●藤原兼雅父に隨ひて賀茂に詣つ。歸途密に俊蔭女の許に宿す

に悲しく、春は花を眺め、秋は紅葉を眺めて明かし暮らすに、たゞ此の姫の食はすれば食ひ、食はせねば食はで有り。一人隠れ居るばかりの屏風、几帳、著るものばかりは、然はいへども、廣かりし所のなごりに、無くなりぬと見れど、猶しつらひて有り。父主、物のきようあり、心憎き所ありし人なれば、家の様をかしく、面白かりし所なれば、家廣く、植木面白く、草の様景色などなべてならずをかきし所にて、夏になるまよに、出で入りつくるふ人なき所なれば、蓬、葎さへ生ひ凝りて、人目稀にて、唯一人明け暮れ眺むるに、秋にもなりぬれば、木草の色異になりゆくを見るまよに、言ふかたなく悲しくて、斯く言ふ、

俊蔭女わび人は月日の數ぞ知られける明暮ひとり空をながめてなど獨言ちてなむ眺めける。

かくて、八月中の十日ばかりに、時の太政大臣、御願有りて賀茂に詣で給ひけるに、舞人陪從、例の作法なれば、いといかめしうて、此の俊蔭の家の前よりまう



- (一)前庭の供人
- (二)俊隆の女が
- (三)藤原忠雅
- (四)まだ元服せぬ子
- (五)藤原兼雅
- (六)俊隆の家
- (七)若小君の心
- (八)難すべき處をなし

で給ふ。舞人陪從、いかめしう御前數知らず過ぎ給ふを見ると、毀れたる葎の
もとに立ち寄りて見るに、遊び人、御車など過ぎて、立ち後れて、これも前追ひ
て、年二十ばかりの男、又十五歳ばかりにて、玉光り輝く髻鬘子の御馬添多くて渡
り給ふ。髻鬘子は、この大臣殿の御四郎に當り給ふ。父おとど限なく悲しうし給
ひて、片時も御眼離ち給はぬ御子なりけり。若小君となむ聞えける。此の家の垣
ほより、いとめでたく色清らなる尾花をれかへり招く。先に立ち給へる人、忠雅、怪
しく招くところかな」とて、

(考異)
(六)この一ナシ

(七)片時も「も」ナシ

(九)見ゆるは「見つるは

(一〇)袖ぞとは「袂とは

忠雅 吹く風のまねくなるべし花薄われよぶ人の袖と見ゆるは
とて渡り給ふ。若小君、
兼雅 見る人のまねくなるらむ花薄 我が袖ぞとはいはぬ物から
とて立ち寄り給ひて折り給ふに、此の女の見ゆ。怪しくめでたき人かな、心細け
なるすまひするかなと見給ふに、うち歩み入る後で、こともなし。若小君、哀と

- (一)暗くて「て」ナシ
- (二)暗くて「て」ナシ
- (三)一人一人に
- (四)彼の「この
- (五)野ら「ら」ナシ
- (七)池の「の」ナシ
- (九)聞え「聞ゆ
- (一〇)所に「所に
- (一一)あさぶに「くさ
- (一二)面白くて「て」ナシ

見給へど、一人行く路にしあらねば強ひて過ぎ給ひぬ。かくて御社に詣で著き給
ひて、神樂を奉り給ふ。若小君、晝見えつる人何ならむ、いかで見む、と思して、
暗くて歸り給ふに、一人立ち後れて、皆人渡りはてぬるに、若小君、彼の家の秋
の空靜なるに、見廻りて見給へば、野ら藪のごと恐ろしけなるものから、心有り
し人の、急ぐことなくて心に入れて造りし所なれば、木立よりはじめて、水の流
れたる様、草木の姿など、をかしく見所あり。蓬、葎の中より、秋の花はつかに
咲き出でて、池の廣きに月面白くうつれり。恐ろしきこと覺えず、面白き所を分
け入りて見給ふ。秋風河原風まじりて早く、草むらに蟲の聲亂れて聞え、月隈な
う哀なり。人の聲聞えず。かよる所に棲むらむ人を思ひやりて、獨言に、
兼雅 蟲だにもあまた聲せぬあさぶに獨りすむらむ人をこそ思へ
とて深き草を分け入り給ひて、家のもとに立寄り給へれど、人も見えず。唯薄の
みいと面白くて招く。隈なう見ゆれば、尙近く寄り給ふ。東、面の格子、一間あ

〔語釋〕
 (一)俊隆女也
 (二)伊勢物語の歌、此末は「隠るゝか山の端逃げて入れずもあぢなん」
 (五)めぐりを壁にしたる室

(六)俊隆女が
 (九)兼正の
 〔考異〕
 (三)内はいと暗ければ―暗くなれば
 (四)立寄りて―立寄ると
 (七)答もせず―いらむともせず
 (八)物宣へと宣ふ―とむどし給ひて宣ふ

けて、琴を密に弾く人あり。立ち寄り給へば入りぬ。兼雅「あかなくにまだきも月の」など宣ひて、兼雅「かよるすまひし給ふは誰ぞ。名のりし給へ」など宣へど、いらへもせず立ちぬ。内はいと暗ければ、入りにし方も見えぬ。月やうく入りて、兼雅立寄りて見るく月の入りぬれば影をたのみし人ぞわびしき
 (四)

又、兼雅入りぬればかけも残らぬ山のはに宿まどはして歎く旅人など宣ひて、彼の人の入りにし方に入れば、塗籠あり。其處に居て物宣へど、をさをさ答もせず。若小君、兼雅「あな恐ろし。物宣へ」と宣ふ。兼雅「おほろけにては、かく参り來なむや」など宣ふ。けはひなつかしう、童にもあれば、少し侮らはしくや覺えけん、

俊隆女かけろふの有るかなきかに仄めきてあるは有るとも思はざらなむ
 とほのかに言ふ聲、いみじうをかしう聞ゆ。いとと思ひ増りて、兼雅「誠にかよる

〔語釋〕
 (一)かく御尋ねに預かるは案外なり

(二)引歌あるべし未詳
 (四)晝間の事を語る也
 (五)引歌あらんか未詳
 (七)兼雅の心
 (八)既に女に近づきて後

〔考異〕
 (三)頼もしかなれ―頼もしけれ
 (六)いでや―いら
 (九)千重―一重
 (一〇)片時も―片時

哀なるすまひ、などてし給ふぞ。誰が御族にかものし給ふ」と宣へば、俊隆女「いさや。何かは聞えさせむ。斯うあさましき住居し侍れば、立ち寄り訪ふべき人もなきに、怪しく覺えすなむ」と聞ゆ。君、兼雅「疎きよりとしも言ふなれば、覺束なきこそ頼もしかなれ。いと哀に見え給ひつれば、えまかり過ぎざりつるを、思ふも著くなむ。親ものし給はざなれば、如何に心細く思さるらむ。誰とか聞えし」など宣ふ。女「いでや。誰と人に知られざりし人なれば、聞えさすともえ知り給はじ」とて前なる琴をいとほのかにかき鳴らして居たれば、此の君、いと怪しくめでたしと聞き居給へり。夜一夜物語し給ひて、如何ありけん、其處に止まり給ひぬ。

かくて、哀にいみじく心細け氣色を見給ひしより思ひつきにしを、まして近くては今千重まさりて、哀に悲しく思ほえて、親の御許に歸らざらむも何とも覺え給はねど、父母の思ひ子にて、片時も見え給はねば、思し騒ぎ給ふ子なり、かくて

〔語釋〕
 (三)人にして見せた例がなき故
 (五)此儘引續いて
 (六)他に家を持ち給へるか
 (七)兼雅が強ひて
 (八)世話してくれる人
 (二〇)御身を何といふ人ぞと思ひ込んで
 〔考異〕
 (二)二つなれば一つなれば
 (二)なども一など
 (四)夜半一よひ
 (九)さはあれ一さばれ

近く見馴るとまよに、片時立ち去るべくもあらず、見捨てて行かむも、哀にうしろめたく、覺ゆることの二つなれば、女に、兼雅「今はな思し隔てそ。然るべきにてこそ、かく見奉り初めつらめ。見奉らではえあるまじう覺ゆれど、見給ひし様に親なむおはする。片時御前も離ち給はず、内裏にまゐる程だに、うしろめたきものに思したれば、昨夜より斯くて侍るを、如何に覺し騒ぐらむ。又かよる罷りありきなども、わざとして人に見えねば、えしも思ふ儘にはまうで來じを、然るべからむ折に、夜半曉にも参り來んと思ふを、此處に誠にやがておはする人か。親やおはする。又通ひ給ふ所やある。あるらむ儘に宣へ」と宣へば女、いとどいみじき物思ひさへまさる心地して、恥かしくいみじけれど、せめて宣へば、俊藤「親もあり、知るべき人もある身ならば、かよる所に、假にても一人はありなむや。やがて此の棲處に朽ちぬべきより外の行方もなくなむ」といへば、兼雅「さはあれ、誰と聞えし人の子ぞ。若し心ならで参り來ずとも、つと思ひとりてなむあるべき」と



- 〔語釋〕
- (一)此儘ても居られず、兼雅の心
- (二)同じ家の中でも
- (三)親が我を
- (四)賀茂
- (五)賀茂
- (六)親が強ひて勧めし故行きし也
- (七)兼雅が来なくなる時
- (八)二重に
- (九)我が戀の根は深ければ此處へ通ふ道も亦る様は決してあるまじ
- 〔考異〕
- (一)誰とも知られ誰とも人に知られ
- (二)参り来べかりける
- (三)参り来べかりける
- (四)にて一ナシ
- (五)入り一ナシ

宣へば、俊薩女「誰とも知られざりし人なれば、聞ゆとも誰とは知り給はんや」とて、傍なる琴をかき鳴らして、打泣きたるけはひもいみじう哀なり。深き契を、一夜のゆく限しあかし給ふも、逢ひ難からむことを、今よりいみじう悲しう思さるる程に、明くなれば、さても有るまじう、殿にも思し騒ぐらんといみじければ、兼雅「尚如何すべき。今日ばかりは猶斯うてもと思へど、同じ所にてだに、片時お前ならぬ所にはする給はず、あからさまの御供にもはづし給はず。昨日心地の悪しく覺えしかば、参るまじかりしを、切に宣ひしかば。其も、斯う此處に参り來べかりけるにこそと、今なむ思ひ知らるる。更に心にては夢にても疎なるまじけれど、参り來む事のわりなかるべきこと」と宣へば女、俊薩女秋風の吹くをも嘆くあさぢふに今はとかれむ折をこそ思へとのかに言へば、ふたしへに、いとほしく哀なる事を思ひ入りて、兼雅葉するこそ秋をも知らぬ根を深みその路芝はいつか忘れむ

- 〔語釋〕
- (一)無沙汰するも人に氣兼ねればならぬ内だけの事
- (二)見る人は兼雅
- (三)茫然として
- (四)忠雅
- (五)父が贖責して
- 〔考異〕
- (一)見る人の一見る人も一ツや人の
- (二)見捨てつるに我か一見捨てつるにあれば
- (三)かろがへ宣ひて一かろに宣ひて
- 兼雅の行方不明、藤原一家の騒動、兼雅父母の監視に苦む

吾が佛、疎なりとな思しそ。さりとも、斯くてやむべきにもあらず。たゞつよましき程ばかりぞ」と宣ひて、おきて出で給ふに、猶いみじう悲しう思さるれば、單衣の袖を顔に押し當てて、とばかり泣き入りて、斯く宣ふ。兼雅宿思ふ我が出づるだにあるものを涙さへなどとまらざるらんと宣へば女打泣きて、俊薩女見る人のなごり有りけも見えぬ世をいかに忍ぶる涙なるらんといふ様もいと心苦しけれど、殿の事もいとほしければ、返すく契り置きて出で給ふ。殿の内をだに、人數多してこそ歩き給へ、唯一所歸り給ふに、何れの道とも知り給はぬうちに、哀なる人を見捨てつるに、我か人にもあらぬ心地して、見廻らして、辻に立ち給へり。大殿には、昨夜かく若小君おはしませずとて、御供に候ひける人々、兄の兵衛佐の君を、いみじうかうがへ宣ひて、佐の君をば、太政唯今此の子もとめ出でず

- 〔語釋〕
- (三)打ちしをらせの意跡
- (六)太政大臣夫婦
- (七)躰責せられたるをいふ
- (八)あるにかひなき身分
- (九)心たしかなる人も
- (一)兼雅が殿内に居る時さへ父母は氣にかくるものを
- 〔考異〕
- (一)せられ—せられぬ
- (二)雑色をば—雑色は
- (四)もとめ出—出「田」ナシ
- (五)物は—物をば
- (一〇)夜一夜—一夜

ば、我が子にせじ。如何してし」と責め給ふ。御前御馬添の男どもは、太政仕へ所に使はじ。獄所に候はせん」と勘當せられ、舍人、雑色をばうちしはらせなどし給ふ。御心を惑はして求め騒がせ給ふ。男ども、「もとめ出奉らんにおはしまさすば、首をも奉らん」と申しければ、暇給ひて、皆十人二十人と分れて、昨夜の道を求め奉る。兵衛佐御叔父の中將、又他人々も、すべて三十人ばかり連れて、先づおはしまいたる方を、賀茂の御社まで、願を立てて求め奉るに、三條京極の辻に立ち給へり。兵衛佐見付け聞え給ひて、忠雅など斯くいみじき物は思はせ給ふ。殿には、よべより、君おはせずとて、大臣の君、上、ものも聞し食さず、御心惑ひして、御供に仕うまつりたりし人々は、皆鼻つき放たれぬ。忠雅らもいたづら人になりぬべくてなむ。見給ひし様に、皆人酒の氣ありて、さかしき人も無かりしかば、君の止り給ひけんも知らず、殿まで物し給ひて、おはせさりしかば、今宵夜一夜思しさわぐを見給へれば、しづ心もなし。殿の中にある時だにあり、ま

- 〔語釋〕
- (一)過ちて列にはづれし雁。謎なるべし。
- (二)手引きしたる者あるべし
- (四)道祖神は路傍に立ち居るものなれば兼雅を共に比して嘲る也
- (七)御躰責を受け、おはうはほんの音便なるべし
- (九)けしからん事
- (一〇)兼雅の母
- (一一)誤あるべし
- (一二)兼雅をいふ
- (一四)太政大臣が
- 〔考異〕
- (三)雁こそ有りつらめ—雁ぞありつらむ
- (五)如何に騒ぎ—如何に求め騒ぎ
- (六)思はして—おぼして
- (八)たり—ナン
- (一三)宣はせて—宣ひて

して思し遣れ。そもくいかて止り給ひしぞ。何處よりおはするぞ」と宣へば、若小君、兼雅、皆人の捨てておはしにしかば、過したる雁の心地してなむ」と宣へば、佐の君打笑ひ給ひて、「先に立つ雁こそ有りつらめ。さらば此處にや昨夜より立ち給へりつる。怪しの道祖神や」と言ひて、忠雅「さばれ今の間も如何に騒ぎ給らむ」とて諸共におはしぬ。若小君、哀なることを、道すがら心苦しう思ほして、殿までおはしぬ。佐の君、忠雅「若小君辛うじて竟め出で奉れり」と宣ふ。大殿喜び給ふ。殿の男ども、おほう事にあたり、鼻つき放たれたりつる人々、喜びあへり。大殿、太政、如何に、何事により止りにしぞ。何時かよる歩きは習ひしぞ。いとたいだいしきことなり。我が心惑はず」とて責め宣ふ。北の方、「かばかり河原のわたりは、盗人多くて、人損ふなり。其れに、一人あらば、盗人打ち殺しては如何せまし。心定まらぬ人なりけり。更に宮仕もせさせじ。ありきならひて逃げ隠れんと思ふものなめり。我が前去るな」と宣はせて、内裏へ参り給ふ時は諸共に率て

- (一) 俊隆女の處へ
- (二) 兼雅の心
- (三) 使に言ひつけて遣るにしても
- (四) 使に言ひつけて遣るにしても
- (五) 様子を悟りて
- (七) 女の
- (一〇) 俊隆女
- (一一) 兼雅との會合
- (一二) 懐胎せし也
- (一四) 兼雅の約束せし事

(考異)
 (一) 歌かしく一歌く

俊隆女の幽愁。兼雅の悲嘆

- (六) されど一さも
- (八) 出てつく一出て
- (九) 人のみ覺え一人をのみあもはし
- (一二) ごと一事
- (一五) 影も餘所には一かげをも餘所に

参り給ひて、片時も御眼離ち給はず。若小君、心のうちに、哀なることを思ひて、聊かなる言傳もしてしがな、あからさまにも行くものにもがな、と思へど、斯くいと難ければ、夜晝歎かしく、彼處を我より外に見る人なし、教へ遣らむも、其處ぞとも覺えぬうちに、大殿佐の君も氣色とりて問ひ給ふ。されど、知らせ奉らじと思して、人をもえ遣り給はず。物の折節ごとに、契りし事を哀に、有様のらうたけなりしを思ひ出でつよ、萬の草木空を見るにも、唯此の人のみ覺え給へば、千々に思ひ碎くれど、宣ふべき人しなければ、心に籠めて有經給ふ。かくて彼の女君、夢のごと有りしに、たゞならずなりにけり。それをも知らず、父母のみ戀しく、習はぬすまひのわびしく、覺束なきこと、語らひ置き給しことを、草木の色變り、木の葉の散り果つるまよに、涙を落して眺めわたる。夕暮に、電光のするを見て、

俊隆女いなづまの影も餘所には見るものを何にたとへんわがおもふ人

など言へど、誰かは答へん。

若小君、かくて思ひ嘆く夕暮に、風烈しく、蟲の聲亂るよを聞きて、あはれ我が見し所の河原風如何ならん、と思ひやりて、

兼雅風吹けば聲ふりたつる蟲の音に我も荒れたる宿をこそ思へなど眺め居たる程に、十月ばかりになりぬ。しぐるよ空にも、人知れぬ袖によそへられて、眺むるをだに、と空にのみ向へるに、鶴いと哀に打鳴きて渡る。此の君、これを聞きて、まして悲しき勝りて、

兼雅たづが音にいとどもおつる涙哉おなじ河邊の人を見しよりあはれ」と獨言ちて、如何ならん世に、今一度見ん、と思へど、夢の通ひ路だになし。月日の経るまよに、逢ふ期なき音のみ泣かれ増りて。彼の京極にも、風の荒く、霜雪の降り積むまよに、長き夜すから萬の事を思ひ明かして、袖の氷れるを見て、

(語釋)

(一) 空を眺むるをてもせめての心やりにせんとて

- (一) 程に「程」ナン
- (三) 空にのみ向へるに「空をのみ見るに
- (四) ちとども一ちとしも
- (五) 見しより一見しかば
- (六) 通ひ路「路」ナン
- (七) 夜すから一夜に

- (一) 御産の用意
- (二) 程一月
- (三) 居たるに居たり
- (四) 食はするとして食はせなど
- (五) 食はするとして食はせなど
- (六) さもえ聞えさも聞え
- (七) 御相手の男を強ひて尋ぬる事はせし
- (八) 月経
- (九) 御産が
- (一〇) 御産の用意

俊蔭女我が袖のとけぬ氷を見る時ぞむすびし人も有り知らるよ
 など思ふ程に、年かへりて、春になりぬ。彼の若小君出で給ふとおし折り給ひし桂の木の前え出でたるを見て、
 俊蔭女忘れじと契りし枝は萌えにけりたのめし人ぞ木の芽ならまし
 と思ひ渡る。
 月日経て、子生むべき程になるまで、見知らで居たるに、九月といふに、此の使
 婦 物食はするとして、前に出で来て、打傾きて見て言ふ様、婢怪しく、などか
 御様の例ならずおはします。若し人も近く御物語やし給ひし「いらへ、「いさや、近
 きまよに、蓬、葎とこそは語らへ」
 姫「あなさがな。戯にも宣ふべきことにあら
 ず。姫にはな隠し給ひそ。姫は、早うより、然は見奉れど、さもえ聞えざりつ
 るなり。よし御かたきをば知り奉らじ。何時よりか、御けがれは歎み給ひし。
 いと近けになり給ふめるを。宣へ。いかでか御設せざらむ」
 いらへ、俊蔭女怪しく

- (一) 月経
- (二) 来月が産み月と見え
- (三) 生るゝ子をいふ
- (四) 身二つにさへ
- (五) 佛神の加護あるべきをいふ
- (六) 清めて
- (七) たくむ月一ナシ
- (八) けるはかなさ一けるはかなさ
- (九) たりて一ありて
- (一〇) 仕らまつりなむ一仕らまつらむ一つかまつらむ
- (一一) 髪筋も一髪筋の筋も
- (一二) 黄金一ナシ
- (一三) 御身一御ナシ
- (一四) 子ども有りければ一子どもなどありければ

も言ふかな。我は如何はある。例する事は、九月ばかりよりせぬ。されど、猶さ
 有るにこそあらめとて、ともかくも覺えず」と言へば姫「さらば、此の月たよむ月
 にこそおはしますなれ。あないみじや。かゝる御身を持ち給ひて、今まで知り給
 はざりけるはかなさ。姫亡くなり侍りなば、如何なり給はん。あが君の御爲にこ
 そ、つたなき身の命も惜しけれ」と言ふにぞ、我が身はかゝる事有りけりと思ふ
 にぞ、いとどいみじき心地して、恥かしくさへなりて泣くを見て、婢よし、如何
 はせむ。姫知り侍らば、物な思しそ。野山を分けても、姫仕らまつらむ。これ御
 たからとなり給はんも知らず。御身々とだになり給ひなば、姫負ひかづきても仕
 うまつりなむ。吾が佛の御ゆかりには、骨、舍利の中よりも、甘き乳房は出で來
 なむ、白き髪筋も、銀、黄金となりなん。あぢきなし、悲しともな思しそ。唯御手
 をかいますまして、神佛に、「平らかに御身々となし給へ」と申し給へ。又姫の命を
 念じ給ひて」と泣くく言ひて、姫思ひ廻して、片田舎に、子ども有りければ、其

俊 蔭

- (一) 俊薩女
- (二) 産の時
- (三) 留守中の様子を尋ねる也
- (四) 何とかして金銭に換へて
- (五) 産の用意に
- (六) 多くの金銭に換へ

- (一) 折に「は」ナン
- (二) 折に「は」ナン
- (三) 折に「は」ナン
- (四) 折に「は」ナン
- (五) 折に「は」ナン
- (六) 折に「は」ナン
- (七) 折に「は」ナン
- (八) 折に「は」ナン
- (九) 折に「は」ナン
- (一〇) 折に「は」ナン
- (一一) 折に「は」ナン
- (一二) 折に「は」ナン

れが許にいきで、君にはともかくも言はで、彼の折に使ふべき物ども求めて、さりけなくて、婢(一)此の頃はいかでか御座しましたる。哀(二)如何にせむ。殿の内に、とかくうちして、使ふべき物(三)はありや」と言へば、俊薩女「いさ、如何なる物をか然はする」婢(四)「何にまれく、あらん物を、如何にもくしなして、多くば、此の御爲にも(五)のせむかし」と言へば、いと美しげに調じたる唐鞍(六)を取だして、俊薩女「これは何にすべき物ぞ」とて見すれば、婢(七)さは、是していとよう仕うまつるべかめり。又物(八)はなしや」と問へば、俊薩女「見えざめり」と云ふ。姫(九)これを取り持ちて、要じ給ふべき所々に持ていきで、多くになして、衣布(一〇)など買ひて、その設す。物など食はするをも僅(一一)にして、此の事をのみ心に思ひ惑ひありく。女君は、草の生ひ凝りて、家の荒るよまよに、夜晝(一二)涙を流して、子生まんことも思はである程に、姫(一三)萬にしありきて、その折の事のみなし出でつ。
かくて六月六日に、子生まるべくなりぬ。氣色(一四)ばみて惱めば、姫(一五)肝心を惑はして

- (一) 佛神に祈る也
- (二) 名は仲忠
- (三) 此子は
- (四) 福々しきなるべし
- (五) 宿運免れずして斯く落魄したるを
- (六) 母は「は」ナン
- (七) 君「女君
- (八) なやむ事「なやむ所
- (九) ちいししなむ
- (一〇) ナン
- (一一) かく風かぎにいと
- (一二) 暖かげに
- (一三) 事「事は
- (一四) かしぎき「かなし
- (一五) とや思ひし「とや
- (一六) 思ひ給ひし

「平らかに」と申し惑ふ程に、殊(一)になやむ事もなく、玉光り輝く男子(二)を生みつ。生れおつる即ち、姫(三)己が布の懐(四)に抱きて、母にはをさく見せず、只乳香(五)する折ばかり率(六)て来て、負ひかづき養ふ。君は殊(七)になやむ事なくて、起き居たり。あつき頃なれば、貧(八)しき人の爲にはいとよし。婢(九)「これは大福德におはしましたむ。かく暖かけにつきて、おはしますは」と誇りありく。
かよる程に、此の母君、侘(一〇)しき事(一一)いやすく(一二)に覺えて、子の親にさへなりて、思ひ焦るよに、此の子養ひもてゆくまよに、玉光り輝(一三)きて見ゆれば、あはれ祖父(一四)おはせましかば、如何(一五)にいつきかしづき養ひ給はましと思ふも悲し。姫(一六)「故大殿おはしまさましかば、綾錦(一七)にまつはれて、おひ出で給はまし」と言へば、俊薩女「いで更なりや。思ひ出づればいとみじ。親の撫(一八)で養ひ給ひし時は、我斯(一九)からむとや思ひし」とていみじう泣きて、俊薩女「我が宿世(二〇)、遁れざりけるを、天翔(二一)りても如何(二二)に効なく見給ふらん。親のおはせし時、まづ死なましものを」と泣

- (語釋) (三)一 丑半
- (五)夢判斷する
- (七)俊薩女をいふ
- (八)御薩を蒙るべき
- (九)夫の上達部との中
- (一〇)俊薩女をいふ
- (一一)夢に見ゆる
- (一二)未詳
- (一四)物を縫ふ糸、麻にて造りたるもの
- (一五)物を縫ふ糸、麻にて造りたるもの
- (考異) (一)ヤーナシ
- (二)丑三―むしみつ―くしみつ
- (四)いとかしこく―ナシ
- (六)あはさせ―あはせ
- (一二)軀の―の―ナシ
- (一三)丹波―但馬

き焦るれば、婢「いで、あなさがなや。猶な思ほしそ。今は心地落ち居にたり。かよる寶を持ちては、何事をか思すべき。此丑三は、姫夢に見奉りたり。いと美しけに、つやよかに、滑かなる縮針に、縹の糸を添へたり。絲右糸によりて、尋かたわき計すけたるを、鶴ぞ君のお前に落しつる。其の針を、いとかしこく行ひさらほへる行者ぞ、君の御下がひの衽に、つぶくと長く逢ひつけて立ちぬる。さて、とばかりあれば、其の針落しつる鷹は、此の針を求むる様にて、其のわたりを翔りて見るに、君持給へりと見て、御袖の上に居て、更に立たず、とぞ見給へし。怪しさに、夢合する人にあはさせ侍りしかば、「いとかしこき夢なり。其の見えけむ人は、上達部の御子生みて、遂に其の子の徳見むものぞ。若し、自然に中絶ゆる事やあらむ」となむ合せし。されば、御許の御榮の初なり。多く見給ふるに、針にて見ゆる子は、いとかしこき孝の子なり。姫の丹波に侍る女の童生まんとて見給へし様は、いと使ひよきてつくりの針の耳いと明らかなるに、信濃の

- (語釋) (一)先月
- (三)粗末
- (四)五六十にたる年寄の御身ではなし、などの意歟
- (六)未詳、誤あるべし
- (一〇)此幸ある子の孝養を受くべき御身ならずや
- (一二)此子の容貌をいふ
- (一五)賣却して
- (考異) (二)罷りたりしかば―罷りしかば
- (五)いそちかむそちか―いそちかむそちか
- (七)さのまひならぬ―さのまひならぬ
- (八)あな―ナシ
- (九)いち―ナシ
- (一〇)かの孝養―おはすめれ―かのことさやうこそは
- (一三)王ぞ―子ぞ
- (一四)有りしをば―を
- (一六)月日―月日を
- (一七)たゞ―て―て

つりを、いとよき程にすけて、姫の衣に縫ひ付く、と見給へし。其れだに如何侍る。唯其れにかよりてこそは、生きめぐらひ侍れ。立ちぬる月にも、御許の御こと宣へ語らはむとて、罷りたりしかば、白き米三斗五升、搗稻七斗くれて侍りしをこそは、とかくに侍りしか。何にか思し入るよ。あな幼。いそちかむそちか。凡そ、子生み給へりともなくて、とかくうちして世を経給はん、などか有らむ。かく他び給はんや。さのまひならぬ人もこそあれ。いであなあぢきな。あたら御容貌を」と言へばいらへ、俊薩女「いでや。などでか然はしも惑ふべき。あないみじや。然やは思ひし」姫「他び給ふな。彼の孝養にこそはおはすめれ。世の末、斜にはかなけにやはおはする。されば寶の王ぞ」とて此の子を捧けて養ふ。かくて泣き暮し嘆きあかす月日はかなく過ぎ行く。出来添ふ物はなくて、聊かなりし身の調度など有りしをば、姫「失ひつかひつよ、月日経るまよに、唯涙の海をたよへて居たり。」

〔語釋〕
(一)チリと
(六)早朝

〔考異〕
(二)敏く一ナシ
(三)けり一ナシ
(四)いみじう悲しとみて
いかでこれ養はんと思ふ
いかでこれ養はんと思ふ
いかにこれ養はんと思ふ
(五)業をも一を一ナシ
(七)せんずるぞ一せん
ずるぞ

●老婢の死去、幼兒仲思
の孝養、天助

かくて此の子三つになる年の夏頃より、親の乳香ます。母怪しがかりて、俊薩女「など、
吾兒は此の頃乳は香まぬぞ。猶呑め。苦しうもあらず。他物は食はず。乳をさへ
呑まずば如何せん」と言へば、仲思「否、今はな香ませ給うそ」とて吞ますなりぬ。
かよる程に、此の子は、すくくと、引き延ぶるもの様に、大きになりぬ。生ひ
出づるまよに、いとなく美しけなり。聊か見聞きつること、更に忘れず、心の
敏く賢きこと限なし。かく稚き程に、親の苦しがるべき事はせず、親はかなし
きものなりけりと思知りたり。

かよる程に、此の子五つになる年の秋つ方、嫗亡せぬ。此の親子、聊か物食ふこ
ともなくなりぬ。日を経てつれづれとあり。此の子出で入り遊びありきて見るに、
母の物も食はであるを見て、いみじう悲しと見て、いかでこれ養はんと思ふ心つき
て思へど、さる幼き程なれば、何でふ業をもえ爲す。つとめて、近き河原に出で
て遊び歩けば、釣するもの、魚を釣る。仲思「何にせんずるぞ」と言ふに、「親の煩ら



〔語釋〕
(三)之を見つけたる人の心

〔考異〕
(一)いとほしげいとをかしげ

(二)釣れば―すれば
(四)せんずる―「せん」ナ

(五)あるを―ありけるを
(六)儘に―まゝには

(七)魚取りに―魚を取りに―今魚取りに
(八)いたたれど―いたたれど
(九)如何―いか

ひて、物も食はねば、食はむするぞ」と言ふに、さば親にはこれを食はするぞと知りて、針をかまへて釣るに、いとほしげなる子の、大なる川面に出でて釣れば、かくらうたけなる子を、かく出だし歩かする、誰ならむ、と思ひて、「何せむに斯くはするぞ」と言へば、仲忠「遊びにせんずる」と言ふ。らうたがりて、「我釣りて取らせむ」とて多く釣りて取らする人もあるを、持て来て親に食はせなどし歩くを、俊藤女「斯くなせそ。物食はぬも苦しうもあらず」と言へど聽かず。容貌は日々に光る様になり行く。見る人抱きうつくしみて、「親は有りや。いざわが兒に」と言へば、「否。御許おはす」と言ひて更に聽かず。空の暖なるほどは、斯くしありきて母に食はす。夢ばかりにても、唯此の食はする物にかよりてあり。冬の寒くなる儘に、さもえすまじければ、此の子、我が親に何を參らむ、如何にせむと思ひて母に言ふ様、仲忠「魚取りにいたたれど、氷いと固くて魚もなし。御許如何し給はむするぞ」と言ひて泣く時に親、俊藤女「何か悲しき。な泣きそ。氷解けなん時に取れ

〔語釋〕

(八)仲忠は俊藤が遇ひし第七の山の仙人の轉生なれば也

(一)仲忠の心

〔考異〕
(一)猶：河原に―猶あられ烈しきに

(二)如く―如くに

(三)そのかみ―そのとき

(四)言ふ―言ふ様

(五)魚出で來たり―魚なむ出で來たる

(六)出でては―は―ナシ
(七)見つれど―見ゆれど
(九)わたり―あたり
(一〇)あるべし―あるか

仲忠母を導きて北山の空洞に移る。母に琴を習ふ。幼くして琴曲の妙を極む

かし。我物多く食ひつ」と言へど、猶明くれば河原に往きて、人多く車などある時は其の程過して、出でて見るに、氷鏡の如く氷れり。そのかみ、此の子言ふ、仲忠「誠に我孝の子ならば、氷解けて魚出で來。孝の子ならずば、な出で來」とて泣く。時に、氷解けて、大なる魚出で來たり。取りて歸り往きて母に言ふ様、仲忠「我は誠の孝の子なりけり」と語る。小さき子の、深き雪を分けて、足手は暇の様に、走り來るを見るに、いと悲しくて涙を流して、俊藤女「なかく寒きに出でては歩くぞ。斯からざらん折、出でて歩け」と泣けば、仲忠「苦しうもあらず、御許を思へば」とて止まるべくもあらず。ありつる魚は魚と見つれど、百味を供へたる飲食になりぬ。怪しう妙なる事多かり。

かよる程に年還りぬ。此の子まして大に、敏く賢し。變化のものなれば、たど大人の様になりて、人に見ゆれば、「誰が子ぞ。親は誰とかいふ。此のわたりにあるべし」など言ひて求むれば、自ら尋ねも來ぬべし。かく歩きて人にも見え知ら

〔語釋〕

(四)かの童が仲思に

(七)住むべき適當なる處

〔考異〕

(一)河—河原

(二)椎樸栗—樸推栗—椎栗

(三)此の子を—この子に
いふ様—このをさなき者
に

(五)掘り—掘りて

(六)高く—ナレ

れじ、此の河にのみやは魚は有る、と思ひて、下りて其の河より渡りて、北様に
さして往きて、山に入りて見れば、大なる童土を掘りて、物を取り出でて、火を
焚きて焼き集めて、又大なる木の下に往きて、椎、樸、栗などを取りて、此の子
を、童、何しに此の山にはあるぞ」と問へば、仲思、魚釣りに來つるぞ、おもとに食は
せ奉らんとて」と言へば、童、山には魚は無し。又生きたる物殺すは罪ぞ。これ
を拾ひて食へ」と教へて、此の掘り拾ひ集めたるものどもを取らせて、童は失せ
ぬ。此の子嬉しと思ひて、持て往きて、母に食はす。此の後は、山に入りて、見せ知
らせし薯蕷野老を掘り、木の實かづらの根を掘りて養ふ。雪高う降る日、薯蕷野老
の有り所も木の實の有り所も見えぬ時に、此の子、仲思、我が身不孝ならば、此の雪
高く降りまされ」と言ふ時に、いみじう高く降る雪、忽ちに降り止みて、日いと麗
かに照りて、ありし童出で來て、例の薯蕷野老焼き調じて取らせて失せぬ。
かく遙かなる程を、し歩くも苦しう覺えて、いかで此の山に、然るべき所もがな、

〔考異〕

(一)子の—の「ナレ

(二)をも—も「ナレ

(三)寄りて—「ナレ

(四)子を—「を「ナレ

(五)母持ち奉れり—母を
持ち奉りたり

(六)暗う—暗きに

(七)參らせむ—奉らむ

(八)爲にと—「と「ナレ

(九)給ふらむと—給はむ
も

近くて養はむ、と思ひて、山深く入りて見れば、いみじう嚴めしき杉の木四つ、
物を合せたる様にて立てるが、大きな屋の程にあき合ひて有るを見て、此の子
の思ふ様、こよに我が親を据ゑ奉りて、拾ひ出でむ木の實をも先づまらせば
や、と思ひて、寄りて見るに、嚴しき牝熊牡熊、子を産み連れて棲む空洞なりけ
り。出で走りて此の子を食まむとする時に、此の子の曰く、仲思、暫し待ち給へ。ま
ろが命、絶ち給ふな。まろは孝の子なり。親兄弟も無く使ふ人も無く、荒れたる
家に唯一人棲みて、まろが參らす物にかより給へる母持ち奉れり。里には、爲
べき方もなければ、かよる山の木の實、かづらの根を取りて、親に參らすなり。
高き山、深き谷を、下り登り罷り歩き、朝に罷り出でて暗う罷り歸る程だに、う
しろめたう悲しく侍れば、かよる山の王住み給ふとも知らで、此の木の空洞に母を
据ゑ奉りて、薯蕷一筋を掘り出でて、先づ參らせむ、又、遠き道をも、親の
爲にと罷り歩けば、苦しうも覺えねど、徒然と待ち給ふらむと悲しう侍れば、近

〔語釋〕

(一) されど―されども

(二) 給ひける―給ひし

(三) 返去す

〔考異〕

(一) されど―されども

(二) 給ひける―給ひし

(三) 益なき―用なき

(四) 無くば―無くては

(五) 無くば―無くては

(六) 無くば―無くては

(七) 無くば―無くては

(八) 無くば―無くては

(九) 無くば―無くては

(一〇) 中記―に―ナシ

(一一) 落して―流して

(一二) 木の―ナシ

(一三) 清め―清めて

(一四) 水の―の―ナシ

(一五) 外に―はに

くと思ひ給へて見侍りつるなり。されど、かく領じ給ひける所なれば、罷り避りぬ。空しくなりなば、親も徒らになり給ひなん。己が身の内に、親を養はむに益なき所あらば、施し奉るべし。足無くば、何處にてか歩かん。手無くば、何にか木の實かづらの根をも掘らむ。口無くば、何處よりか魂通はむ。腹胸無くば何處にか心のあらむ。此の中に徒なる所は、耳の端、鼻の峯なりけり。これを山の王に施し奉る」と涙を流して言ふ時に、牝熊牡熊荒き心を失ひて、涙を落して、親子の悲しさを知りて、二つの熊、子どもを引き連れて、此の木の空洞を此の子に譲りて、他嶺にうつりぬ。そのかみ、此の木の空洞を得て、木の皮を剥ぎ、廣き苔を敷きなす。薯蕷掘り初めし童出で来て、空洞の廻り掃き清め歩けば、前より泉出で来る。掘り改めて、水の流れ面白く成りぬ。かへすく喜びて母の御許に往きて言ふ様、仲患「外にいざ給へ、まろが罷る所へ。此處とても、まろならぬ人の見えばこそあらめ。斯く出でて罷り歩く程、徒然と待ち給ふ程苦しう

〔語釋〕

(一) 上かれあしかれ此儘にて日を送らんと思へど

(二) 我を

(三) 獲たる食物を

(四) 空洞に住居せば

〔考異〕

(一) それも―も―ナシ

(二) 歩く―歩かむ

(三) いまむ―いませむ

(四) 何方も―何方へも

(五) なり―何なる

おはしますらむ。かくて悪しうも善うもまかり歩かむと思へど、人の馬、牛を飼はせても使はど、親の御爲に、さる下衆の母と言はれ給はむことと思ふ。然らで良きこと、將難かるべし。同じくば、人も見ぬ山に籠りて人に知られじとなむ思ふ。心には片時にも通はむ、飛ぶ鳥につけても奉らむ、と思へど、それも得然もあらず。いざ給へ、まろが罷る所へ。然てもものし給はど、木の實一つにても、易く參らせむ。罷り歩くこともやすまむ」と言へば、俊藤女「何かは、我子のいまさむ方には、何方もく往かざらむ。里に棲めども、吾兒より外に見え通ふ人のあらばこそ」と出で立つ。此の家の内には物もなし。屋も皆毀れ果てにたり。彼の父の遺言し給ひし琴ども皆取う出で、又弾きし琴ども、此の子して運ばせて、今はともろ共に行くに、萬のこと悲しとは疎なり。

俊藤女涙川ふち瀬も知らぬみどり子をしるべと頼むわれや何なり

など言ふ程に、空洞に到りぬ。いと深き山路の程堪へ難く聞きしかど、空洞とも

〔語釋〕
 (一)かの時々仲思を助けし童をいふなるべし
 (五)母の心

〔考異〕
 (一)程は「は」ナシ
 (三)あるに「ナシ」
 (四)出で「ゆき」
 (六)にて「て」ナシ
 (七)ほそを風「風」ナシ
 (八)人音「人」

覺えず、前一町ばかりの程は明かにはれて、同じ丘といへど、人の家の作れる山の様に、木立をかしう、所々に松、杉、花の木ども、果物の木、數を盡して無き物なく、椎栗森をはやしたらむ如く、廻りて生ひ連なれり。總べて佛の現じ給へる所なれば、斯からざらむ人も住まよほしげに見えたり。空洞の前に、一間ばかり去りて、はらひ出でたる泉の面に、をかしき程の巖立てり。小松所々にあるに、椎、栗其の水に落ち入りて流れ來つよ、思ひしよりも、使ひ人一人えたらむ様に、便有りておほゆ。朝に出で夕に歸りし、暇のなさも休まりぬ。唯眼の前なれば、我も人も、箱の蓋なるものを引き寄する様にて、煩なくて、唯打遊びて明し暮らせば、此處にて世を過ぐさむと思ひて、子に言ふ、俊藤女「今は暇あめるを、己が親の、かしこき事に思ひて教へ給ひし琴、習はし聞えん。弾き見給へ」と言ひて、りうかく風をば、此の子の琴にし、ほそを風をば我弾きて、習はすに、敏くかしこく弾くこと限なし。人音もせず、獸、熊、狼ならぬは見え來ぬ山にて、

〔考異〕
 (一)めて聞くこれは大なる一聞きめて大きな

(二)琴弾く一琴を強く
 (三)木草の「くさく」の
 (四)限は命の有らん一限命有らん
 (五)手一音

斯うめでたき業をするに、たましく聞きつくる獸、唯此のあたりに集まりて、憐の心をなして、草木も靡く中に、尾一つを越えて、嚴めしき牝猿子ども多く引き連れて來て、此の物の音をめでて聞く。これは、大なる空洞をまた領じて、年を経、山に出で來る物取集めて棲みける猿なりけり。此の物の音にめでて、時々木の實を、子どもも我も、引き連れて持て來。斯くしつよ、此の琴弾くを聞く程に、此の子七つになりぬ。彼の祖父が弾きし七人の師の手、さながら弾き取り果てつれば、夜晝と弾き合せて、春は面白き木草の花、夏は清く涼しき陰に眺めて、花紅葉の下に心をすましつよ、我が世の限は命の有らむに隨はむと思ふ。琴は残る手なく習ひ取りつ。此の子變化のものなれば、琴の手母にも勝りて、母は父の手にも勝りて、物の次々は劣りこそすれ、此の族は、傳はるごとに勝ること限なし。かくて此の子十二になりぬ。形の麗しく美しげなること、更に此の世の物に似ず。

〔語釋〕
(六)種類を論ぜず

〔考異〕

- (一)にしーとし
- (二)友にー友と
- (三)たれどーたれども
- (四)容貌は「は」ナシ

〔奇蹟〕 俊藤女をん風の琴を弾く

- (五)獸いるー獸のいる
- (七)殺しー殺して
- (八)草木をー草木をも
- (九)便もーも」ナシ
- (一〇)見るーやる
- (一一)哀とー哀に

綾錦を著て、玉の臺にかしづかるよ國王の女御、后、天人よりも、かよる草木の根を食物にして、岩木の皮を著物にし、獸を友にして、木の空洞を住處として、生ひ出でたれど、目もあやなる光添ひてなむありける。母も、父君添ひていつきかしづきし時よりも容貌は勝りて、めでたきこと限なし。此の年頃、唯此の猿どもに養はれて、こよなく便を得たる心地するも哀なり。水は、蓮の葉の大きなるに包みて持て來、薯蕷、野老、果物は、様々なる物の葉に包みて持て來集まる。

かよる程に、東國より、都に敵ある人、報せむと思ひて、四五百人の兵にて、人離れたる所を求むるに、此の山を見占めて、恐ろしけにかき者ども、一山に満ちて、眼に見ゆる鳥獸、いろをも嫌はず殺し食へば、鳥獸だに、山を離れて逃げ隠るよに、隠れ所もなき木の空洞に、親子籠りて、草木を食ふべき便もなく、天地をも眺め見るべくもあらず、いみじき時に、年頃養ひつる猿、猶この人を哀と思ひて、武士の寝しづまるを伺ひて、青葛を大なる籠に組み、いかめしき栗



〔語釋〕
 (一)前々の不幸は何と言ひても斯程にてはあらざりき、詞少し足らず脱文あるべし
 (四)七人の師歟
 (七)朱雀院
 (八)藤原兼雅、前の若小君

〔考異〕
 (一)かきならせーひきならせ
 (三)かきならすーひきならす
 (五)亡せぬればー死ぬれば
 (六)ゆいこんーゆこん

兼雅琴の聲を尋ねて北山に入る。兼雅仲忠父子の應答

椽ぎらを入れて、蓮はすの葉はに冷ひやなる水みづを包つみて來くるに、木きの下もとごとに臥ふせる武ぶ士しども、猿さるの渡わたるとも知しらで、木きの葉はの戦せぐに驚おどきて、「こゝに山やまのものものの音ねす」とて、幾幾多多の人ひと、火ひを燈ともして罵ののしるに、せむ方かたなし。母ははの思おもふ様やう、我わがが親おやは 此この二ふたつの琴ことをば、幸さいはひにも、禍わざはひにも、極きはめていみじからむ時とき、かき鳴ならせ、とこそ宣のたまひしか、我われ今いまより勝まさりていみじき目めを何いつ時ときか見みむ、ささは言いへど、斯かくばかりにやは有ありつる、是ここそ限かぎなめれ、と思おもひて、此このなむ風かぜの琴ことを取り出いでて、一聲いっせいかきならすに、父ちち主ぬしの、七しち人にんの調しらべてし聲こゑに、聊いさかかはらず。一聲いっせいかき鳴ならすに、大おほなる山やまの木き舉こりて倒たふれ、山やま倒たふれに崩くづる。立たち圍かこめりし武ぶ士し、崩くづる山やまに埋うづもれて、多おほくの人ひと亡なせぬれば、山やまさながら靜しづまりぬ。猶なほ登ある午うまの時ときばかりまで、ゆいこんの手てををりかへし彈ひく。

其その日ひ、帝みかど北きた野のの御み幸ゆきし給たまふ日ひにて、其その山やまのあたりなど御み覽らんするに、其その日ひさふらひ給たまふ右みぎ大だい將しやうのおとど、御おん馬うまを引き廻まわして、此この琴ことの調しらべを聞き付つけ給たまひて、御おん

〔語釋〕
 (一)右大臣藤原忠雅

〔考異〕
 (二)機にてー壁にて
 (三)するにーわざに
 (四)武士のーのーナシ
 (五)御使「御」ナシ
 (六)空に嚴しうー空に聞ゆ嚴しう
 (七)森のごと見ゆるー森のごと茂りて見ゆる

兄このつみの右みぎのおとどに聞きえ給たまふ、兼兼雅雅「此この北きた山やまに、限かぎなく響ひびきのほる物ものの音ねなむ聞きゆる。琴ことの聲こゑと聞きゆれど、多おほくの物ものの音ね合せたる様やうにて、内うち裏らにさふらふせた風かぜの、一ひとつ族うぢなるべし。いざ給たまへ。近ちかくて聞きかむ」と宣のたまふ。右みぎのおとど、忠忠雅雅「かく遙はるかなる山やまに、誰たれか物ものの音ね調しらべて遊あそび居ゐたらむ。天てん狗くのするにこそあらめ。な御お座ざせそ」と聞きえ給たまへば大だい將しやう、兼兼雅雅「仙せん人にんなども斯かくこそすなれ。さらば兼兼雅雅一人ひとりまからむかし」と宣のたまへば、忠忠雅雅例れいのすさびありきなめりかし。さらば早はやう」とて、御おん馬うま添そばかりして入り給たまふに、武ぶ士しの残のこれるは、公おほやけの御おん使つかしの捕とらへに來きると思おもひて、谷たにに落おち入り、他ほか山やまに逃にげ隠かくれて、一人ひとりも無なくなりぬ。二ふた所ところ續つき入り給たまふに、いみじき物ものの音ね響ひびき勝まさりつと聞きゆ。空そらにもつかず、地ちにもつかず、聞きゆる時ときに、怪あやしく聞きき煩わづらひて、尙なほ山やまの末すえをさして入り給たまふ。向むかひたる峰みね勝かれて高たかし。其その峰みねの空そらに、嚴いしう茂しげりて森もりのごと見みゆる中なかに、此この琴ことの聲こゑ聞きゆ。彼かの峰みねをさして入り給たまふに、空そらにつける山やまに、獸けだものは、袈あを敷ふきたらむ様やうにある時ときに、兄あにのおとど聞きえ給たまふ、忠忠雅雅さ

〔語釋〕

(三) 釋迦佛の修行せし山

(六) 忠雅の心

(八) 兼雅

(一〇) 貝合せの貝

〔考異〕

(一) 猶一たゞ

(二) 何か一何をか

(四) 給へむ一給へ

(五) 元より一元よりも

(七) 猶一ナシ

(九) 山をば五つ一山尾をば五つ

(一一) 空洞なる一空洞のある一空洞ある

ればこそ聞えつれ。むくつけくもある哉。猶歸りなむ。いざ給へ」と宣へば、兼雅「悪
 きことをも宣はするかな。これこそ面白けれ。(二) 深き山に獸住ますば、何か山と
 いはむ。檀特山(三)に入るとも、兼雅、獸に施すべき身かは。此の獸害の心なすや、
 と試み給へむ」とて、御馬を走らせ打ちて入り給へば、跳びに跳ぶ御馬に元より
 乗り給へば、雲につきて翔る様にて入り給ふに、御馬添も更に参らず、其の麓
 に止りぬ。兄のおとどは、御馬も劣りて、え追ひ著き給はず、止り給ひぬべけれ
 ど、昔、父母の賀茂詣の時騒ぎ宣ひしを思し出でて、なき御影にも、さる獸の
 中に一人入れて止りぬる、とは見え奉らじ、と勵み給へど、彼は大将におはす
 れば、胡籙負ひたれば、獸も避り聞ゆ、此のおとどは、然もおはせねば、いと恐
 ろしうて、猶え登り給はず。(七)

大将は、いみじき山をば五つ越えておはするに、獸は猶貝を伏せたらむ様に、同
 じ上に立ち籠みたるに、分け入りて、此の琴の音を訪ねて、空洞なる杉の木の下
 (八) (九) (一〇) (一一)

〔語釋〕

(三) 母の心

(八) 仲忠が

〔考異〕

(一) 前は一前には

(二) 猶一名を

(四) あはしますに一あはするにか

(五) 見給へむとてまうて一見給へにまうて

(六) いらへ一いて

(七) 何事一事ナシ

(九) 唯一ナシ

に打寄りて、馬より下りて見廻り給ふ。此の木の前は、萬の木なつかしう、苔を
 敷き沙を撒きて、清けなる蔭に、立寄りて聲づくり給へば、此の空洞の人、琴を
 弾き止みて、怪しがりて見給へば、いと清けなる人立てり。子の言ふ様、仲忠「いと
 珍らしく怪しきわざかな。物の音を聞きて、天人の下り給へるにや有らむ」と言
 へば、猶問はまほしくて、苔の簾の内ながら、俊隆「かれは何の人のおはしますに
 かあらむ。熊狼を友だちにて、世の中人もまうで來通はぬ山懐に、いかで入
 らせ給へるならむ」客人、さればこそ人有りけれと思して、兼雅「かくて人住み給
 ふと聞きて、誠そらごと見給へむとてまうで來つるなり」いらへ、仲忠「此の年頃
 此の山に籠り侍れども、斯う尋ね訪はせ給ふ人もなきに、何事によりてか、訪ね
 おはしましつらむ」と聞えて、苔の上に出でたり。衣はた、はかなき單の萎えた
 るを著たるに、容貌は唯光る様に見ゆ。(八) 怪しみ驚きて客人、兼雅「今日は北野の行幸
 なり。御供に仕うまつれるに、面白き物の音の聞ゆれば、尋ね参りつ」とて行膝

- 〔語釋〕
- (一) 仲忠を坐せしめ
- (六) 狼りになどの意歎
- (一三) 世話する人

- 〔考異〕
- (一) 五へどもしもナシ
- (三) 棲まさなり一棲まさるなり
- (四) 籠りにし事一籠れりし事
- (五) 侍りし侍りにし
- (七) たふくにこまごま
- (八) 道をしをナシ
- (九) 奥一奥を
- (一〇) 尋ねて来たる一て来ナシ
- (一一) 問ひ一ナシ
- (一二) 侍りしかば一侍りにしかば
- (一四) しになむししかばなむ
- (一五) 京極の一京極にて

を解きて、苦の上に敷き、兼雅「此方」とて据る、我も居給ひて、事の由を問ひ給ふ。
 兼雅「抑獸といへども、熊、狼ならぬは棲まさなり、鳥といへども、鷲、山鳥ならぬは棲まぬ所に、何の御心にて、幼き程には宿り給ふぞ」子の答、仲忠「此の山に籠り籠りにし事、五歳よりなり。其の後、跡絶えて籠り出づることなし。其の籠り侍りし様は、思ふ心有りてなり。たふく々に聞ゆべきにも侍らず」と聞ゆ。客人、兼雅「許多はけしき道を打越えて、深き山の奥、疎ましき獸の満ちくたる中を、尋ねて来たる心をば、え疎に思さじ。なほ宣へ」と責め問ひ給へば、仲忠「はかくしくも身の上をえ知り侍らず。母に侍る人に、せめて問ひ侍りしかば、父母に一度に後れ侍りしかば、相顧みる人なくて、心細きすまひをし侍りけるに、はかなき人の、物の便に立寄り給へりしになむ、聊かいらへなど聞えしに、生れにし」とばかり語られ侍れども、其もはかくしうも聞き侍らず」と聞ゆれば、ありし京極の事を、ふと思し出でて、兼雅「尙確に宣へ。さて其の御親はおはするか、おはせぬか。怪しう、宣ふ様にては、稚き程より、かゝる怪しき所におはすなれど、更に此處におはすべき人になむ見えぬ。唯有らむ儘に宣へ」と宣へば、子のいらへ、仲忠「此處に籠り侍りしことは、さて果敢なき様にて、出でまうで來侍りにける身を、また知る人もなくて、年頃もて煩らひて、三つばかりになり侍りける程になむ、物覺え侍りける。いかでこれを養はむと思ひ侍りしかど、爲べき方なく見給へしに、唯明け暮れ、いかで鳥の聲もせざらむ山に籠りにしがな、今や恐ろしく疎ましき目を見むすらむ」と、さかしらに、人有りと見て、人の伺ひなどするに、尋ね出でられて、親の御面伏に、我が身もいとどいみじくならむ事」と嘆き侍りしかば、年頃此處に籠り侍るなり。木の實、葛の根のあなるを、さても養はむと、願ふ所に思ひ給へて、山の見ゆる方を尋ねまうで來て、此の空洞を見出でて侍りしに、しかくくなむ侍りし。いかでか掃き清めむと思ひ侍りしに、童出でまうで來て、掃ひあけて棲ませ侍らすに、又自ら獸など、木の實、葛の根など取り

- 〔語釋〕
- (二) 生れたる私を
- (四) 親が
- (六) 親を
- (八) 母の嘆きし詞をまねて語る也
- (一〇) 俊隆女の邸内を
- (一一) これも母の嘆きし詞
- (一四) 熊の事を語るなり

ぬか。怪しう、宣ふ様にては、稚き程より、かゝる怪しき所におはすなれど、更に此處におはすべき人になむ見えぬ。唯有らむ儘に宣へ」と宣へば、子のいらへ、仲忠「此處に籠り侍りしことは、さて果敢なき様にて、出でまうで來侍りにける身を、また知る人もなくて、年頃もて煩らひて、三つばかりになり侍りける程になむ、物覺え侍りける。いかでこれを養はむと思ひ侍りしかど、爲べき方なく見給へしに、唯明け暮れ、いかで鳥の聲もせざらむ山に籠りにしがな、今や恐ろしく疎ましき目を見むすらむ」と、さかしらに、人有りと見て、人の伺ひなどするに、尋ね出でられて、親の御面伏に、我が身もいとどいみじくならむ事」と嘆き侍りしかば、年頃此處に籠り侍るなり。木の實、葛の根のあなるを、さても養はむと、願ふ所に思ひ給へて、山の見ゆる方を尋ねまうで來て、此の空洞を見出でて侍りしに、しかくくなむ侍りし。いかでか掃き清めむと思ひ侍りしに、童出でまうで來て、掃ひあけて棲ませ侍らすに、又自ら獸など、木の實、葛の根など取り

- 〔語釋〕
- (三)父親
- (四)何の誰とは
- (六)汝が
- (八)懐胎を
- (九)出産が
- (一〇)婢をいふ
- (一一)兼雅をいふ
- (一四)兼雅の心
- (一六)通常の人
- (一九)何の因果で

- 〔考異〕
- (一)母子の命養ひてーナ
- (二)似侍りーナシ
- (五)端にー走り
- (七)きんちが出来べきに
- (八)物もーナシ
- (一一)あめりーあり
- (一二)影にもー影も
- (一五)事にもー事どもに
- (一七)何かー何かは
- (一八)侍りけれーあなれ

まうで来て、母子の命養ひて、けに此の願ひ満ち侍りしに似侍り」と言へば、兼雅彼の御親、未だ見奉り給はずや」子のいらへ、仲思すべて見侍らず。母も其の人とは得知り聞えず。唯「父母に後れて心細き住居せし程に、其の時の大臣、家の前より賀茂に詣で給ひたりしかば、見むとて端に出でたりしに、きんちが出来べきにや、物も覚えぬ人に見合せ聞えたりしかど、年かへるまで知らざりしに、今思へば、今日明日になりけるに、其所なりし人の、さる事あめり、と教へしをなむ聞きし。其の後、其の人、影にも見え給はずなりにき。いと憂き事なれど、我亡くなりなば、聞き置けとてなむ」と申さるよ。されば總べて得知り侍らず」と聞ゆるに、悲しう哀に覺さるれど、氣色にも出だし給はず。恥かしと思はど、これより深くもぞ入ると思せば、兼雅いと哀に悲しき事にも有るかな。猶かくて籠り居たらむと思すか。又例の人の様にて有らむとや思す」と宣へば、子のいらへ、仲思「何か、世は憂きものにこそ侍りけれ。人の身を受けながら、如何に契り置きて

- 〔語釋〕
- (三)髪を剃りて
- (六)兼雅落涙とてめ得ず
- (七)未詳
- (九)獸類
- (一三)なまごひに京に出
- 〔考異〕
- (一)魂のしの上ナレ
- (二)侍るめりー侍り
- (四)思ひー思う
- (五)程はーはナシ
- (八)かたへこそーかたかく
- (一〇)せられぬるーせらる
- (一一)得難きーとり難き
- (一二)宣へばー宣ふ

かく疎ましき獸の中に、それを友として、彼等に養はれて、今日やくと、身を施しつべく、魂の休まる時なくて、恐ろしく悲しき目を見侍らむ。前の世の罪、思ひやられ侍れば、天地の許されなき身に侍るめり。愈深く、むづかしき頭下し捨てて、参り籠らむ。となむ思ひ給ふる」と言ふ様の、惜らしく清らなり。程は十六ばかりと見えて、いみじうめでたきを、餘所人に聞き見むだに有るに、得せきあへ給はず。ためらひて、兼雅「けに然も言はれたる事なれど、何でふ人か、かよる住居にて世には經む。頭を剃る人も、師に就きて僧となるこそ、尊き事なれ。さてこそ、又山籠りもすれ。今日の獸の様は、堪ふべしとやは見えたる。かたへこそ、斯く見許す方もあらめ。なほ京へ出で給へ。かよる物に害せられぬる人は、菩提も得難きものなり」と宣へば、子のいらへ、仲思「斯くて侍らむよりも、然てしもこそ、中々に見入るよ人なくて侍らむは、益々堪へ難からめ、と思ひ給ふれば」と言ふ。兼雅「そは、斯くて籠りおはせむ人を、あながちに勧め出だして、

〔語釋〕
 (一) 我が世話せぬ筈はなし
 (二) 我等を愛してくれらる筈はなし
 (三) 下賤の者として取扱はれても
 (四) といふものの故の了簡次第也
 (五) 兼雅の勤むるは
 (六) 深き趣意ありて言ふにはあるまじし
 (七) 母をいふ
 (八) 人並の暮しはしたくなし
 (九) 自分一人山を出るは
 (一〇) 兼雅が一向出て来ぬとて帝が御歸りになつては不都合
 (一一) 木の葉を縫ひ合せて柄の様にしたるもの
 (一二) 給へらむ給ひつらむ
 (一三) 理もとより
 (一四) なんーナン

見入れぬ様は有りなむや」と宣へば、仲忠「母に侍る人に語りて聞えむ」とて奥へ入りて、仲忠「斯く宣はする人なむおはする。如何聞ゆべき」と言へば、俊藤女「かく忌々しき様を見初め給へらむ人の、何とか思すべき。口惜しきしなに思ひくたし給ふとも、理免れ所なくこそあらめ。又御心ぞ」と言へば、仲忠「まろが思ふ様は、此の山に住む事八年になりぬ。憂き事も悲しき事も、思ひ馴れにたり。何しにか出でむ、かくて過してむとなむ思ふ」と言へば、俊藤女「さればこそ然は聞ゆれ。かく憂き身なれば、今更によろしき事もあらじ。かく珍らしき有様を打見給ふ程宣ふにこそあらめ。深うもあらじ」と言へば、出でて聞ゆ。仲忠「此のもて煩ひ侍る人、今更に、何でふ世づいたる目を見む。山の見る目も恥かし」とて動きけも侍らねば、一人は又何のかひも侍らじ」と言ふ程に日も傾けば、兼雅「何か強ひても聞えむ。契深くば、又も参り來なむ。今日は御供に候ひつれば、ひたやごもりなりとて歸り給はむ、便なかるべし」とて立ち給ふ程に、此の猿六七匹連れて、様々の物の葉を葉

〔語釋〕

(一) 兼雅
 (二) 尋ねて分け入らぬかと思ひしかど
 (三) 帝の御供に來て居ながら勝手な振舞をするは曲事なればやめて來たり
 (四) 兼雅
 (五) 猿ども
 (六) 尾一つ山の尾一つ
 (七) 烈しき一ナン
 (八) 給ひぬ給ふ
 (九) 有所一有所を

盤にさして、椎、栗、柿、梨、薯蕷、野老などを入れて持て來るを見給ふに、いと哀に、然ば、これに養はれて在るなりけりと、珍らかに思さる。例ならぬ人のおはすれば、猿ども驚きて、打ち置きて逃げぬ。大將歸り出で給へば、尾一つ越え給ふ程に、御馬添も、右のおととも、さる烈しき獸の中に入り給ひぬる覺束なさに、尋ねおはするに、見付けて、忠雅「さて如何有りつる」と宣へば、兼雅「尋ね得べくもあらず。谷に聞え、峰に聞え、高う登れば地の底になり、谷に降れば雲の上に聞えて、獸は貝を伏せたる様にて、路しなれば、わけ煩らひてなむまうで來ぬる。猶たどるくと思ひ給へつれど、御供に侍りつるひがくしきになむ」と聞え給へば、朱雀「さればこそ。天狗ななり」とて打續きて出で給ひぬ。上は、朱雀「怪しくて失せぬる朝臣等かな。好き女の有所聞きて、すきものともは往ぬるならむ」とて歸らせ給ひにけり。昔若小君と聞えしは大將、兵衛佐におはせしは右大臣になむおはする。

兼雅再び北山に入る。俊隆女を伴ひ歸り三條堀川の邸に置く。俊隆女の榮華

〔語釋〕

(一)兼雅が

(二)兼雅が

(三)下に見えたる女三宮以下の妻妾等の處

(四)嵯峨院

(五)身分卑しき妾

(九)食物を入れて携ふるに用る袋

〔考異〕

(六)迎へは「は」ナレ

(七)我も「我と

(八)宣はて「宣はせて

かくて路のまよに哀に(一)いみじう思ひおはす。各歸り給ひて、つくぐと思し續くるに、飽かず悲しう、如何にして迎へ出でむ、とのみ思ひたばかりて、御方々へも渡り給はず、すべて他事覺え給はねは、心も浮き立ちて、まづ率て出でむ所を思し廻らすに、一條に、廣く大なる殿に、様々なる大殿造り重ねて、院の帝の女三の宮を始め奉りて、さるべき御子等、上達部の御女、多くの御召人まで、集め候はせ給ひければ、此處には、騒がしき中に迎へ出でじ、と思して、三條堀川のわたりに、又大きなる殿、御女の東宮に參り給ふべき御料と思して、年頃つくり磨き、様々の御調度ども整へ置き給へるに、其處に迎へは出でむ、と思して、しつらひ置きて、三日ばかり有りて、御供に、限なく睦ましき限の人二人、我も御馬に乗りて、女の御料に、桂一襲、はかま、小桂、指貫、子の料にきぬの指貫、摺狩衣、桂、はかまなど袋に入れて持たせて、何處とも人には宣はで、乾飯たど少し餌袋に入れて、いと忍びておはします。(九)



- (語釋)
- (三)わざ／＼來られしに
- (四)兼雅一人
- (五)我は此世に亡き人の積て居たかりしに
- (六)兼雅が空洞の中に
- (八)とて前には何事も言はて歸りし也
- (九)父母に
- (二〇)父母存生中
- (二一)父太政大臣
- (考異)
- (一)おはしましてーナシ
- (二)言へば一言へど
- (七)給ふとてー給はむと

言ふよしなき山を越えておはしまして、彼の木の下におはし著きて、しはぶき給へば、子出で来て見て、仲思(二)先におはしたりし人こそおはしたれ」と言へば、俊隆女「いでや、あな恥かし。何人におはすらむ。怪しくて又さへ見え奉り給ふこそ」と言へば、仲思「斯くふりはへ給へるに、いかで隠れむ」とて出でたり。一所入り給ひて、兼雅「汝はえ知らじ。母君に對面せむ」と宣へば、仲思「然なむ」と母に語れば、俊隆女「やがて亡せぬる人にてこそあらましか。何しにか知らせ奉る」と言へど効なし。入りおはして、兼雅「先にも聞えむと思ひしかど、まだきに聞えたらば、斯うもぞあらがひ給ふとてなむ。我ぞ加茂詣の御供にて見奉りし。其の時は、聞えし様に、求め騒がれるに、参りたりしかば、いみじうむつかり給ひて、おはしまして(九)限、片時も御身離ち給はず。隠れ心有る人なり。逃すな」とて聊かも立ち退けば、人を付けて衛らせ給ひしかばなむ、如何ならむ世に参り來む、と思はぬ時なかりしかど、自らならでは、おはせし所見たる人もなくて、得聞えざりしに、殿かくれ(二〇)

- (語釋)
- (一)俊隆女の
- (三)俊隆女の心
- (四)非常に古き事
- (六)其ても昔の愛情が無くなりはせぬものつちく思ふべし
- (考異)
- (二)なきーなき
- (五)思ひ給へしー思う給へし
- (七)失はぬー失はれぬ
- (八)所し置きー所をし置き
- (九)なからずをーをナシ

給ひて後、住み給ひし所を見しかど、いとど野の様になりて、尋ね聞ゆべき方もなかりしかば、行方なく覺束なきを、年頃思ひ嘆きつるは、然ば、斯うておはしけるなりけり」と泣く／＼宣へば、恥かし言はむ方なけれど、むげに聞えざらむも若々しければ、此の昔の簾のもとに寄りて、俊隆女「こよなき程の事なれば、斯く宣はするも覺束ながら、夢の様になむ、さも有りけむとばかり覺え侍る。怪しかりし程に、斯かる人さへ出で來にしかば、いとど所狭く、之を人に見せざらむ住處もがな、と思ひ給へし程に、かく世離れ果てて侍る。昔をだに、類なき身と思ひ給へしに、又斯かることも侍りけり」と泣く／＼言へば、兼雅「何かそは。世の常の様にて、清けなる住居し給はむを見ましかば、昔の志は失はぬものか(六)ら、心憂からまし。世を思ひ離れにけりと、此の御住處になむ、いとど深くは思ひつる。とまれかうまれ、御迎へにとてなむ参り來つる。此處にも劣らず、人目稀なる所し置きたり。其處にて、覺束なからずを聞こえ晴るけむ」と宣へば女君(八)

〔語釋〕
 (一)子仲忠
 (三)我は専ら佛の勳に打
 かかりて居りたし
 (四)心だて
 (五)此事忠こそ巻に見
 ゆ
 (六)仲忠故にこそは
 (八)仲忠の身の爲と覺悟
 して
 (九)仲忠
 (一〇)仲忠が
 〔考異〕
 (二)給へなりて「なり」
 ナシ
 (七)こそは「は」ナシ
 (一一)ありかむ「あるか
 む」
 (一二)又一ナシ
 (一三)源の「の」ナシ

俊隆女「けにいと好き事に侍れど、今はと限りに思ひ入りにし山路を、今更に思ひ給へ歸らむ空も恥かしう侍るべき。唯彼の人ばかりを、有りけりと申し置かれなむを、うしろやすく思ひ給へなりて、ひたみちなる行に思ひなりなむこそ嬉しからめ」と動きけもなければ、男君、兼雅、さも思さるべき事なれど、此の人も、年を數ふるに十二ばかりにこそなるらめ。大さおきてこそ賢くとも、人の世に經る有様限あるものなれば、率て出でて交らひなどをこそせさせめ。其の後見も誰かせむ。親なき人は、身も徒らになるものなり。昔千蔭のおとどの、唯一人子を、繼母に謀られて、今は音にも聞えずとなむ云ふなる。此の人に就きてこそは、斯かる住居も申し立ちけるを、これを徒らになさぬに思し取りて猶出で給へ」と切に宣へど、女君猶有るまじき事に思ひ離れたれば、兼雅「吾兒一人を率て出でて、此處に泊り給ひて、しづ心なく通ひありかむに、知らぬ人なく皆知りなむ。又吾兒をかく見置きて、我も心のどかに得有るまじ。此の日頃の程だに、魂の鎮まる方なく、思



- (一) 仲忠に命ずる也
- (二) 仲忠母子を
- (六) 我と同様するが否ならは
- (七) 仲忠を
- (一) 二人の侍

- (考異)
- (三) 惑はし一惑はかし
- (四) 親なれば一親の事なれば
- (五) 給ふに一にナシ
- (八) 御志も一御志は
- (九) 見給ひて一ナシ
- (一〇) 否と一否み

ひ入られつるを、はや聞え、唆せ。年頃知らで惑はしつるも、我が罪にあらず。そも親に従ひしなり。今は孝すると思ひて、出だし奉れ」と宣へば、子も斯く宣ふを忝なく、何れも同じ親なれば、さる孝の心の子にて、母に、仲忠「かゝるあさましき所にだに、幼き身一つを頼みて入り給ふに、今又出で給はむ事も、己が故と思せ」と切に言ひ、大殿も、兼雅「一つ所に在らじと思さば、参り來でも有らむ。唯これを思ほす所にて」と切に宣へば、此の御志も、むけになさじと見てしかば、けに、此の子に就きてかゝる所にも來ずやは有りし、と思ひなして、ともかくも言はれず、弱りたる氣色を見給ひて、兼雅「今は又、否と宣ふとも、御心に任すべきにもあらず」とたゞ急がしに急がして、衣取り出でて著せて、唆し給へば、我にもあらずながら出立つ。此の遺言の琴どもは、空洞に隠し置きて出でて行く。母をば、乗り給へりつる馬に乗せて、我も子も、後前につきて押へなどして、人留め給ひし所までおはし著きて、其處にて、二人の乗りたる馬に、我と子とは乗

- (語釋)
- (三) 燈火
- (六) 兼雅が見つめ居る故
- (八) 兼雅も
- (九) 仲忠が
- (一〇) 「この殿は」一本に「こゝは三條殿」とあるに從へば「多かり」迄を畫詞と見るべし

- (考異)
- (一) よりは一はナシ
- (二) よりは一はナシ
- (四) なか／＼なる一はのかなる
- (五) おろしたる一おはしたる
- (七) 入り給へば一入り行けは

り給ひて侍二人をば母の馬につけて、秋の夜一夜出で給ひて、曉方になむ、三條の大路よりは北、堀川よりは西なる家におはしつきける。御馬添に口かため給ひて、兼雅「若しかゝる事世に聞えば、汝等をさへ罪にあてむ」と戒め給ひて、御手づから、しつらひ置き給ひし所に率て入り給ひて、人に知らせ給はねば、御殿油も参らざりければ、暗うて見えねば、御手づから、御格子一間あけて見給ふに、秋の朝ほらけに、玉と磨きしつらひたる所に、ことなる飾もなくやつれ、なかなかなる様なれど、言ふ由なくもてはやされて、清けに類なく見ゆるを、天女を率ておろしたると驚かれ給ふ。子も果敢なき水干裝束なれど、かたち勝りて、いとめでたし。女は、年頃にいみじうやつれぬらむと思ふに、いとまばゆきまで恥かしきに、母をも子をも、つくぐとまもり給へば、せめて暗き方に入り給へば、我も奥へ入り給ひぬ。兼雅「吾兒は其處に寢よ。眠たからむ」とて御几帳の下に臥せ給へど、端の方に出でて御前の有様を見る。この殿は檜皮の大殿五つ、廊、渡殿、

御仲忠諸藝を習ふ。侍從に任せらる

(一)兼雅が女三宮以下を置きてある本邸にゆかぬ也

(二)俊隆女をのみ愛せり
(三)二十七歳歟
(六)山中にては種々の琴なかりし故琴和琴などは敬へざりし也
(八)母が専主持ちになれる故
(一〇)兼雅

(四)程なり程なる
(五)おはすれどおはすれども
(七)限りナシ
(九)おはせねばおはせねど
(一一)おとナシ
(一二)笛ふみ
(一三)二巻三巻一三三巻

さるべき宛々の板屋どもなど、有るべき限にて、倉町に御倉いと多かり。かくて後、おとど 一條殿にあからさまにもおはせず、こと御心なし。大人二十人ばかり、うなる、下仕などいと多く召し集めて、遣はせ奉り給ふ。夜晝昔の事を悔い、行く先のことを契り、哀にあかす思さるとまよに、聞えつくし給ふ。北の方、御年、三十に少し足らぬ程なり。御容貌唯今盛にて、思ほす事なくておはする儘に、光を放つ様に見え給ふ。子はた更にも言はず、此の世の人にも似ず、いと有難く類なし。琴をば更にも言はず、こと才も、さるべき師ども召して、笙、横笛も習はせ給ふ。彈物は、北の方さる上手におはすれど琴の限なかりしかばこそあれ、箏、和琴など習はし給ふ。御暇今は殊におはせねば、殿の出で給へる暇などに、氣色ばかりの事の様を聞え給へば、いと勝れて弾き取り給ふ。何事も、師に再び問ひ給はず、笛どもも、いと華やかに心有りて、晝は書を二巻三巻も讀み、琴笛を五六調も吹き引きとり給へば、「大將は、何處より斯かる子を尋ね出で

(語釋)
(四)元服
(五)叙賢して五位を賜ふこと
(九)仲忠の母が

(考異)
(一)罵り罵る
(二)率て一ナシ
(三)世に一ナシ
(六)かうぶり賜ひて一かうぶりせさせ給ひて
(七)せさせ一せさせ給
(八)得知り一得一ナシ
(一〇)如何にぞ一ぞ一ナシ

て、世のものの上手生し立て給ふらむ」と言ひ罵り、名高くなり給ひぬ。京に率て出で給ひし三年が程に、すべて世にせぬ事なくなりぬ。大將殿、唯これをかしづき思すより外のことなし。十六と云ふ年、二月にかうぶりせさせ給ひて、名をば仲忠といふ。上達部の御子なれば、やがてかうぶり賜ひて、殿上せさせ、上も、東宮も、召しまつはし、うつくしみ給ふ。上、大將に、朱雀、何處なりし人を、斯う俄に、いと優にては取り出でられたるぞ」と問はせ給へば、兼雅、年頃は、侍り所も得知り給へざりしを、一歳見出でて侍り。「物など少し心得て後、交らはせむ」と申ししかば、「さも侍る事なり」とて籠め侍りつるなり」と奏し給ふ。朱雀、誰が腹ぞ」と問はせ給へば、兼雅、故治部卿俊蔭が女の腹に侍り」と申し給へば、上驚かせ給ひて、朱雀、如何にぞ。三代の手は傳へたらむな。彼の朝臣、唐土より歸り渡りて、嵯峨の院の御時、「此の手少し傳へよ」と仰せられければ、「唯今大臣の位を賜ふとも、得傳へ奉らじ」と奏しきりて罷

- 〔語釋〕
- (一)此事前に見えたり
- (二)俊隆が
- (三)三代目仲忠
- (四)兼雅をいふ
- (五)俊隆女が寵を一身に集めて餘所見もさせぬ事
- (六)謙なるべし。餘りに擇り好みしてつまらぬ物に取らざる事

- 〔考異〕
- (一)中納言に「に」ナシ
- (二)なりたりしと一なりたりと
- (三)彼の「こ」
- (四)宣はずれば一宣へば
- (五)「あからめも」も
- (六)「効なく」効もなく

出にしより、参らで、中納言になるべかりし身を沈めてし人なり。さるはいみじき有識なり。唯女一人有りける、年七歳より習はしけるに、父の手にいと多く勝りて弾きければ父、「此の子は我が面起しつべき子なり。これが手より誰もく習ひ取れ」となむ言ひける、と聞きしかば、俊隆が在りし時に、消息などして、亡くなりて後尋ね訪ひしかど、亡くなりたりしと聞きしは、其許に隠されたるにこそありけれ。いと興有りや。彼の手は、三代はまして賢からむ」と宣はずれば、大將、兼雅「然侍るべけれど、殊なることも侍らざるべし。代々のついでとして、一手二手などもや仕うまつらむ」と奏し給ふ。かくて後なむ、さば、此の三條の北方は俊隆の女と人知りける。「年比は如何なりける人ならむ。いみじき色好をみ、斯くあからめもせさせ奉らぬこと」と怪しがり聞ゆるも有り。又「賤しき者を取りするて、言ふ効なくまつはさせ給ふぞ。色好みの果ては斯くぞ有るや。怪しきものに止まるとは」などぞ目やすからず聞えける。此の仲忠、帝も、東宮も、片

- 〔語釋〕
- (一)十一月の五節の女樂の下ならし、中の丑の日常置殿にて行はる
- (二)五節の舞姫五人、女御更衣攝關大臣等より奉るを例とす。これは兼雅が奉れる舞姫也
- (三)仲忠が
- (四)五節の試樂に仲忠御前にて琴を彈く

- 〔考異〕
- (一)たふしくに「たうたう」に
- (二)所なく「所もなく
- (三)勝れたれば「勝れ出でたれば
- (四)唱歌する「そうする
- (五)「瞬になむある」瞬なめり

時まかでさせず召し遣はせ給ふ。琴は、さる世の一なれば、たふしくにせねど、他遊びは、仲頼、行正が手を傳へし物の音なれど、此の師の手にも似ず、物より殊に抜け出でて、何處より誰が手を傳へけるぞとのみ聞えたり。容貌よりはじめ、交らひたる様など、もどかしき所なく、かどくしく、目も及ばず、勝れたれば上達部、御子等よりはじめ奉りて、褒めめで給ふ。年十八にて侍従になりぬ。其の年の五節の試の夜、后宮よりはじめ奉りて、多くの女御、更衣まうのほり給へるにも、此の出しの五節のかたち、用意、はかなくうち振舞へるも、人にはことにて、上御心留めて御覽す、舞果てて、曉方に、松方、時蔭、仲頼、行正、斯様の人々召し出でて、此の仲忠も召して、唱歌する聲も、人には勝れて、殊に聞ゆれば、上聞召して、御前に召し出でて、朱雀「常よりも物の音優るべき曉になむある。彼の三代の手、今宵つかうまつれ」と仰せられければ、畏まりて仕うまつらねば、父おとど、兼雅「猶手の限、仕うまつれ。度々仰せごと承はらぬ、いと畏う」

〔語釋〕
(一)河海抄琴五箇調、播手、片垂、水字瓶、蒼海波、雁調調

(五)少しも似たるものが無かりしに

(六)俊蔭女

(七)皇后宮職

(八)子が皇后宮職へ行き

〔考異〕

(一)彼のーナン

(三)比べさせむかしー比べさせむ昔

(四)若しもーしもナン

と切にそどのかし給へど、とかくやすらひて、御前より賜はせたるせた風の琴を、
五箇の聲に調べて弾くに、面白くめでたき事更に類なし。聞き給ふ人々、涙こぼ
れて、哀がりめで給ふ。上、朱雀、俊蔭の朝臣、唐土より歸りて、嵯峨の帝の御前に
て仕うまつりしを、ほのかに聞きて、又かゝること世にはあらじとのみ思ひしを、
これはこよなく優れり。いかで彼の母の琴を聞かむ。嵯峨の院なむ、彼の俊蔭が
琴は能く聞召し置きたらむ。仲忠率て参りて、聞召し比べさせむかし。彼の父の
朝臣の琴を、いとほのかに、二聲とも聞かずなりにしかば、いと覺束なくて過ぎ
にしも、かれが音に若しも似たる事も有る、と聞き渡れども、夢ばかり覺えた
るもなきを「な」と切に思したり。朱雀「彼の里に隠れたらむ人、暫し参らせて、
職の曹司の方などにやは住ませ給はぬ。さらば渡りて聞きてむかし」など宣はす。
大將いたく畏まりて候ひ給ふ。
かくて仲忠の侍従、何事にも優れ、唯今世に類なく抜け出でたる人なれば、萬の

〔語釋〕

(一)仲忠に交渉し來れど

(二)父の家

(三)源正頼、此家の事藤原の君の巻にあり

(四)此「ど」の字衍文なるべし

(五)姫君等

(六)正頼の聲にてなけれ

ばなりたくなし

兼雅相模の還鑿を行ふ、正頼仲忠を強ひて琴を彈かしむ、仲忠仲道と兄弟の約を結ぶ

(七)兼雅の家

(八)相模の節會は近衛府の承はりてする公事なれば事畢りて長官が御苦勞振舞をする也

(九)俊蔭女

(一〇)近衛府の人

(一一)其方が取計ひにてするといひて

〔考異〕

(二〇)物などー物なども

(三)にはーはナン

(四)なべての物ーなべての世の物

上達部、御子等も、聲にせむくと、思しあまるは、御氣色とり給へど、更にう
けひかず、殿にのみあり。人知れず思ふ事は、左大將殿にこそ、さるべき世の有
識は籠りためれど、又をかしき君たち數多有りて、心もやらめ、其處ならではあ
らじ、など思ひて他心なきなるべし。

年還りて八月に、此の殿に相模の還鑿有るべければ、おとど北の方に聞え給ふ。
兼雅「鑿の事すべきに、早かづけ物の事させ給へ。此の度の事、此處にて始め
てすることなるを、心殊にまうけの物など勞りてし給へ。例は、中將より始めて
つかさの人、皆祿は取らするを、今年は、そこに物し給ふと、聞く人も心憎く思
はむものぞ。衛府の主等のも設け給へ。例は中將には女の装束一くたりづつ、少將
には白き袷一襲はかまをなむ物するを、此の度は中將にはなほ細長を添へて、少
將には綾の袷、三重がさねのはかまなどをまうけ給へ」と聞え給へば、俊蔭女「いさ、
如何にする事にかあらむ」と宣へど、物の色しざまなど、なべての物の様にもあ

- 〔語釋〕
- (一)此の置詞のきれめ明かならず、今姑く本文の如くにしたり
- (二)兼雅俊薩女
- (三)食事
- (四)仲忠
- (五)諸本、こころ「こふ等」とありて、眞、國府等の字をあてたれども、今は「たふ」とあるに從へり、「たふ」は袴布なるべし
- (六)衣服の事を司る女
- (七)妻妾等
- (八)兼雅に音信する
- (九)俊薩女以外の女に
- (一〇)堀下にしぞき
- (一一)つかさ下づかさ

らず、優れてめでたくし出で給へり。

〔畫詞〕此處は三條殿に、殿、北方並びておはします。御臺参れり。侍從内裏よりまかで給へり。國々の御庄より、たふ、絹布など持て参れり。御急ぎの料にとて、綾、羅、縑などおほく奉られたれば、御匣殿する人、御前にて計らひ定む。染草、何くれの事定めあへり。庄々の物どもは、一條殿にも分ち奉り給ふ。おはすることは絶えてなければ、御方々に思し嘆き、様々に驚かし給ふもあれど、すべて唯今は、他人に物聞えむとも思したらず。饗應廿二日なれば、其の日になりて、いとなく設けさせ給ふ。御前に砂撒かせ前栽植させ、あけぱり新らしく打ちて、寢殿の南の廂に、御座装はす。打敷しとね、皆新らしくせられたり。めでたき四尺の屏風几帳ども、方々に立てられたり。内に御たち、うなるども、襲の裳、唐衣、汗衫ども著て居並みたり。うなるはあを色、一藍襲ねて著たり。おとど人々に、兼雅内に心してあれ。我がつかさ

- 〔語釋〕
- (一)正頼
- (二)右近中將祐澄
- (三)故左大臣祐仲
- (四)右近少將仲頼
- (五)正頼
- (六)我家にて少しの備しある時にも兼雅は必出席せらるる故
- (七)俊薩女をいふ
- (八)兼雅は
- (九)攝待役をつとむ
- (一〇)兼雅の兄忠雅
- (一一)大開
- (一二)相撲どもに下されし布を分つたるべし
- (一三)よく多くの琴の調子を調へ合せたを褒めたる也
- 考異
- (一〇)堀下にしぞき
- (一一)喜び喜び
- (一二)中少將—中將少將
- (一四)程々に一程に

の佐も恥かしき人ぞや。左大將の御子、左のおとどの御子ぞかし。いと恥かしきあたりなり」と宣ふ。北の方は、琴どもの装束しつくりて、琵琶、箏など同じ聲に調べ合せて置き給ふ。左大將宣ふ様、正頼、右大將の三條の家にて、相撲の還饗し給ふべかなるに、聊かの業するにも、必らずいしまするを、彼處にし給はむ事も、必らず訪ふべし。さても心憎き人の、珍らしくし給ふ所なるを、見習ひもせむ」など宣ひて、御供の君達引き續き出で給ふ。人に許され氣高く物し給ふ君なれば、多くの人垣下におはす。右の大殿も渡り給へり。主の大殿喜び畏まり給ふ。かくて皆著き渡り給ひぬ。上達部、御子たちの御前には、紫檀の机に綾の表参れり。中少將には蘇枋の机、官人には皆程々につけてし給ふ。かくて御箸下し給ひ、御土器はじめ、相撲出でて、五手六手ばかり取りて、最手出で来て布引きなどするに、主の大殿、装束き置かれたる琴どもを取う出させて、あてくくに奉り給へれば、各取りて掻き鳴らし試み給ひて、「爪覺えて調べられたる御琴どもかな。

〔語釋〕

(一) 祿の物を盛る時などに用ふる器也とぞ、半取と傍書せる本あり

(二) 呼び出しては

(三) 相撲の召集に諸國へ使はさるゝ使

(四) 舍人中より撰ばれたる相撲

〔考異〕

(一) 遊ばしぬー遊ばせ

(二) 五つー三つ

(三) 昇き出てー昇き立て

(四) 尉までは尉たちは

(五) 今日ー今日は

人のえ爲ぬはや」と宣ひて、遊ばしぬ。笛ども吹き合はせて遊ばす。いとになく面白し。例は、舍人、相撲人などには、信濃の布を賜ひけれど、今年は心ことに、陸奥の絹を賜はす。蘇枋の脚つけたるなかととり五つに東絹積みて、御前に昇き出でて、政所の人装束して出で来て、召し立てつゝ賜ふ。御使の長相撲の最手には四疋、唯の舍人相撲には二疋賜はす。又この中將少將の御隨身には、一疋づつ賜はす。かつけもの、垣下の御子等に、赤朽葉の花文線の小袷、菊の摺裳、綾、搔練一かさねあはせのはかま、宰相よりはじめて中將までは、綾の摺裳、黄朽葉の唐衣一かさね、給のはかま、少將より始め衛府の佐等には薄色の裳、黄朽葉の唐衣一かさね、はかまの色劣れり。まうちぎみたち、つかさの尉までは、白き綾の單衣がさね、給のはかま、人々の御供なる官有る人には、白張の袴、一くだり、府生には白きひとへがさね賜ふ。今日参りたる人、祿賜はらぬ者かつなし。かよる程に、仲忠の侍従、かつけもの取りて、今ぞ出で来たる。左大將引き止め

〔語釋〕

(一) 酒を

〔考異〕

(一) 目をもーもしチン

(二) 酔ひて本性ー酔ひてもはらし給はねば本性

(三) 誠ー誠は

(四) りうかく風取り出てーりうかく風取り出てりうかくを取り出て

(五) 宣へばー宣へれば

(六) 忘れ果て侍りしにー忘れ侍りしに

(七) 恐ろしさにー恐ろし

給ひて、度々強ひ給ふ。侍従、仲忠「かしこければ」とて飲み煩らひて、仲忠「いと恐ろしき目をも見侍るかな」と言へば、左大將、正頼「我が主を酔はし奉るも心有りや。酔ひて本性現はし給へとぞや」と戯れ給ひて、正頼「誠、彼の物の音、聊か聞かせ給へ。今日の御饗に、此の御琴の音せねば、春の山に鶯の鳴かぬ朝、秋の池に月の浮ばぬ夕になむあるべき」と切に責め給へば、父大殿内に入り給ひて、りうかく風取り出て出で給へれば左大將取り給ひて、正頼「これに唯御手一つ遊ばせ。今年の五節の夜ほのかに承りて、いよく中々なる心地なむする」と宣へば侍従、仲忠「年頃むけに忘れ果て侍りしに、切なりし宣旨の恐ろしさに、辛うじて思ひ給へ出でて、一手つかうまつりしを、抑はかくしうや侍りけむとだに覚え侍らず。今はまして、かけても覚え侍らず。其の上に、今日の御饗に、仲忠が手仕うまつらむは、蓬の野邊に蛙の聲する心地なむつかうまつるべき」と聞ゆるに、主の大殿、兼雄「すきものや。なほ仕うまつりて重き祿やは賜はらぬ」左大將、正頼「正頼

〔語釋〕
(一)第九女あて宮をいふなるべし、藤原君卷以下に見ゆ

(二)今日を晴と用意したる

(三)客人の左大將正頼なるべし

(四)功つきて即功者づきてなるべし

(六)たるに―たるだに歎

(八)かづけ物を仲忠がもちぬをいふ

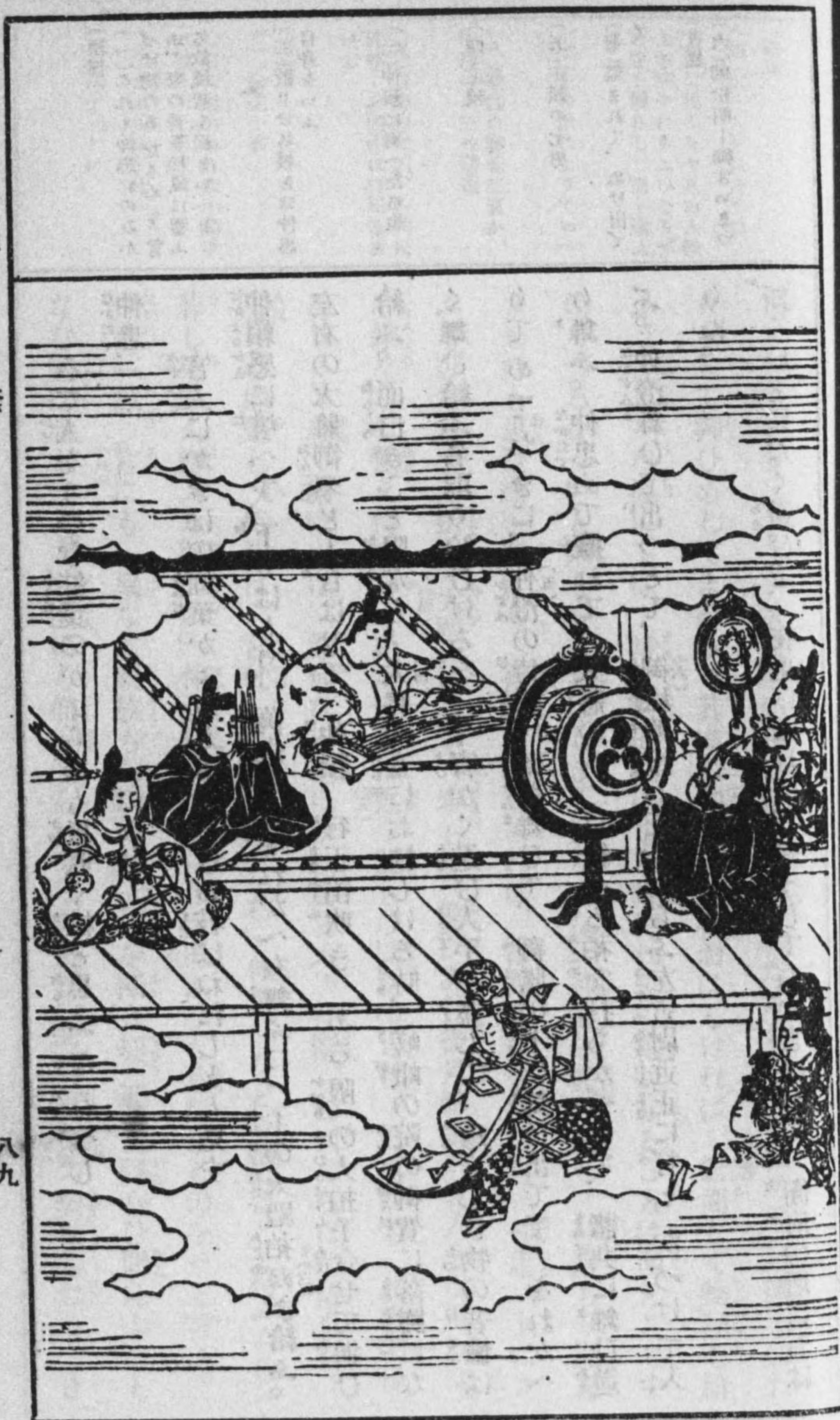
〔考異〕
(五)興じめて―めて興じ

(七)ゆいこくの手を―ゆいこくの手こくのみつを―ゆいとくのをこみつを―ゆいとくのをこんこくのみつを―ゆいこ

んこくのみつを

ぎ給ひて、正頼御頭の寒けなるも斯かればぞかし。

がらうたしと思ふ女の童侍り。今宵の御祿には、それを奉らむ」と宣へば、辛うじて萬歳樂聲仄にかき鳴らして弾く時に、仲頼、行正今日を心しける琴を調べ合はせて、になく遊ぶ時に、なほ仲頼感に堪へて、下りはしり、萬歳樂を舞ひて、御前に出で來たり。行正、琵琶、大將、倭琴、皆調べ合せて、有る限りの上達部聲を出だして、遊び興じ給ふ。仲忠例の曲の手をば弾かで、思ひの外の物を弾く時に、正頼「かくては御祿も如何はせむ。猶少し細かに遊ばせ」と切に宣へば、調べ換へて弾く。面白きこと限なし。未だ仲忠斯様に弾く時なし。御前にて弾きしよりもいみじう、琴の聲もくうつきてなど弾きたれば、なつかしう和らかなるもの。いと珍らかに面白し。萬の人興じめで給ふ。唯少しかき出でたるに、大殿の内響き満ちていみじきを、ゆいこくの手を聲の限りかき立てて弾き給ふに、いとどありとある人めで惑ひて、左大將の大殿、まして哀がりめで給ひて、御袖一襲を脱ぎ給ひて、正頼御頭の寒けなるも斯かればぞかし。



〔語釋〕

(一)仲忠

(二)俊隆

(三)あて宮をいふ

(四)正頼をはめていふ也

〔考異〕

(一)Sと一ナレ

(二)給へりける給へる

(三)聞き傳へてきもたえて

むちも、さる契なせ」となむ仰せられし」仲忠、「いと嬉しき事」など互に宣ひて
 仲澄、「いと痛う酔ひて、え具に聞えず」と言へば仲忠、「日頃思ひ給へつることを
 取り申しつるなむ、今宵の喜びに侍る」といふ。仲澄「今彼の殿に候はむ」とて仲
 澄まかでぬ。
 かくてこれかれ遊び罵りて、夜いたう更けて、皆歸り給ひぬ。主の大殿、北方に
 聞え給ふ、兼雅物は能く見給ひつや。御子こそ猶いと人に優りためれ」と宣へば
 北方、俊隆「いでや、己は見知るべき人かは」兼雅「されど、御眼ぞ恐ろしきや。故君
 には、天人もえ勝らざりけるを、皆習ひ取り給へりけるこそは畏けれ。それに侍
 従おとらふこそ、人々思ひためれ。才の徳に、戯にても大將の君の、宣はぬこと
 なり、東宮の宣はするにも、出だしたてられぬ女取らせんと宣ふぞ有難き。さばか
 り、天の下の人の聞き傳へて惑ふ君を、眞實にはあらねど、嬉しくこそあれ」北
 方、俊隆女「さもめでたき君かな。御子どもはた、世の常にもあらず物し給ふらむ」

〔語釋〕

(一)正頼をはむる也

(二)仲忠

〔考異〕

(一)正頼其妻大宮に還獲の有様を語る

(二)正頼の妻嵯峨院女一宮、大宮といふ

(三)拔群

(四)あて宮のも隆て

〔考異〕

(一)入りていかで

(二)歸り給ひぬ仲頼一歸り給ひぬ御時よく遊びて入り給ふ仲頼

(三)行正一行正も

(四)いと一ナレ

(五)御手づから一みづから

(六)樂のここの

大殿、兼雅「いとみじきものぞや。さばかり亂れてはしたなかりつるに、他人の酔
 様には似ずかし」など宣ひて、二所打臥し給ふ。侍従曹司へも入らで御前に伏し
 ぬ。

左大將殿も歸り給ひぬ。仲頼、行正御送しけり。やがて宿直せむと言ふ。大殿入り
 給へば宮大宮など斯く遅くはおはしつる」大殿、正頼「彼の御饗のいとなく警策な
 りつれば、皆人唯今までなむ有りつる。あてこそその御徳に、面白うめでたきもの
 をも聞きつるかな」宮大宮何事ぞ。あな羨まし」と宣ふ。大殿、正頼「例の物の上手
 どもいと面白う遊ぶに、侍従出で來なむと思ふに、更に出で來で、日の暮れつれ
 ば、いと口惜しかりつるに、夕つけて、かづけもの取りて出で來るものか。その
 かみ、捕へて酔はして、例の琴弾き給へ」と言ふに、更に聽かず。父大殿内に入
 りて、いとめでたき琴を、御手づから持て出で給ひて、「猶つかうまつれ」と宣へ
 ど、更に聽かず。唯樂の聲を、心やましよう物にかき合はせては弾くものか。いと

〔語釋〕
〔三〕帝
〔四〕此餘の事次の卷々に記すべしの意

〔考異〕
〔一〕になくーになき
〔二〕前にナシ

しづ心なくて、猶遊ばせ。祿にらうたしと思ふ女、奉らむ」と言ひたれば、下りはしり、舞踏して、になく聲調べて、いと數多の手弾きつる。すべて言ふよしなく、父大殿涙落し給ひつ。けにはたいとめでたき人にこそあれ。遊びたる様も更に他人に似るべうも非ず。いかで聞召させむ」と宣へば、宮、大宮「いかで彼聴かむ」大殿、正頼「更におほろけにてすべきに非ず。琴を前に置かせ給ひて、上の責めさせ給ふにだに、手も觸れぬ人なり。今宵も、疎に言はましかに、逃げなました、猶己こそ年経にたる翁にて、許さず責めたりつればこそ、むつかりながら弾きつれ」宮、大宮「あてこそして、猶弾き給へ。物聞えむ」など言はど弾きてむや」正頼「そは弾きもしてむ。今折あらむ時」と宣ふ。かづけものどもを、あな清らと見給ふ。次々にぞ。

藤原の君

● 源正頼の素性。二人の妻大臣上及大宮。正頼の三條大宮の邸。子ども及び聖君等。● 絶世の美人第九女あて宮。源實忠の懸想。侍女兵衛の君を語らふ。● 藤原兼雅あて宮に懸想す。祐澄を語らふ。● 平正明あて宮に懸想す。兼雅を語らふ。● 實忠、兵衛の君を介してあて宮を挑む。● 兼雅、實忠、正明、兵部卿の宮各あて宮を挑む。● 仲澄あて宮に懸想す。● 上野の宮あて宮を娶らんとして僧巫博徒等を集めて會議す。様々の獻策。東山の法會の詭計。● 正頼、敵の計につきて計を設く。奇怪なる法會。上野の宮實あて宮を奪ひて妻とす。神佛に奉養す。● 致仕の大臣三春高基の素性。其の吝嗇。あて宮に懸想して宮内の君を語らふ。● 仲澄、實忠、兵部卿の宮、正明、彈正の宮各あて宮を挑む。● 良岑行政の素性。あて宮に懸想す。● 懸想して宮あて宮を語らふ。● 滋野眞菅の素性。あて宮に懸想す。● 媒せんとする老。老妻忠澄の乳母長門を語らふ。● 失敗。眞菅更にあて宮の老女殿守を語らふ。● 懸想人等各あて宮に文を贈る。● 眞菅殿守を訪ひてあて宮の事を謀る。● 實忠との邂逅。● 七月七日、正頼の家、女君たち賀茂川に髪を洗ふ。● 懸想人等あて宮と歌を贈答す。

昔、藤原の君と聞ゆる。一世の源氏おはしましけり。童より名高くて、容貌、心魂身の才人にすぐれ、學問に心入れて、遊の道にも入り立ち給へり。時に、み

● 源正頼の素性。二人の妻、大臣上及大宮
〔語釋〕
〔一〕是源正頼也
〔二〕皇子にて源姓を賜はれる人
〔考異〕
〔三〕給へり時にみ人一人給へにに見る人

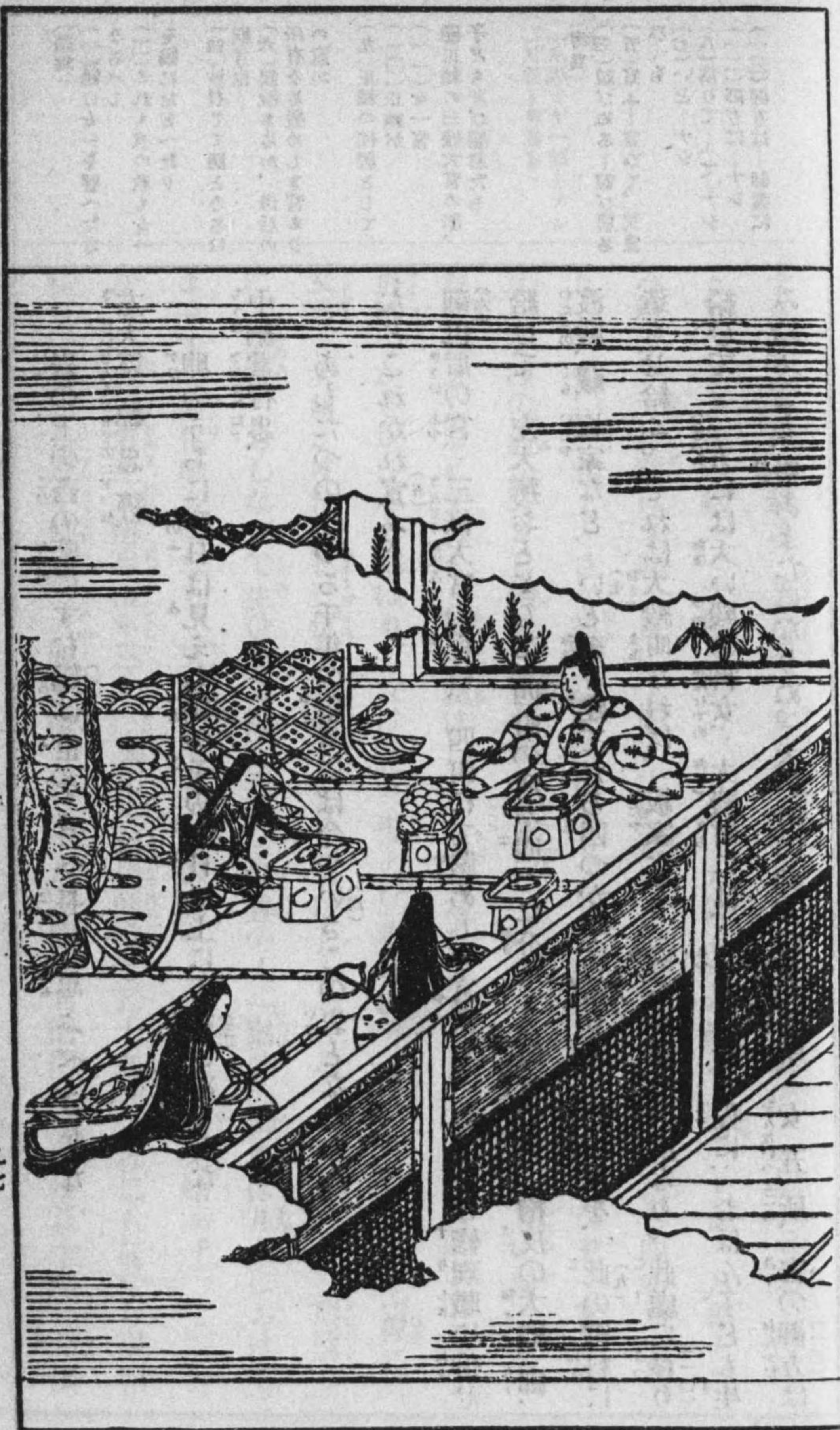
- 〔語釋〕
- (一) 橋某、千隆の同胞
- (二) 大殿の上といふ
- (三) 嵯峨
- (四) 出世すべき
- (五) 三つ目の祝の夜
- (六) 三つ目の祝の夜
- (七) 女一の聲になりたりとて
- (八) 並びて生ふる松は女一と大殿の上とを例へたるなるべし
- (九) 家門の興隆を圖るべしと也
- (一〇) 大殿の上の同胞
- (一一) 考異
- (一二) 取らせむ取らせて
- (一三) 八などいなど
- (一四) 右大臣一前右大臣

な人、「なほ賢き君なり。帝となり給ひ、國知り給はましかば、天の下豊かなりぬべき君なり」と世界舉りて申す時に、萬の上達部、みこ等、婿に取らむと思はす中に、時の大政大臣の一人女に、御かうぶりし給ふ夜、婿取りて、限なく勞はりて、すませ奉り給ふ程に、時の帝の御妹、女一の御子と聞ゆる、后腹におはします、父帝、母后に宣ふ、嵯峨、此の源氏、唯今の見る目よりも、行く先なり出でぬべき人なり。我が女、此の人に取らせむ」と宣ひて、婿取り給ふ。三日の夜、御土器取りて、嵯峨、此處に斯く物するとて、彼の大政大臣の女を忘れず、ひとしく通ひ給はん良かるべき」など宣ひて、

嵯峨 岩の上に並びておふる松よりも雲井におよぶ枝も有りなん
源氏正頼、御土器賜はるとて、

正頼 松の根を植うる今日より岩の上を廣き林と人に知らせむ

右大臣 橋 千隆



藤原の君

〔語釋〕
 (一)鶴は女一を譬へたるなるべし
 (二)これも次の歌も女一を鶴にたとへたり
 (四)沙長じて歳となるは祝言也
 (六)誤脱あるか、母后の所有なる殿めしき宮ありの意か
 (九)正頼の住居として
 (一〇)正頼が
 (一一)女一宮
 (一三)正頼の三條大宮の邸、子ども及び聖君たち

〔考異〕
 (三)並びぬる一並び居る
 (五)宣ふ一宣ひて、又宣ひも
 (七)いと一ナシ
 (八)當りて一ナシ
 (一一)御方に一ナシ
 (一二)御方は一御腹に

岩の上の昔の蓆にすむ鶴は世をさへ長く思ふべきかな
(二)
 左大臣源忠経

卵のうちに昨日は見えし鶴の子の今日は上にも並びぬるかな
(三)
 中納言行忠

あしたづのうつる千年の宿りには今やいさこの岩となるらん
(四)
 などこれかれ宣ふ。

御母后の宮、三條大宮の程に、四町にて殿めしき宮あり。おほやけ修理職に仰せ給ひて、左大辨おとどとして、四町の所を四つに分ちて、町一つに、檜皮の大殿、廊渡殿、藏、板家など、いと多く建てたる四つが中に當りて、面白きを、此の御料に造らせ給ふ。それは大殿町なれば、板家なく、有るかぎり檜皮なり。此處に移り給ひて、一方には大い殿の御女、大殿町には、宮すみ給ふ程に、おほん子ども生み給ふこと、數あまたになりぬ。大い殿の御方に男四所、女五所、宮の御方は

〔考異〕
 (一)九郎一十一郎一ナシ
 (二)男君一男君を

十五歳より生み給ふ。男八所、女九所、先づ宮、大君、太郎、次郎、三郎、四郎、とりつどき生み給ふ。大殿の御方、五郎、六郎と生み給ふ。宮、七郎、八郎と生み給ふ。大い殿に九郎、宮に十郎、大い殿に十一郎、中の君、三の君、四の君、宮、五、六、七、八、九、十、さし並びに生み給へり。又大い殿に十一、十二の君、宮、十三、十四の君、又さし續き、同じ年の男君、二所ながら生み給ふ。互に斯う生みおはしましなどすれど、御中麗はしく、清らなること限なし。かくて此の君たち、男はつかさかうぶり賜はり、女は裳著、髪あけ、男に就き、宮仕し、調ひ給ふ程に、父君、大將かけたる正三位の大納言になんおはしましける。何れもく、形清らに、心良く、おしなべて生ひ出で給へるを、世界の人、「猶此の御族は凡人におはしまさず、變化のものなり。天女の下りて生み給へるなり」と聞え給ふ。かくて太郎君左大辨忠澄年三十、次郎兵衛佐師澄年二十九、これ二人ながら宰相なり。三郎右近中將藏、人頭祐澄、年二十八、四郎右衛門佐連澄年二十七、是は

〔語釋〕
(一)仁壽殿女御を云ふ

(二)母女一宮の兄朱雀院

(四)嵯峨院

(五)在大臣源季明の長子頭宰相實正

(六)朱雀院の弟

(八)「太郎」は次郎の誤なるべし

(一〇)女一宮腹の

〔考異〕

(三)御腹の「御復に、」御復の中には「とあるべき也

(七)忠雅の北の方一忠雅の太郎北の方

(九)十二は九つ―十二の君は年九つ

宮の御腹。大い殿の御腹は、五郎兵衛佐顯澄年二十六、六郎兵衛大夫兼澄年二十
五。宮の御腹、七郎侍從仲澄も同じ年、八郎皇太后宮の大夫基澄年二十三。大い
殿の九郎式部丞殿上人清澄年二十二。宮の御腹の十郎兵衛尉藏人頼澄二十。大
い殿の御腹、十一郎親澄年六。宮の十二郎行澄同じ年。御女、宮の御腹の大い君
は、御せうとの今の帝につかうまつらせ給ひけり。男四人、女三人、七人の
宮等の御母にて、一の女御年三十一。大い殿の御腹の、先帝の御兄弟の中務の
宮の北の方年二十一。同じ腹の三の君、左の大い殿の頭宰相の北の方、年十九。
四の君、左大臣殿の次郎左近の中將源實頼の北の方、年十八。宮の御腹の五
の君、民部卿の宮の北の方、年十七。六の君、右大臣藤原忠雅の北の方。
七の君、右大臣殿の太郎衛門督藤原忠俊の北の方、十四。未だ御夫なきは、八
の君、ちご宮、年十三、九の君あて宮と聞ゆる十二、十の君、今宮、十一。大い殿
の御腹、十一は十、十二は九つ。此方の御腹の十三の君袖宮八つ、十四の君けす宮

〔語釋〕

(二)大い殿の上腹の中の君三の君四の君

(三)五の君六の君七の君八の君

(四)女一腹の

(五)仁壽殿女御

(八)家禮の詰所

(九)正頼の長子左大辨兼參議忠澄

〔考異〕
(二)家なれば一家なり

(六)「なんど」など

(七)大殿は―大殿に

七つ、其の御弟の男宮六つになむおはしましける。かくて、こよばくの男女、男
も妻具し給へるも、更に外住せさせ奉り給はず。正頼「大きな家なれば、わが
世の限は、かくて住み給へ。外へおはせむは我が子にあらず」と聞え給ひて、四
町の殿を、腹一つをば、町一つにすませ奉り給ふ。五間の大い殿一つ、十一間の
長屋一つづつ奉り給ひて、彼方の御腹の三所、宮の御腹の四所、町々にすませ
奉り給ふ。御夫なき御方も皆まうけ給へり。かくて父母のすみ給ふ町には、寢
殿にはあて宮より始め奉りて、此方の御腹の若君等、内裏の女御の御腹の女宮た
ちなど、皆おもと人、乳母、うなる、下仕など、容貌心、有る中に優りたるを擇り
さふらはせ給ふ。西の大い殿は、女御の君の御方、東の大い殿は宮たちすみ給ふ。父
母は北の御方になん住み給ひける。男君たちは、ある限り、廊を御曹司にし給ひ
て、板屋をさぶらひにしてなんありける。女房の曹司には、廊の廻りにしたるを
なん割りつと賜へりける。太郎宰相の御方には、殿のあたりなりける所々を賜ひ

◎ 絶世の美人第九女あて宮。源實忠の懸想。侍女兵衛の君を語らふ

〔語釋〕

(一) 民部卿は左大臣季明の長子實正、中將は二男實賴

(二) 實正の妻、三の君、あて宮の異母姉

(三) 正賴の邸に

(四) あて宮の住める殿

(五) 口すさび、あて宮に關する言ひ草

〔考異〕

(一) 御心にもしもしナシ

(二) 宰相にて一にて一ナシ

(三) 唯一ナシ

(四) 心ばへある人一心ばせある人一心ことなる人

(五) 聞ゆれば一れば一ナシ

つよ、御厩にし、御倉町政所にし、所々さし離ちつよなむしたりける。

かくて、何れともなく清らにおはしましける中に、あて宮は、御年十二と申しける

二月に、御裳奉る程もなくおとなになり出で給ふ。あるが中に容貌清らに、御

心らうくじく、今めきたる御心にもあり、物の心も思し知りたれば、父大殿母

宮、限なくかしづき奉り給ひて、此の君を如何にせまし、と思してあり經給ふ

程に、民部卿、中將の御弟、左大臣殿の三郎に當り給ふ、實忠といふ、宰相に

て、此のあて宮に御心付き給ひて、いかで聞えむ、と思せど、父大殿に聞え給ふ

とも許され給ふまじく、忍びてあて宮に聞えたまはんも漫なるべければ、思ほし

煩らひて、唯民部卿の殿の御方に聞えむと思しわたるに、あて宮の御乳母子、容

貌も清けに心ばへある人、兵衛の君とてさふらふに語らひつき給ひて、實忠、實忠

殿にさふらふとは、中の大殿に知らせ給へりや、など思すことを宣へば、兵衛他

戲ごとは宣ふとも、此の斯る口遊びは、更に承らじ」と聞ゆれば、實忠「人の

初言は咎めぬ物ぞ」なとて、實忠「思ひ餘りてこそ、幾多の人の御中に、君にしも

聞ゆれ」と宣へば、兵衛「さらば、まめやかなる御志にて宣はするか。然らでは、

かよふことは宣ふまじとこそ覺ゆれ」など聞えつよ有るに、宰相、珍らしく出で

來たる雁の子に書きつく。

實忠「かひのうちに命こめたる雁の子は君がやどにてかへらざらなむ

とて日頃は」とて、實忠「これ中の大殿にて、君一人見給へ。人に見せ給ふな」と

て取らせ給へば、兵衛打笑ひて、兵衛「かばかりに親生み付くらむ人の様にもこそ

仕うまつれ」實忠「いで斯ばかりぞかし、御心は」と宣ふ。兵衛賜はりて、あて宮

に、「すもりになりはじむる雁の子、御覽せよ」とて奉れば、あて宮「苦しけなる

御物願かな」と宣ふ。

かくて又、右大將藤原兼雅と申す、年三十ばかりにて、世中に心憎く覺え給へる、

限なき色好にて、ひろき家に、おほく屋ども建てて、良き人々の女、方々に住ま

◎ 藤原兼雅あて宮に懸想す。祐澄を語らふ

(一) 三十一、四十

(九) ちて一ちち

(六) かへらざらなむ一か

(三) 御中一「御」ナシ

(二) 考異

やと、言多く聞え給ひつよ、それにつけてなむ御消息通はし給ひける。それに斯くなむ。

正明 さざら波立つをば知らで川千鳥はね如何なりと人に告ぐらむ

と思ふなむ妬かりける。

とて奉り給へば、兵衛尉賜はり給ひて、あて宮を呼び離ち奉り給ひて、見せ

奉り給へば、何心なく見給ひて、あて宮「うたてある文を見せ給ひけるかな」兵

衛尉、頼道「まさなからむをば見せ奉りてんや。平中納言のなり」と聞え給へば、

あて宮「うたておはする君かな」とて立ち走り給へば、強ひて御懐に押し入れて

おはしぬ。

かくて、源宰相は、猶彼の兵衛の君に思ふ事を語らひつよ、實忠「夢ばかりの返を

だに見せ給へ」となむ宜ひける。花櫻のいと面白き花びらに、

實忠 思ふ事知らせてしがな花櫻風だに君に見せずやあるらむ

〔語釋〕

(一) さざら波は正明の心
にたとへ川千鳥はあて宮
にたとへたり

(二) 飛でもなむ文をば

〔四〕實忠

〔考異〕
(三) さば「は」ナレ

● 實忠、兵衛の君を介
してあて宮を挑む

〔語釋〕

(二) あて宮へ文を取次ぐ
事が知れたらば

(三) ちとなく

(四) 差上げた處が御返事
はむづかし

(五) 兵衛があて宮の返歌
の案をつくる也

(六) 正明の歌を兵衛が買
ひたるもの如くに言ひ
なす也

(七) 正明にいよ也

(八) 比處誤脱あるべし

(九) 仄かにはの歌はあて
宮の御前に居合せし人々
の作れる也と作り言をい
よ也

(一〇) 六帖「かきたれて
る白雪の君ならばあな珍
らしと言はましものを」

〔考異〕

(一) これナレ

實忠「これをだに」とて書いて、兵衛に、實忠「これ御覽せさせ給へ」とて取らすれば、

兵衛「いと恐ろしき事。かよる聞えあらば、兵衛が身は何の塵泥にかならむ」と聞

ゆれば、實忠「何の異なること聞えさせたらばこそあらめ、花御覽せさすばかりに

こそ。何心有りてとかは見ゆる。猶おいらかに参り給へ」兵衛「さらば賜はら

むかし。例の覺束なうこそあらめ」とて、取りて、御前にて書きつく。

兵衛 仄かには風のたよりに見しかども何れの枝と知らずぞ有りける

と書きて、兵衛「斯く言ひたらば」など聞ゆれば、あて宮「誰ぞ、君を斯く言ふらむは」な

ど宣ふ。兵衛持て出でて、兵衛「御覽せさせつれば、兵衛が許に賜へるなり」と聞えつ

れば、宣ひ紛らはして笑ひ給へれば、御前にてこれかれが聞えつるなり」と聞ゆ

れば、正明「さればよ。君の御手にこそあめれ。珍らしからぬも、降る雪とも聞え

つべしや」と聞ゆ。兵衛「まめやかには、斯く怪しからぬこと承らじ。戯にて

も、人の御仇言など聞え給ふべくなむあらぬ」など聞ゆ。宰相、實忠「猶此の返、聊

〔語釋〕
 (一)あて宮に申上げて
 (二)火入
 (三)灰として入れて
 (四)合せ薫物の名
 (五)ひとり獨、火取
 (六)思ひの烟は凝りて雲となるものなれば見ゆべきものをの意
 (七)兵衛が
 (八)返事し給へ
 (九)此處の文のつゞき
 (一〇)脱文あるべし
 (一一)返事のなきを責むる也
 (一二)御覽せよとは「御覽せさせつれど」歎
 (一三)找戀の切なる由を告ぐる意か
 (一四)すゑて―そへて―くすべて
 (一五)歸未だ―歸はまだ
 (一六)など入れて―などし入れて

かなりとも、聞えて見せ給へ。さて後は、又も聞えじ。人の身に我が魂通はなむとは、思ふことを人の知り給はぬ時になむ思ほえける」など宣ふ。かくて、銀の火取に、銀の籠造り被ひて、沈を擣きふるひて、灰に入れて、下の思ひにするて、黒方をまろかして、それに、
 實思 ひとりのみ思ふ心の苦しさに煙もしるく見えすやあるらん
 雲となる物ぞかし。
 と書き、「兵衛の君の御許に」とて有れば、例のあて宮に御覽せさせれば、あて宮をかしけなる物にこそあめれ」と宣へば、兵衛、「如何これをば宣はん。時々は宣はせよかし」あて宮、「いでや、物言ふらんわざも知らず。今習ひて」と宣ふ。宰相の君、實思の覺束なさの癖、未だ止め給はざりけりな」と言へば、兵衛「御覽せよと、戯れに言ひなして、笑ひ給ひにしかば、又も聞えず」と聞ゆれば、宰相、をかしけなる蔭繪の箱に、絹、綾など入れて取らせ給ひて、斯かる事を宣ふ。兵衛、「斯

〔語釋〕
 (一)正明の戀を申上ぐる積りて其様子を示すこと
 (二)はつが惡さう故
 (三)實忠の兄實正、正頼の三君の夫
 (四)實忠の兄實頼、正頼の四君の夫
 (五)後進は行末却て有望なりとの義歎
 (六)命の長短は分らぬけれども
 (七)實正、實忠、正明、兼部御官各あて宮を挑む
 (八)何も實忠が悪いといふ譯ではなく
 (九)あて宮の妹たちの生長を待ち給へ
 (一〇)兼雅
 (一一)詰澄
 (一二)あて宮へ取持ちのこと
 (一三)するを―すめるを

く宣はすれば、試みに斯くなむと聞えんとて、氣色ばめど、萬に宣ひ紛らはして、座なるべければ、聞え紛らはしつゝなむ宰相、實忠などか然しも有らむ。同じ同胞を、民部卿、中將などをば棲ませ給はずや。などか實忠をしも覺しおとすべき。後おひともいふものなり、命をこそ知らね」兵衛、「あしくおはしますとには、あらず、彼の御方は、如何に思すにかあらむ、猶かくておはします可きにこそあらぬめれ。其の御次々におひ出で給ふを念じ給へかし」など聞ゆ。
 かくて彼の右大將殿より中將の君の御許に、
 兼雅此の頃、殿にまゐり來むとするを、うちはへ物忌にてなん。今日は、春日へなむ詣うで侍る。彼の聞えしことは、未だ物し給はぬにや侍らむ。此の頃はいと怪しき心地になむ。
 怪しくもぬれまさる哉春日野の三笠の山はさしてゆけども
 往けど往かれず。

〔語釋〕
 (一)君の名宛て來し手紙を我が見るべきに非ず
 (二)御無沙汰して

(三)御手紙を頂きて恐縮也

(四)本人が受付けぬ故はかどらず

(五)あて宮を辨れたとへたり

(六)實忠

(七)島臺

(八)文、踏み

〔考異〕
 (一)いかでか御許にといかで御許に

と書きて奉らせ給へり。中將あて宮に聞え給ふ、祐澄大將殿より、斯くなむ宣はせたる。見給へ」あて宮「いかでか御許にとあんなるをば見給へむ」とて聞きも入れ給はねば、中將、

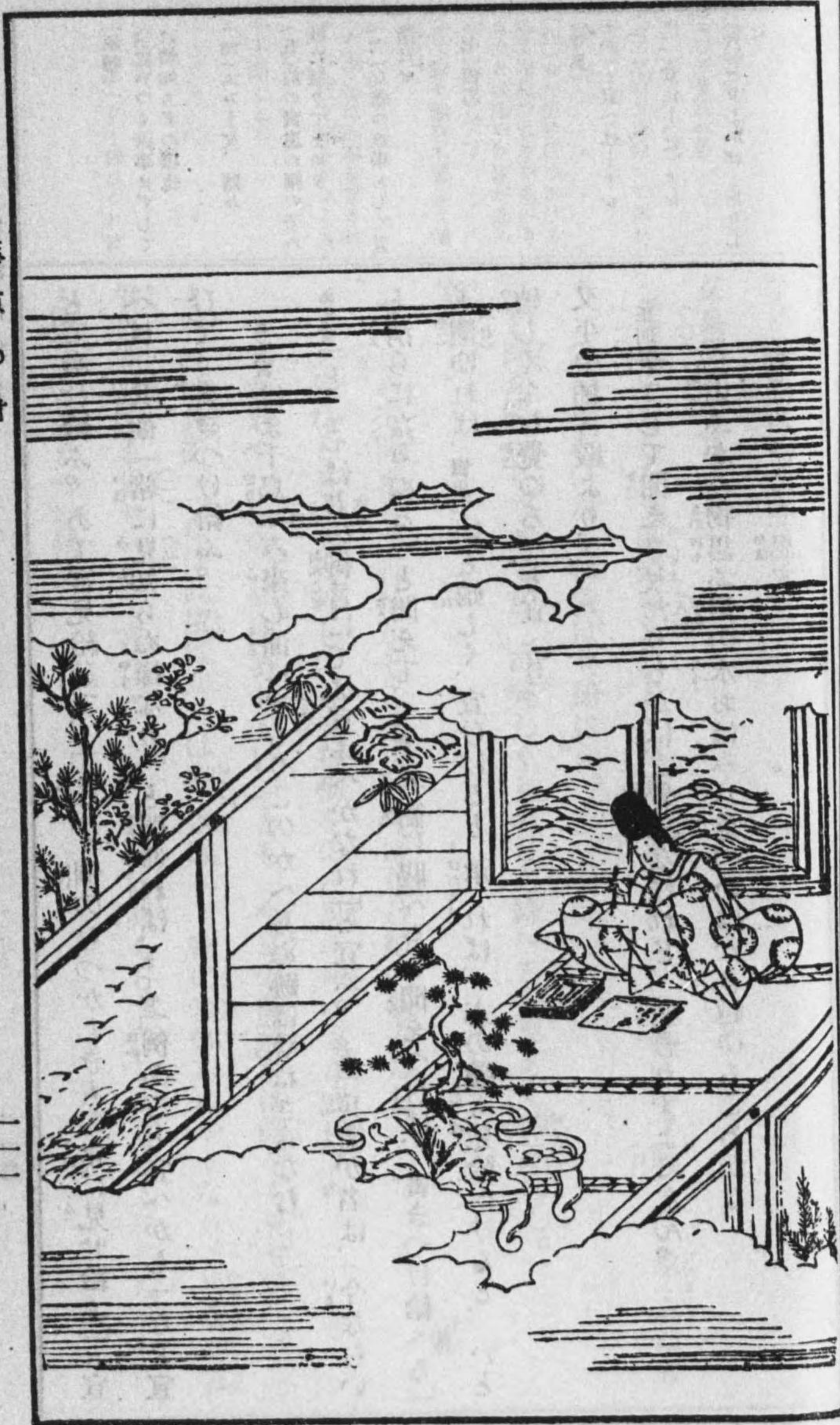
祐澄久しく候はで、畏まり聞ゆるに、賜はせたるをなむ。彼の承りしことは斯くなんともすべき人、見聞かぬ心になん。春日は、

目に近くをりていのれど春日野の森のさか木は色もかはらずかひなき音にこそ。

とて奉り給へり。

かくて例の宰相は、島のいとをかしき洲濱に、千鳥の行き違ひたるなどして、それに斯く書きつく、

實忠 浦せばみ跡かはしまのはま千鳥ふみやかへすとたづねてぞ鳴く
 苦しくもたどらるよかな。



藤原の君

〔語釋〕
(三)いつも返事せずしては情知らずの様也

(四)ふみ一丈、踏み

(五)前の實忠の雁の子の歌に據りてよめり

(六)兵衛の返事として言遣はせ

(七)實忠に

〔考異〕

(一)と宣へば一ナシ

(二)常に「に」ナシ

(八)たりしかば一たりしは

とて奉れ給ふ。あて宮見給ひて、「怪しく例のむづかしきもの常に見せ給ふ」と宣へば、兵衛「常に見知らぬ様なり」と聞ゆれば、あて宮「例のごと宣へかし」など宣ひて、書きつけ給ふ。

あて宮はま千鳥ふみ來し浦にすもりこのかへらぬ跡は尋ねざらなむ

あて宮「そこそは君の御言にては宣ふべかなれ」と宣ふ。兵衛「兵衛が名は、今なむいと清らになりぬる」と聞えて、兵衛「兵衛に賜へりと聞えつれば、書きつけ給へる」と聞ゆれば、實忠「いと嬉しく、宣ひけると承れば、志の驗も見給へけると、いと嬉しくなむ覺ゆる」と宣へり。

又平中納言殿より、

正明辛うじて聞えさせたりしかば、覺束なけれど、猶懲りすまになん。

山ふかみ物思ふ沼の水おほみ八重のいはがき越ゆるころかな

おほろけにや思す。

など聞え給へど御返なし。

又兵部卿の宮より、

兵部思ふもしるき御様なめれど、さても止むまじければなん。斯くは承らぬもの

のを、あいなう物言はせ給はぬ。

など聞え給へり。あて宮、可笑しくもおどし給へるかなとて御返なし。

宰相

實忠せめて聞えさせればかしこさに、今は思ひ給へ歇みなむ。

死ねと言はどためしにもせむ物をのみ思ふ命は君がまにく

あが君や、後の試はありといふとも、今日の御返事は露をも見せ給へ。

と有れば兵衛、「なほ此度ばかりは御返賜へ。物の哀知らぬやうなり。兵衛が言君に聞召すと思せ」あて宮、「さらば、君の言聞くと、怪しからぬ人にやならむ」と宣へど書きつけ給ふ。

〔考異〕

(一)給へど一給ひつれど

(二)給へど一給ひつれど

(三)聞くとて

(四)今後は返事を下されずして我を試み給ふとも

(五)餘り強ひて言ふも無禮故

(六)女が男に言ひかけられて左程つれなかるべきものとは聞いた事がないに

(七)給へど一給ひつれど

〔語釋〕
 (一)君は死ねとならば直に命は岩の如く千歳をも経べしそれは死後人の赴くといふ黄泉がよく承知して居るならん

(二)我をば
 (三)あて宮は兵部御宮の姫なれば也

(四)朱雀

(五)我は外に女も持たぬに何とてあて宮の背かぬならん

(七)實忠自身を駕にたとへたり

考異
 (六)給へれど給ひつれど

あて宮^(一)若おふる岩に千代ふる命をば黄なる泉の水ぞ知るらむとて賜ふ。宰相見給ひて、限なく嬉しと思す。又兵部卿の宮より、

兵部いと心強くも物し給ひけるかな。此のわたりには、斯うしも思し疎まざらなむ。上にもうらみ聞えてしがな。^(三)

我が袖は宿かる蟲もなかりしを怪しく蝶の通はざるらむと聞え給へれど御返もなし。^(四)

月の面白き夜、源宰相、中のおとどに立寄り給ひて、實忠、兵衛の君立出で給へ。月いと面白し」など聞え給ひて、御前の花盛、色々の花の影にたち寄り給ひて、かく宣ふ、

實正花さかりにほひこほると木隠れもなほ鶯はなくくぞ見るなど宣ひて、松の木の下に立寄りて、斯くなむ。^(七)

〔語釋〕

(一)岩はあて宮松は自身、嫌ふ松の上に強ひて生ひ添ひて尚様々のくり言を言ふは誰に聞いて貰ふつもりか我ながら分らぬ

(二)姫君たち

(四)此歌の返事だけは

(五)八の君、あて宮の妹

(七)響き増すと云はるゝ其響は我方には聞えず却りて君が仇し心を持ち居らるゝ事が知らるゝ君をまきて仇し心をわが持たば末の松山波も越えなむ

(八)「すゑより」は「すゑなる歌」

(九)あて宮の兄仲澄
 (一〇)仲澄自らを比して「あり」
 (一一)あて宮に

● 仲澄あて宮に懸想す
 (考異)
 (三)にもーをも
 (六)ちご君ーちご宮

實正岩の上にしひて生ひ添ふ松の根の誰聞けとてか響きますらむ

と宣ふ時に、皆人哀がる。木工の君といふ人、勞あるものにて、木工「これを聞き知らぬ様なるは、いと情なし」とて、君たちにも、木工「猶こればかりをば聞え給へ」と聞ゆれば、ちご君なむ、御前なる箏の琴に弾きならし給ひける。^(二)

ちご君響くとも音には聞えて末の松今宵も越ゆる波ぞ知らるゝ又宰相の君、^(五)

實忠涙川みぎはや水のまさるらむするより瀧の聲もよどまぬ又かくて夕暮に、雨うち降りたる頃、中島に水の溜まれるに、鳩と言ふ鳥の、心すごく鳴きたるを聞き給ひて、侍従、あて宮の御方におはして、かく聞え給ふ。^(八)

仲澄「池水に玉藻しづむは鳩鳥の思ひあまれる涙なりけり」とは御覽するや」と聞え給へば、怪しう思して、いらへ聞え給はず。此の侍従も、怪しき戯人にて、萬の人の、聲になり給へとをさくく聞え給へども、さも物し

給はず、此の同じ腹に物し給ふあて宮に聞えつかむ、と思せど、あるまじき事なれば、唯御琴を習はし奉り給ふ序に、遊などしたまひて、此方にのみなむ、常に物し給ひける。

〔畫詞〕

此處は、大將殿、宮すみ給ふ大殿町。池廣く、前栽植木面白く、おとど、廊ども多かり。曹司町、下屋ども、みな檜皮なり。寢殿には、あて宮、小宮たち、女御の君腹の御子達、合せて七所。年十三歳より下なり。御たち、大人卅人ばかり、童六人、下づかへ六人、乳母どもなんどあり。皆童はあて宮の御人なり。西のおとどに女御すみ給ふ。下づかへ、童、大人、同じ數なり。内裏より御文あり。見給ふ。東の對には、女御の御腹の男御子たちいと數多おはすなり。皆碁打ちなどす。北の大殿は、宮、父おとどすみ給ふ。おとど、内裏へ参り給ふとて急ぐ。

これは御子どもの住み給ふ町。大殿六つ、板屋、廊、曹司、藏ども有り。寢殿

〔語釋〕
(一)言ひよらんと

(三)女御が

(四)あて宮

〔考異〕
(二)もとどに「に」ナシ

〔語釋〕
(一)前に民部卿宮とあり殿は誤なるべし
(二)あて宮の
(三)の太郎君「衍敷」
(四)清正の弟忠俊
(五)藤原實正
(六)藤原實正
(七)藤原實正
(八)藤原實正
(九)藤原實正
(十)藤原實正

〔考異〕
(一)給はむと「と」ナシ
(二)西の「東」右の「西」民部卿の殿の御方同
(三)西の「東」右の「西」民部卿の殿の御方同
(四)西の「東」右の「西」民部卿の殿の御方同
(五)西の「東」右の「西」民部卿の殿の御方同
(六)西の「東」右の「西」民部卿の殿の御方同
(七)西の「東」右の「西」民部卿の殿の御方同
(八)西の「東」右の「西」民部卿の殿の御方同
(九)西の「東」右の「西」民部卿の殿の御方同
(十)西の「東」右の「西」民部卿の殿の御方同

に、民部卿殿の、宮の同じ腹の五の君、年十八、子二人。又生み給はむとする
(一)いと多く勢ひたり。西のおとどに、同じ御腹の六の君、年十六、子生み給はんとす。御夫右の大臣殿の太郎君、東のおとどに同じ腹の七の君、年十五。御夫右衛門、督の殿。北の對徒らなり。今おひ出で給ふが料なり。池廣し。植木あり。反橋、釣殿あり。
これは大い殿の君すみ給ふ大殿町。屋ども同じ數なり。寢殿に北の方すみ給ふ。御たちいと多かり。西の對は、中務の宮の北の方、此方の御腹の中の君なり。年二十三。男君たちは、宮の御腹の四人は廊を御曹司にておはす。東のおとど、頭宰相殿の御方、三の君、年二十二。御夫左大臣殿の太郎君。子一人。南のおとど同じ御腹の四の君。子無し。年二十。源宰相の北の方。
かくて又、上野の宮とて、古御子おはしましけり。その御子は、物ひがみし給へる御子にておはしける程に、たゞ今世にある上達部、御子たち、此の殿の聳にな

(一)正頼
 (二)我正頼の妻となる場合
 (三)巨勢氏曰、左衛門督は藤原忠正の長子忠俊なりこれに次男清正をいふなれば右衛門督なるべし
 (四)正頼
 (五)あて官
 (六)あて官
 (七)あて官
 (八)あて官
 (九)あて官
 (一〇)あて官が返事せず

(一)考異
 (二)左衛門督一右大臣殿
 (三)殿うち一とどうち
 (四)あんなり一あなり
 (五)思はし一おぼし
 (六)かんなぎ一かうなぎ
 (七)宣上様一宣上はに

るを、今然ぞ我をもせむ、とて妻をも追ひはらひて、上野、今左大將の家(一)に往きて我棲(二)めらむに、妻するたらば、おもひ疎(三)みなむ」と宣ひて、待ちおはしますに、生ひ出で給ふまよに、皆他人々に奉りたまひつ。此の御子(四)さりととも、我を掣(五)數に入れ給はざらむやは、と思ほすに、八の君今おひ出で給ふと聞きて、これならむと待ち給へば、左衛門督(六)にたてまつり給ふと聞召し、驚きて宣ふやう、上野あやしく、此の大將の、我が思ふことを未だ成さぬかな」と宣ひて、數多度御消息あれど、殿うち見笑ひ罵りて、御返なし。上野大方は、九に當るあんなり。それを、さしはへて言はむ」とてあて官に御文あり。されど怪しきものに思ほして、聞えたまはず。此の御子、萬に思ほしさわぎて、陰陽師、かんなぎ、博打、京童、嫗翁召し集めて宣ふやう、上野「我この世に生まれて後、妻とすべき人を、六十餘國唐土、新羅、高麗、天竺まで尋ね求むれど、更に無し。此の左大將源正頼の主の女ども十餘人にかよりてあなり。一人に當るをば、帝に奉りつ。その次々、悉く(七)に



- (一) 語釋
- (二) 麻く
- (三) 相手、めざす女
- (三) 觀音

とよのへたなり。残れる九に當るなむ、四方の國に聞きしに、斯くばかりの人きこえず。此の女なむ、耳につき、心につく。然あるに、父大將に請ひ、正身に請ふに、女も大將も、今に承け引かず。如何なる佛神に大願を立て、なでふ事のたばかりをしてか、女のおもむくべき」と宣ふ時に、比叡の山に惣持院の十禪師なる大徳の言ふやう、宗慶かたきを得むる様は、比叡の中堂に、常燈を奉り給ひ、又奈良、泊瀬の大悲者、人の願ひ満て給ふ、龍門、坂本、壺坂、東大寺、斯くのごとく、總べて佛と申すもの、土を圓かしてこれを佛と言はざ、御みあかし奉り、神と言はむには、天竺なりとも、御幣帛奉らせ給へ。百萬の神、七萬三千の佛に、御みあかし幣帛奉り給はざ、佛神各與力し給はむ。天女と申すとも、降りましなむ。いはんや娑婆の人は、國王と聞ゆとも、赴きたまひなむをや。又山寺々に食無く、物無き行ひ人を、供養じ給へ」と聞ゆ。親王の君、上野いと尊きことなり。御みあかしは、いくらばかり奉らむ」大徳、宗慶一寺に一合奉りた

- (一) 語釋
- (二) 奉り給はなんしな
- (三) 非常の字音歟
- (六) 「なし給へらば」は
- (七) 「昔の縁の」なるべし
- (九) 窮迫せる
- (一〇) 夫妻伴はずにて夫婦離散しの意なるべし
- (一一) 未詳
- (一二) 對策し及第しなるべし

ふまとも、比叡の四十九院に一月に一石四斗七升なり。大小も同じごと、各たてまつり給はりなむ。ひざうとこそ思ひ給ふらめど、佛に奉る物は徒らにならず。來世、未來の功德なり」と聞ゆれば、いといたう喜び、立ち居七度拜みたまふ。上野「我が聖の徳になし給へらば」大徳宗慶「何か思す。此のこと御心にしみためり。いと能く叶へ奉りなむ。若しさ有らむ宿世なくば、少し心もとなくなむあらむ。男女の中はむかし縁の儘なり」と聞ゆ。此の君、上野「然有りとも、我が大事の聖の君。此のこと赴けしめ給へ」とて、此の御燈の料、みてぐらの料、皆取らせ給ひつ。又迫り癡れたる大學の衆の言ふ様、「哀れ書に言へる様は、得難き女を得むとせむ様は、世界にふせうとものはず、家竈無くして、便りなからむ人、道のことにかきては、しきしにも入り、たうさくしきふだいし、學問料賜はり、斯く返すく、物は序を越さず出立ちつべきものなり。然あるを、才あるものは沈め、無才の男

- 〔語釋〕
- (六)東西兩京の
- (七)ばくち打等
- (八)君等
- (一)荒々しき軍士なりとも
- (二)法會

は先に立つ。斯くの如くの人の歎を除き給はど、人の歎き願ひ満つべし、となむ文書に言へる。誠に然あるものなり」御子の君、上野、誠に然有るべきものなり。數多の人の喜をなさむに、我が一つの願ひ満たじやは」と宣ひて、道の人の沈める才をば、公にも申し、博士どもにおほせ、居所なく、食物無き人の爲にとて、錢、衣金、車に積みて出し立て給ひ、官得べき人の沈みたるを求めさせ給ひて、我が御莊は皆賜ふ。

- 〔考異〕
- (一)如くの「の」ナシ
- (二)歎を「を」ナシ
- (三)歎き「ナシ
- (四)人の「の」ナシ
- (五)ことは「は」に「ほど
- (九)大殿に「に」ナシ
- (一〇)庭の「の」ナシ

京童の聞ゆることは、「これは、易く爲つべき事なり。己がゆかり、西東の合せて六百ばかり、又此の雙六の主たち、さばかりいますらむ。それ等走り集まりて戦はど、危ふからじ」博打どものいらへ、「有るまじきこと言ふくそたちかな。四面四町の殿に、面ごとに御門を立てて、鱗の如くに造り重ねたる大殿に、庭の木のごと、上達部、御子たち住み給ふ所には、天下のいらなきいくさなりとも、打勝ちなむや。さて、斯くはしてむかし。此の東山なる寺の塔の會し給ふべし

- 〔語釋〕
- (二)事務所を設け
- (三)下轄古
- (四)正頼邸
- (五)京童等の
- (二)太宰權帥遊野直香の長子

といふ聞えをなして、堂毎に政所をしつよ、集まりて、内ならしをしのよしり、又斯くばかりの見物は難かるべしと云ひなさむ。彼の殿は物見好みし給ふ所なり。出給へらむを、集まりて奪ひ取るばかりぞ」御子の君、上野、面白き事宣ふくそたちかな。たど斯うなり、この事は。京くそたちのし給はんことは、此のとうりう寺の塔の會に優るものはなかるべし、と宣ひひろげよ」内ならしの人の料にとて、錢、米、車に積みて出し立つ。

〔畫詞〕 此處は上野の宮。大殿四つ。板屋十。倉あり。池廣く、山高し。これは、寢殿、宮おはします。男ども十人ばかり。松原、植木、前栽あり。こよは京童、博打集まり居りて物食ふ。御倉あけて、家司ども、有る限の物どもをばこび出して、此の人どもにくる。

斯かる事を、大將のおとど聞きて、笑ひ給ふこと限なし。正頼「我をはかなしと思して、はかり給はんと思すななり、何かははかられ奉らん」とて和政の少將に、

- 〔考異〕
- (一)堂一條
- (六)とうりう寺「たうりう寺
- (七)ものは「は」ナシ
- (八)宣ひひろげよ「宣ひしらせよ
- (九)廣く「廣し
- (一〇)寢殿「寢殿に
- (一一)物食よ「物食へば

(語釋)
 (一)見物の爲の車を置くべき場所
 (二)上野宮方の
 (三)あて宮
 (四)あて宮
 (五)論語に「報怨以德」
 (六)正頼
 (七)下藤の女があて宮の身代りになりて奪はれ行きて上野宮の北方になるは幸ならんと也
 (八)やせても枯れても相手は宮様なれば
 (九)かへ玉なる事を氣付かるゝな
 (十)打ち一ナシ
 (十一)一人は「は」ナシ
 (十二)なりけり「けり」ナシ

正頼「とうりう寺に、上野の御子の、大いなるわざし給ふなるを、政所の男ども遣りて、所取らせよ。若き子ども遣りて物見せむ」と宣ふ。少將御寺にいき、大幕打ち、所取らす。宮の男ども、「我が宮の御爲に、疎かにいますがる殿には、なでふ所が取らすべき」といへば、少將、和政「唯御車一つばかりなり。中のおとどの姫君の、面白かるべき事なり。見給はむ」と聞え給へば」と言へば、男等「よし。仇は徳を以てとぞ言ふなる」とて取らせつ。
 其の日にありて、おとど、下藤仕うまつる人の女、年若く容貌好けなるを召して、装束いと能くせさせ給ひて、舍人の女、大人二人、わらは一人は、樵夫の女なりけり。黄金造りの車一つ、檳榔毛の車二つ、黄金造りには、下藤の女、大人わらはを乗せ、檳榔毛には、殿の御たち乗せて出立つ。正頼「あてこそその御徳に、此の人の、彼の君の御妻にてあらん事よ。凡人の良きには優りなむかし、ゆめ氣色見すな。あてこそその御正身と思ひなしてあれ」と宣ふ。

(語釋)
 (一)晴れ業
 (二)音楽師
 (三)あて宮の一行ぞと思ひて
 (四)未詳「つし」を「つ」とかける本もあり
 (五)博打
 (六)第一の車
 (七)無禮なる所業ぞと題と京童等を叱る也
 (八)蓋などの字を充つべきか
 (九)「ちうそく」を「そく」と書きたる本もあれども、上にも諸本「なぐるく」を「ちうそく」と書誤りたる處多ければ「ちうそく」なるべし
 (十)容貌いと「容貌はい」と
 (十一)「なんど」なれど
 (十二)眞實に思はして「しそつ」と思ふやう
 (十三)手鼓「手鼓ども」
 (十四)此處はだうりう寺「こゝは寺」

畫詞 此處は大將殿。物見に入出し立て給ふ。下藤の女は年十四、容貌いと清けなり。大人、童、下衆など容貌良し。
 斯くて此の寺には、今日のいろふしにて、怪しからぬこといと多かり。遊の師には、嵯峨の院の牛飼、講説の所には、講説の長。樂としては、鼓打ちて遊ぶ。講説としては、食する眞似をする。斯かる程に、大將殿の御車、御前三十人ばかりして立ちぬ。御子の君、眞實に思ほして、上野「御講始めよ」と宣へば、牛飼「つし遊びす。雙六ども集まりて、聲を合せてのよしければ、物見に来たる人々、いとほしくも有り、可笑しくもあり。博打、京童、數知らず集まりて、一の車を奪ひ取る。殿の人々そら騒ぎすれば、車の簾を掲げて宣ふ、上野「奪ひ得つ。これや此のをしみ給ふ御女。なめき罪ぞはからるよ。疎かなる罪ぞれうせらるよ。雙六の主たち」と言ひて、牛飼ども手鼓打ちて、草刈笛吹く。
畫詞 此處はだうりう寺。ちうそく牛飼集まりて居り。博打、京童、車奪

〔語釋〕
(一) 片々の尻切をばきて、尻切は草履の一種

(二) 宴會

(三) 報賽

(四) 賀茂川原

(六) 此處誤脱あるべし、諸共には北方と諸共に也

(八) 御物らしき様子もな

〔考異〕

(五) 出て給ふとて―出て給ひて

(七) 奉ること―奉ることかな

ひたり。親王の君片尻切して車に走り乗り給へり。

斯くて、宮におはしまし著きて、年頃思し設けたりし所にすゑて、七日七夜、と

よのあかりして、打ちあけ遊ぶ。博打、又祈りせし大徳宗慶召して、上野あが佛

たちの御徳に、年頃なめき目見侍りつる心地しづめて、喜び申し侍り。今は彼の佛

の御徳現はし奉り、萬の神達にかへり申しの幣帛奉らむ」とて河原に出で給

ふとて、祈の事ども、諸共に、此のかへり申しはたすこと、神佛世も中に在すか

らぬものにはやは有りける、とて北の方に、上野あが君の御爲に、斯く萬の神佛に

なむ祈り申しと思しるく、諸共に果し奉ること」とて、

上野千早振る神も祈はきくものをつらくも見えし君が心か

北の方、

すみなれぬ宿をば見じと祈りしを我れには神も効なかりけり

など氣色も無く云ふ。

〔語釋〕

(一) 帳臺

(二) 「すぐるく」の誤なるべし

(三) 例の誤なるべし

(四) 先駈

(六) 名は高基と下に見えたり

● 致任の大臣、三春高基の素性、其の吝嗇、あて宮に懸想して宮内の君を誣らふ。

(七) 未詳、ナリ碎きて粉にする事歟

(八) 租税などの未納なくして

〔考異〕
(五) 此處は祓のところ―一をきてのと申

〔畫詞〕 此處は上野の宮、女率て歸り給へり。御濱床立てて、北の方する奉

り、又供の大人二人。朱の臺立てて、かねの坏して物まるれり。御たち仕うまつ

りまかなひし給ふ。博打、童、らうそく、集りて、机立てて物食ふ。京童に

物かづけたり。らうそくに物かづけたり。此處は佛造る。此處は河原。宮、一

つ車にて出で給へり。空車に齋串を積みて陰陽師、先き馬にて出でたり。此處

は祓のところ。

斯くて、賤しき人の腹に生れ給へる帝の御子、三春と云ふ姓を賜はりて、若き時

より國を治め、位まさり、年の高くなるまで、妻もまうけず、使ひ人も使はぬ人

あり。他の國にありし時は、物も食はせず、衣も著ぬ人を使ひて、自らの料には、

三合の米おろして食ひつよ、一國を治むるに、公事またくなして、私の財、數多

く貯へ、大なる倉一つに納むるほどに、財を積みて、六國治むるに、多くの倉ど

もを建てて納めつれば、宰相にて左大辨兼けつ。暫しあれば、衛府兼けたる中納

- (一) 語釋
- (二) 乗人の居る處の屋根を板にて葺きたる車
- (三) 老いたる
- (四) 蘆の葉をさしたるは矢の代にしたる也
- (六) 上手にして
- (八) 衣倉敷
- (九) 名簿は今の履歴書の如きもの、其をかへさずにもくは周旋して仕官させんの意味也
- (一一) 衣食
- (一) 考異
- (二) 物食はず衣著て一物くはせ衣きて
- (五) 着けて一ナゲ
- (七) をさしくよくして
- (一〇) 給へば一給て、按に「給はせ」なるべし

言になりぬ。斯くて京に住むにも、物食はず衣著で使はるゝ人なし。内裏に参らむとは、板屋形の車の、輪缺けたるに、せまりたる牝牛をかけて、ちひさき女の童をつけて、繩しりがい、はつれたる伊豫簾を懸けて、布の太きを上御衣に染めて、太き調布を下襲、上の袴にはきて、衛府兼けたれば、隨身舎人には小さき童に、木太刀を佩かせて、古藁鞆に、蘆の葉挿し集めて、木の枝に細繩を著けて、弓としては持たせて、参り罷出すれば、京の内に誹り笑ふこと限なし。それを知らず顔にて交らひ給ふ。御心の賢く、政をさしく、暴るゝ軍士獸も此の主には鎮まりぬ。然るによりなん、公も棄て給はざりける。斯かる程に、大臣までになりぬ。裸夫にて得あるまじ、我物食はざらん女得ん、と思して、きぬくらにある徳町と云ふ市女の富めるあなり、それを召し取りて、北の方にし給ふ。徳町なほ斯かる車、装束にてありき給ふ事、人誹り聞ゆなり。人のそこら奉る名簿を留めさせ給へば、そじき賜はずとも仕うまつりなん。斯く小き女の童をのみ遣は

- (一) 語釋
- (二) 侍所、出動者の詰所
- (三) 巨勢氏曰、ひるまし侍るに歟、晝食する事なるべし
- (四) 高基
- (五) 惜しくとも
- (六) 時きて質をならしじ
- (一) 考異
- (二) 然るべき一然るべき者を
- (七) ちち一ナゲ
- (八) かけて一かけて

せ給ふ事、見苦しきことなり」と聞ゆれば、高基「さも言はれたる事なり」とて、人の然るべき遣はせ給ふ。斯くて人参りなどするを、徳町市へ出でたる間に、侍(一)に人参りて、ひるまし侍るに肴無しとて、上に申しければ、大殿心惑ひて、我(二)か人かにもあらで宣ふ、高基「斯かればこそは、人無くて年頃経つれ。如何なる費ある事を知りてあたらしくとも、人は十五人、漬豆を一莢宛に出だすとも、十まり五つなり。種(三)ならして幾許なり。零餘子を一つあてに出だすとも、十まり五つなり。ならして取らば、多くの零餘子も出で来ぬべし。雲雀の乾鳥、これ等を生けて、媒鳥にて捕らば、多くの鳥出で来ぬべし」と思ひはれて居給へり。徳町歸り来て、徳町など物思したる様なる「いらへ、高基「口惜し、物の費ある事を數ふれば、多くの損なり。悔しく、人の言を聴きて、我が世に知らぬ事を聞く事」と宣ふ。徳町いとほしきこと限なし。おとど、高基「男ども酒買ひて肴を食ふぞや。かけて聞けば、心地こそ惑へ」市女打笑ひて、爪弾をして聞ゆ、徳町「斯くばかりの事をやは、

〔語釋〕
(一) 小板などを編みて託の代りにしたるなるべし

(二) 財寶の威光には主人たるものも畏れ避くと云ふ意歟、當時の盛なるべし

(三) 正類

〔考異〕
(一) 思ひ一思う

心地惑はしては思しつる。賤しき身にだに、然ばかりの事は思ひ給へぬものを」として納殿あけて、良き果物、干物出だす。おとど物も覺え給はず。
住み給ふ所は、七條の大路のほどに、二町の所、四面に倉立てならべたり。住み給ふ屋は、三間の萱館、柴土、編み垂れ葺、めぐりは檜垣、長屋一つ、さぶらひ、舎人所、帳垂れ、酒殿の方は、葺のもとまで畑作れり。殿の人、上下勤取をとり畑を作る。おとど自ら作らぬばかりをり。斯かるを或る人、「御葺のもとまで畑作られ、御前近き對にて斯くせしめられたること、有るまじき事なり。此の御倉一つ開きて、清らなる殿かい造らせ給へ。財には主避ぐとなむ申すなる。天の下誇り申すこと侍るなり」と申す。高基あぢきなき事は、此の大將主の、大なる所によき屋を造り建てて、天の下の好色者どもを集めて、物をのみ盡すは、何の清らなることか見ゆる。其の物を貯へて、市し商はどこそかしこからめ。われ斯かる住居すれども、民の爲に苦しみあらじ。清らする人こそ、公の御爲に妨を致し、

〔語釋〕

(一) 高基が幼少の時、これより高基の病の源因をいふ也

(二) 高基の母親

(三) 母が

(四) 願を果す様に高基に遣言しおきたれど高基巨富を擁しながら果さず

(五) 高基が

(六) 修法に護摩をたくに棟の木を用ふる也

(七) これも修法用

(八) 味噌の代りにの煮歟

(九) 高基の食する物

(一〇) 我邸内に出来たるのはなく

〔考異〕

(一〇) なり一ナレ

(一一) 宣ひて一宣ふ

(一二) 聊か一聊かなる

(一三) 頃なれば一頃橋これ

人の爲に苦しみを致せ」など宣ふほどに、小くて病して、ほとくしかりけるに、親大なる願どもを立てたりける。亡くなりけるときに言ひ置きけれど、斯かる寶の王にて果たさず、其の罪に、恐ろしき病付きて、ほとくしくいますかり。市女、祭祓、せさせむとする時に宣ふ。高基あたら物を、我が爲に塵ばかりの業すな。祓すとも、打撒に米いるべし。粗にて種なさは、多くなるべし。修法せん、五石入るべし。壇ぬるに土入るべし。土三寸の所より、多くの物出で來。棟の枝一つに、實のなる數あり。菓物に食ふに良き物なり。胡麻は、油に絞りて賣るに多くの錢出で來。其の精味噌代へつかふに良し。粟、麥、豆、大角豆、斯くの如く雜役の物あり」としてせさせ給はず。斯くて臥し給へる程に、まうほる物、日に橘一つ、湯水まうほらす。高基徒に多くの橘食ひつ。核一つに木一木なり。生ひ出でて多くの實生るべし。今は食はじ」と宣ひて、聊か物まうほらで、日頃經ぬ。高基「此處にはあらで、橘一つ食はじ」と宣ふ。五月中の十日頃なれば、なべて無

- (語釋)
- (一) 徳町自ら食ひたる也
- (二) 母
- (三) 斯くと父に告げんと
- (四) 此兒を吾が叱る故兒が腹立ちて我が父の禁ずる事をしたりと告口したる也
- (五) 諸本「やう」を「程」にと誤れる處多しこゝも「やう」なるべし
- (六) 嫉したれど
- (七) 身分相當の
- (八) 色々請求せしかば
- (考異)
- (八) 當らん一ならん
- (二〇) 返し奉り給ふ拙き一返し奉り給ふ例なきこと申し給ふ拙き

し。此の殿の御園にあり。密に市女取りてまるる。大殿の子、市女の腹に五つばかりにてある、母を怨じておとどに申す、^(二)「まよ、ことの桶を取りてなむ参りつる、と申さむといひつれば、粟、米を包みてなむくれたる」といふ。弱き御心地に、^(三)胸潰らはしき事を聞き給ひて、物も覺え給はず。市女、徳町いと人聞き悲し。此の吾兒をのれば、腹立ちて、制し給ふこととて申し給ふになむ」と云ふ。業にやあらざりけむ、御病おこたりぬ。斯くて市女の思ふ程に、^(四)高き人につきたれど、我が賣り商ふ物をこそ、我が身より始めては著れ。我がほどに當らむ夫をこそせめと思ひて逃げ隠れぬ。市女のありて、知らせてとかくせしにならひて、侍の人々、^(五)時々物申しければ、おとど、高基公に仕うまつればこそ人の無きも苦しけれ。畑を^(六)作りて、一人二人下衆を使ひてあらむ」とて位を返し奉り給ふ。高基拙き身にて高き位を持ち居るべからず。山がつらをしたがへて田畑を作らむ。此の位を返し奉りて、^(七)國一つを賜はらむ」と申す。さも言はれたりとて、大臣の位を止められて、

此の殿の御園にあり。密に市女取りてまるる。大殿の子、市女の腹に五つばかりにてある、母を怨じておとどに申す、まよ、ことの桶を取りてなむ参りつる、と申さむといひつれば、粟、米を包みてなむくれたる」といふ。弱き御心地に、胸潰らはしき事を聞き給ひて、物も覺え給はず。市女、徳町いと人聞き悲し。此の吾兒をのれば、腹立ちて、制し給ふこととて申し給ふになむ」と云ふ。業にやあらざりけむ、御病おこたりぬ。斯くて市女の思ふ程に、高き人につきたれど、我が賣り商ふ物をこそ、我が身より始めては著れ。我がほどに當らむ夫をこそせめと思ひて逃げ隠れぬ。市女のありて、知らせてとかくせしにならひて、侍の人々、時々物申しければ、おとど、高基公に仕うまつればこそ人の無きも苦しけれ。畑を作りて、一人二人下衆を使ひてあらむ」とて位を返し奉り給ふ。高基拙き身にて高き位を持ち居るべからず。山がつらをしたがへて田畑を作らむ。此の位を返し奉りて、國一つを賜はらむ」と申す。さも言はれたりとて、大臣の位を止められて、



美濃の國を賜ひつ。

- (一)九ふなるべし狭き席
- (二)木のきれはし
- (三)精米
- (四)葉
- (五)袴のナキを
- (六)草を穿る器
- (七)敷へ取りて
- (八)「思はしけるやう」などありしが調れるか
- (九)「考異」
- (一〇)めぐりのものなし此處は「みちものなきはし」
- (一一)これは店に「これはてうたなに」
- (一二)女一姫
- (一三)なしなく

〔畫詞〕此處は七條殿。四面に倉建てたり。寢殿は、端はつれたる小き萱屋。編垂れ郡一間あけて、葦簾かけたり。御座所九のなる幣敷きたり。衝立、障子立て、太き繩引きて、布の御衣かけたり。御枕、樽の頭。おとど、物まうほれり。三脚の臺、裏黒の坏、しらけに麥のおもの混ぜたり。めぐりの物なし。此處はみづし所。寢殿の北の方。かしら白き女一人水汲む。女童一人、おもの盛り仕うまつる。これは店に女居りて物賣る。此處は出居。女ども布おる。これは、侍所。人ども畑作る。おとど、括り揚げて、樽の足駄を穿きてさび杖つきて、布の直垂著て、立ち給へり。馬車に魚鱗積みて持て來たり。預どもよみ取りて、柵にすゑて賣る。

かくて有り經給ふに、このあて宮の御容貌、萬の人聞き過ぐし給はぬを、此のおとど、かゝる御心に、いかでと思しけれども、聞え給ふ便もなし。思はしける

- (一)「語釋」
- (二)「あて宮が縁に來てくれぬか」
- (三)「羽振よき空欄」
- (四)「高基の獨身なるをいふ」
- (五)「正頼の娘たち」
- (六)「娶りなされたらば」
- (七)「禮も祝儀も」
- (八)「考異」
- (九)「朱の―サトの」
- (一〇)「斯く―かう」
- (一一)「御返りは聞えむ―御返事は聞えませむ―御返事」といふ

折、彼の殿の聞き給ふに、かゝる住ひせじと思して、四條わたりに大きな殿買はれて、寶を盡してつくる。家のうちの調度、有るべき限調じ、よき人の娘、しなじな數多使ひ、綾かさね著せて、自らも綾手織ならぬ物著、朱の臺、かねの坏ならぬ物食はず。かくいかでと思ほすに、あて宮の御方の宮内の君といふを、殿に召して宣ふ、高基、畏きことなれど、中のおとどの姫君に、年月聞えさせむと思ふを、畏まりてなむ、え斯くとも聞えぬ。かく一人すみし侍るを、忝けなくとも渡りおはしましたなむや。御身一つさふらひ給はど、上下の人は、心もとなき事あらせじ。官返し奉りて籠り侍れども、家の内になき物はなし。時の上達部も貧しきものなり。宮内の君、「けに一所物し給ふを、殿の公達の數多おはしますを、さてものし給はど良からめど、さやうに大人しき住居し給ふべきなむおはしますさぬ。儿所に當り給ふは、誰もく聞え給へど、思召し定めずなむ。さは有りとも、斯くなむと聞えて、御返りは聞えむ」おとど、高基、畏まりも喜びも一度に聞えむ」とて大

〔語釋〕
(一)「たてたり」は「たれたり」の誤なるべし

(二)巨勢河和曰、此一項「あて宮聞かぬ様にて物も宣はず」まではこれより四頁先の「又死にける良岑の…見よとすめりかしと宣ふ」の次に入るべし

(三)仲澄
(四)あて宮を思ふ心
(五)「二所」は「一所」の誤に「あて宮をいふ」なるべし

仲澄、實忠、兵部卿の宮、正明、彌正の宮各あて宮を眺む

(七)折く口には出さんや
(八)仲澄があて宮方の實子に

〔考異〕
(一)「あて宮」をいふ

なる衣箱二つに、麗しききぬ、たよみ綿など入れて、高蓋、これは賜はれる國の物なり。前々の國の物も、いと多くさふらふ」と言ひてかへしつ。

〔畫詞〕此處は致仕の大臣殿。四條の寢殿。對四つ、渡殿有り。寢殿に帳たてたり。蒔繪の厨子、被して立てたり。綾の屏風、褥、上席敷きたり。新らしく、大人、童さうぞくしたり。物參る。臺四つして、裳唐衣著たる人、賄す。上の袴、あこめ著たる童參れり。宮内の君に、折敷して物參れり。箱に物入れてするたりの。

かくて四月ばかりになりぬ。侍従の君猶此の御心有りて、いかでと思せど、此の二所をば、有るが中に畏まり聞え給へど、え思し忘れず、かく聞え給ふ。
仲澄「汐の海も身に包まるゝ物ならばかひなきまでも知らせざらまし
思ひ止むべかりせば、まさに斯くも」と聞え給ふ。いらへも聞え給はず。其の夜、篋子に御殿籠りて、御たちに物宣ひなどしつと、仲澄「怪しく明け難き夜かな」なり

〔語釋〕
(一)あて宮の侍女

(二)古今集「夏の夜のよすかとすれば郭公なく一壁にあくるしのくめ」

(三)いかでのいに蜘蛛の(巣)、根に寝をかけた

〔考異〕
(一)宣ふ―聞え給ふ

(四)なく音にくらき―なげどもあけぬ―旅寢のをしき

(六)實忠

ど宣ふに、郭公あまた度鳴く。少納言の君、「鳴く一聲」とこそ云ふなれ。怪しうも宣ふかな」侍従の君、

仲澄 一聲にあくなるものを時鳥「こよらなく音にくらきしのよめ少納言の君、「みな人今宵は」など言ひて、

少納言郭公 旅寢する夜のしのよめはあけまく惜きものにぞありける又つとめて、蜘蛛の巢かきたる松の露に濡れたるを取りて、あて宮の御殿籠りたるを見て、聞え給ふ、

仲澄「さよがにのいで根松に白露のおき居ながらも明かしつる哉、羨ましくも御殿籠りたるかな」と聞ゆ。聞かぬ様にて物も宣はず。例の宰相、志賀に詣で給ひて、それより斯くなん、

實忠日頃は山籠してなむ。
憂き事を思ひ入るとはなけれども深き山邊をいくら見つらむ

(一) 山は原の積りてなる物と聞く君が山べを幾返りし給ふ其の塵の時の間に山と積りたらば其時こそ君の御心に従ふべし
 (二) 源朝「思へども心にこめて忍ぶれば袖だに知らぬ涙なりけり」これ歎
 (三) 斯迄に君がつれなき譯を知りたさに又々文を奉る
 (四) 離つ瀬程の我が思も水の泡ときえたるは畢竟現に君に契を結べる人のあればならん
 (五) 我は人に契を結ぶといふ事を知らねばたとへ君が思ひは泡に非ずとも甲斐はあるまじ
 (六) 實忠
 (七) 實忠
 (八) いひて一言ひ横、横は水を通ずるとひ
 (九) 實忠
 (一〇) 實忠

と聞え給へり。あて宮、
 (一) いくかへり數置く塵の時の間につもれる山と見えばたのまむ
 (二) 又兵部卿宮より斯く聞え給へり、
 (三) 兵部度々覺束ながら、心に籠めてとかいふなる。さても斯うおはしますをば、
 (四) 承る様もや有るとて、
 (五) 瀧つ瀬もあわになりぬるとひがはむすべる人のあればなりけり
 (六) いとひがは結びも知らぬ心にはあわならずともあらじとぞ思ふ
 (七) かくて聞ゆるをも見給へかし。
 (八) と聞え給ふ。宰相殿より、
 (九) 實忠 水籠りて思ひしよりも池水のいひての後ぞ苦しかりける
 (一〇) 思ふ事聞えし人は聞えけるものを。

(一) 正明
 (二) 仁賢、頼長
 (三) 朱雀第三子強正、忠康
 (四) 我は却つて遠慮がち也
 (五) 他人の文にさへ返事するあて宮の近衛にぞ我は今迄傍觀して居たるならん
 (六) 行政
 (七) 給へど給へり
 (八) 良孝行政の素性、あて宮に懸想して宮あて君を語らふ

とあり。御返しなし。
 (一) 平中納言殿より、
 (二) 正明 夏衣うすくはいつも見ゆれども涙もり添ふ頃にもあるかな
 (三) 珍らしけなき御心を、怪しく。
 (四) など聞え給へり。御返しなし。
 (五) 女御の君の御腹の御子も、未だ御妻もなく、あて宮をと思せど、序なくて、
 (六) 聞え給はぬを、外より聞え給ひ、御返りなど聞え給ふもあるを見給ひて、
 (七) 忠康かく餘所なる人だに聞え給ふ物を、此處にこそ怪しうつよましけれ。
 (八) 音にのみ聞ゆる風も吹き立つる雲のあたりに何かすみけむ
 (九) ねたくも。
 (一〇) など聞え給へど 御いらへなし。
 (一一) 又死にける良岑の四位の一人子に、花園と云ふ殿上童に使ひ給ひける、年十歳

藤原の君

- (一) 將來有望の者と
- (二) 貿易の唐船の検査
- (三) 花園を
- (四) 習ひものの第一とし
- (五) 朱雀
- (六) 今上
- (七) 若宮一后宮
- (八) 妻も一女

ばかりなる。容貌清らに、心かしく、帝生ひ出でぬべき者と御覽するに、父が供に、筑紫に下りて、唐土船のかへりみに出で立つ。唐土人、「我が國におひ出る者にも劣らぬものかな」とて奪ひ取りて率ていぬ。父母戀ひ悲しびて死ぬるも知らで、唐土に渡りて、文を一にて讀む。それならぬ物も、かしこき人のする業せぬなし。琴よりはじめて、萬の物の音知らぬなく、上手なり。十にて渡りて八年と云ふに、交易の船につきて、此の國に歸りぬ。帝聞召して、(六) 隠れにし童、まうで来たなり」と宣ひて、召して御覽するに、童にていにし時よりも、容貌も清らに見給ふ。更にかしこくせぬ業なし。帝、(七) 上にさぶらひし者なり。物の師仕うまつらせて聞かむ」と宣ひて、式部丞かけたる藏人になされぬ。暫し有りてかうぶりえて、兵衛佐になりぬ。(八) 東宮にも、上許されて、琵琶仕うまつる。若宮にも箏の御琴仕うまつる。斯くていとかしこき時の人にて、夜晝内裏東宮にさぶらひて、定めたる妻もなし。思ひかくまじき人に物聞えなどして、

- (一) 正頼の五男顯澄
- (二) 正頼の末子、女一宮
- (三) 音楽に通じたる
- (四) 巨勢氏曰、行政は渡海せし故斯くいふなるべし。今按に荒れたる波の中をわくるとは繁き人目を忍びて消息を通はずをいふか
- (五) 年かはりて一ナシ
- (六) 言ふ様一言ふはに
- (七) 人によさば一行政を思はさば人に宣ふな
- (八) 四方の海に一よその海に

此のあて宮の名高くて聞え給ふを、いかでと思ひて、言ひ戯ぶるよ人に物も言はず、良き人の女賜へど得で、大將殿の兵衛佐の君、同じ官に物し給ふを、うるはしく語り聞えて有るを、おとど見給ひて、正頼「此處にかく若き男子ども許多侍る所なり。定めたる里なんども設け給はざるを、顯澄が侍る所を、里と思ほせかし。宮あこまろを弟子にし給へ。いかでこれをだに、物聞き知りたる者に思ひ立てむ」と宣ひければ、行政喜びて、兵衛佐の君の御方に曹司つくりて、たど其處にのみなむありける。
 年かはりて、三月ばかり、御前の花の盛に、花の宴し給ひけるに、行政歌作り遊びもしければ、君たちの御衣一襲賜ひけるにも、思ふ心ありけれども、其の日にあらず、宮あこ君に言ふ様、行政君に聊かなる事聞えむ。人に宣ふな、行政を思ほさば「宮あこ君、一なほ宣へ。人にも言はじ」と宣ふ。
 行政四方の海に玉藻かづきし蚤しもぞ荒れたる波の中も分けける

おふけなき心つきぬるものになむ。

と書きて、宮あこ君に、行政「これ中のおとどの姫君に奉り給ひて、御返事取りて持ておはしませ。さらすば御文も習はし奉らじ」宮あこ君、あて宮に奉らせ給ふ。あて宮「誰がぞ」と宣ふ。宮あこ「まろに文習はし給ふ人のなり」と言ふ。あて宮「めざましの事や」とて見給はず。宮あこ「なほ見給ひて、御返り賜へ」と宣ひて、宮あこ「今言はむ物ぞ」とて、泣きのよしり給ふ。あて宮、「かよる人の返事はせぬ物ぞ。唯「見せつれば目ざましとなむ言ふ」とを宣へ」あこ君、「さらば、まろに文習はさじをや」など泣き給ふ。いま宮、「幼なき子に文を取らせて、淵瀬も知らせず責めさするは、かしこき業かな。聞き憎しとて見よとすめりかし」と宣ふ。

畫詞 此處は大將殿。あて宮、いま宮物まるる。簀子に、侍従の君御殿籠れり。御たち簾のうちに居て物言ふ。侍従、松の枝折りて持ち給へり。宮あこ君あて宮に文奉りて、足摩をして泣く。君たち二所、兵衛の君など居て、人の御返

〔語釋〕
(一)今直に御返事をして下され

(二)返事を下さらねば行政が本を教へてくれぬ

(三)十の君、あて宮の妹

〔語釋〕
(一)彈正宮忠康
(二)孫宮坊付の武官
(三)あて宮
(四)眞菅の長子左近衛少將和政
(五)巨勢氏曰、野へはあちぬ主と云ふ意なるべしれど聞え難し
(六)同人曰、人々言ひよるに物を贈らぬ様に正絹のうけひかぬなり
(七)腰插は綱を筒形に巻きたる物給物用とす
(八)腰插は綱を筒形に巻きたる物給物用とす
(九)考異

(一)彈正宮忠康
(二)孫宮坊付の武官
(三)あて宮
(四)眞菅の長子左近衛少將和政
(五)巨勢氏曰、野へはあちぬ主と云ふ意なるべしれど聞え難し
(六)同人曰、人々言ひよるに物を贈らぬ様に正絹のうけひかぬなり
(七)腰插は綱を筒形に巻きたる物給物用とす
(八)腰插は綱を筒形に巻きたる物給物用とす
(九)考異
(一〇)女
(一一)はほどに
(一二)給へれど給ひつれど
(一三)ものはさふらふものはらひさふらふ
(一四)せしめぬしをしめぬ
(一五)然なりしかや
(一六)姫女、以下同じ

聞えたり。三のみこ、琵琶弾き給うて居給ひて、あて宮に物聞え給へり。

又太宰の帥滋野眞菅といふ宰相、年六十ばかりにて、子どもある妻、道にて失ひて、登り來たり。あて宮を聞き付けて、いかでと思ふ。序なくて得聞えぬを、其のわたりに住む姫、かよる事を聞きて言ふ様は、「大將殿にこそ、君たち許多おはすれ。皆御方に掣取りし給へれど、今一柱はまします」帥、眞菅「宜しき事なり。父主に乞ひ奉らむと思ふ」坊の帶刀なる御息子のいらへ、「彼の君は、東宮のりもいと切に召す。上達部、御子たちも許多聞え給へど、只今は思ほしも定めざめり。自ら少將委しき事は聞え給ひてむ」父主のいらへ、眞菅「彼の父主は物はさふらふべきとせざりし主ぞ。さればせしめぬなり。眞菅らが庄物贈らしめて、中媒にわきざしらうちして乞はしめむ。多くの財は盡すとも、得かねてむやは」姫のいらへ、「然なり。何かは聞召さどらむ。世界は一に、とぞ。事は猶姫たばかり聞えむ。父大殿にもな聞え給ひそ」主のいらへ、眞菅「然もせしめむかし」姫「彼の殿の御

〔語釋〕
 (三)何をして暮し居るぞの義なるべし
 (四)誤あらんか
 (五)みさいは御前にて御案内仕らんの意なるべし
 (六)在來の畑の作物を取
 かつけて夢をつくる様
 に昨日手傳の人を頼み集
 めたりといふ事歟
 (七)「聞えむかし」な
 るべし
 (八)「應答の義なりとい
 ふ」
 (九)「何れも若き乳母の
 み也」
 (一〇)「正頼の長子忠澄
 也」
 (一一)「正頼の若き娘たち
 也」
 (一二)「誤脱あるべし」
 (一三)「正頼の若き娘たち
 也」
 (一四)「考異」
 (一五)「考異」

乳母、長門のお許といふ、知り給へり。それに此の案内を語らひたいまつらむ」と
 て大將殿に廻往きていふ様、無此の頃まうでむとしつれど、雨のかく降れば、頭
 もさし出ででなむ侍りつる」長門のいらへ、「長雨の降れば、ことたばかりも得せ
 で、童べをぞもて煩らふ。女ども御世の中は如何にぞ」姫のいらへ、「怪しき様に
 てぞ侍る」長門がいらへ、「我も此の頃は騒がれて、ひとよろこびもせでぞ籠り居
 る」姫「暇にましますなるを、姫の宿にみさい賜はらむ。此の今日ばかり、あり
 し畑うちはきて、麥さすばかり、昨日なん契りあつめて侍る。なにのこもつほし
 りにいられてまうで來ぬ。甘からずとも一口參らむ。さて物語らひも打聞えむか。
 知れるどちこそ、あとがたりもすなれ」長門「然や。よく宣へり。此の頃は、願は
 しきものなり。殿には人いと多かれども、我等が友達にすべき人もなし。乳母た
 ちも若くとて、ある限ぞある。我のみ貧しく老い痴れにたるや」といふ。姫「何れ
 の君にか仕うまつり給ひし」長門「太郎左大辨の君になむ仕うまつりし」姫「兄にお
 はします君に仕うまつり給ひければこそ老い給ひにけれ」として諸共にいでて往く。

〔語釋〕
 (一)「青磁色」
 (二)「すかしのある箱、織
 物類などを入るゝに用よ
 也」
 (三)「正頼に廻らんとする
 也」
 (四)「誤脱あるべし」
 (五)「正頼の若き娘たち
 也」
 (六)「考異」
 (七)「考異」
 (八)「考異」
 (九)「考異」
 (一〇)「考異」
 (一一)「考異」
 (一二)「考異」
 (一三)「考異」
 (一四)「考異」
 (一五)「考異」

〔畫詞〕 此處は帥殿。檜皮屋、御倉どもあり。主の御子ども、右近少將、木工
 助、藏人かけたる式部丞、坊の帶刀、並び居たり。女三人、御たち二十人ばか
 りあり。主、物參る。臺一よろひ。祕色の坏ども。女ども、朱の臺、かねの坏取
 りてまうほる。男ども、朱の臺、かなまりして物食ふべしとす。すきはこ、餌
 袋置きて、男ども居竝みたり。
 此處は、女ども居竝みて、綾、うすもの、縑、擇る。主、眞實、大將殿物入りけなる
 殿なめり。白き米二百石が券つくらせよ」と宣ふ。此處はぬしの御子ども、男
 女、集ひて物語す。筑紫船のつかへ人ども來たり。「三百石の船著きにたり。
 今かたへはこそ」と云ふ。
 斯くて、姫、長門を帥殿へ率て行く。帥の主、眞實、やもめにて、つきなく覺ゆ
 れば、殿の若き御たち、父主に申さむ、となむ思ふ。申し次ぎ給ひてむや」長門

〔語釋〕
 (一)何をして暮し居るの義なるべし
 (二)誤あらんか
 (三)みさいは御前にて御案内仕らんの意なるべし
 (四)在來の畑の作物を取るかたづけて夢をつくる様に昨日手傳の人を頼み集めたりといふ事歟
 (五)「聞えむかし」なるべし
 (六)「應答の義なりといふ」
 (七)「何れも若き乳母のみ也」
 (八)「正頼の長子忠澄」
 (九)「考異」
 (一〇)「様」はに
 (一一)「のちらへーヤン」
 (一二)「らー」はよ
 (一三)「畑」はたえーはたき
 (一四)「はしりーをしく」

乳母、長門のお許といふ、知り給へり。それに此の案内を語らひたいまつらむ」とて大將殿に廻往きていふ様、^(一)此の頃まうでむとしつれど、雨のかく降れば、頭もさし出ででなむ侍りつる」長門のいらへ、「長雨の降れば、ことたばかりも得せで、童べをぞもて煩らふ。女ども御世の中は如何にぞ」^(二)姫のいらへ、「怪しき様にぞ侍る」長門がいらへ、「^(三)我も此の頃は騒がれて、ひとよろこびもせでぞ籠り居る」^(四)姫、「暇にましますなるを、^(五)姫の宿にみさい賜はらむ。此の今日ばかり、ありし^(六)畑うちはきて、^(七)麥さすばかり、昨日なん契りあつめて侍る。なにのこもつほしりにいれてまうで來ぬ。甘からずとも一口參らむ。さて物語らひも打聞えむか。^(八)知れるどちこそ、^(九)あとがたりもすなれ」長門「然や。よく宣へり。此の頃は、願はしきものなり。殿には人いと多かれども、我等が友達にすべき人もなし。乳母たちも若くとて、ある限ぞある。我のみ貧しく老い痴れにたるや」といふ。姫「何れの君にか仕うまつり給ひし」長門「^(一〇)太郎左大辨の君になむ仕うまつりし」^(一一)姫「兄にお

〔語釋〕
 (一)「青磁色」
 (二)「すかしのある箱、織物類などを入るゝに用ふ也」
 (三)「正頼に贈らんとする也」
 (四)「誤脱あるべし」
 (五)「正頼の若き娘たち」
 (六)「考異」
 (七)「まうほる」はまうのぼる
 (八)「食ふべしとすくふ人ども」はくふべしともす

はします君に仕うまつり給ひければこそ老い給ひにけれ」とて諸共に出でて往く。
 〔畫詞〕 此處は帥殿。檜皮屋、御倉どもあり。主の御子ども、右近少將、木工助、藏人かけたる式部丞、坊の帶刀、並び居たり。女三人、御たち二十人ばかりあり。主、物參る。臺二よろひ。祕色の坏ども。女ども、朱の臺かねの坏取りてまうほる。男ども、朱の臺、かなまりして物食ふべしとす。すきばこ、餌袋置きて、男ども居並みたり。
 此處は、女ども居並みて、綾、うすもの、縑、擇る。主、^(一)大將殿物入りけなる殿なめり。白き米二百石が券つくらせよ」と宣ふ。此處はぬしの御子ども、男女集ひて物語す。筑紫船のつかへ人ども來たり。「三百石の船著きにたり。今かたへはこそ」と云ふ。
 斯くて、^(二)長門を帥殿へ率て行く。帥の主、^(三)眞堂翁、やもめにて、つきなく覺のれば、^(四)殿の若き御たち、^(五)父主に申さむ、となむ思ふ。申し次ぎ給ひてむや」長門

(語釋)
(一)名は「たてき」

(二)あて宮を駈りて後は常々色々御世話申上ぐべき其の第一番手の文なれ

(三)亡き妻をいよ

(六)後宿に来て翁の爲にこの繁き淺茅を薙除きて下されぬか

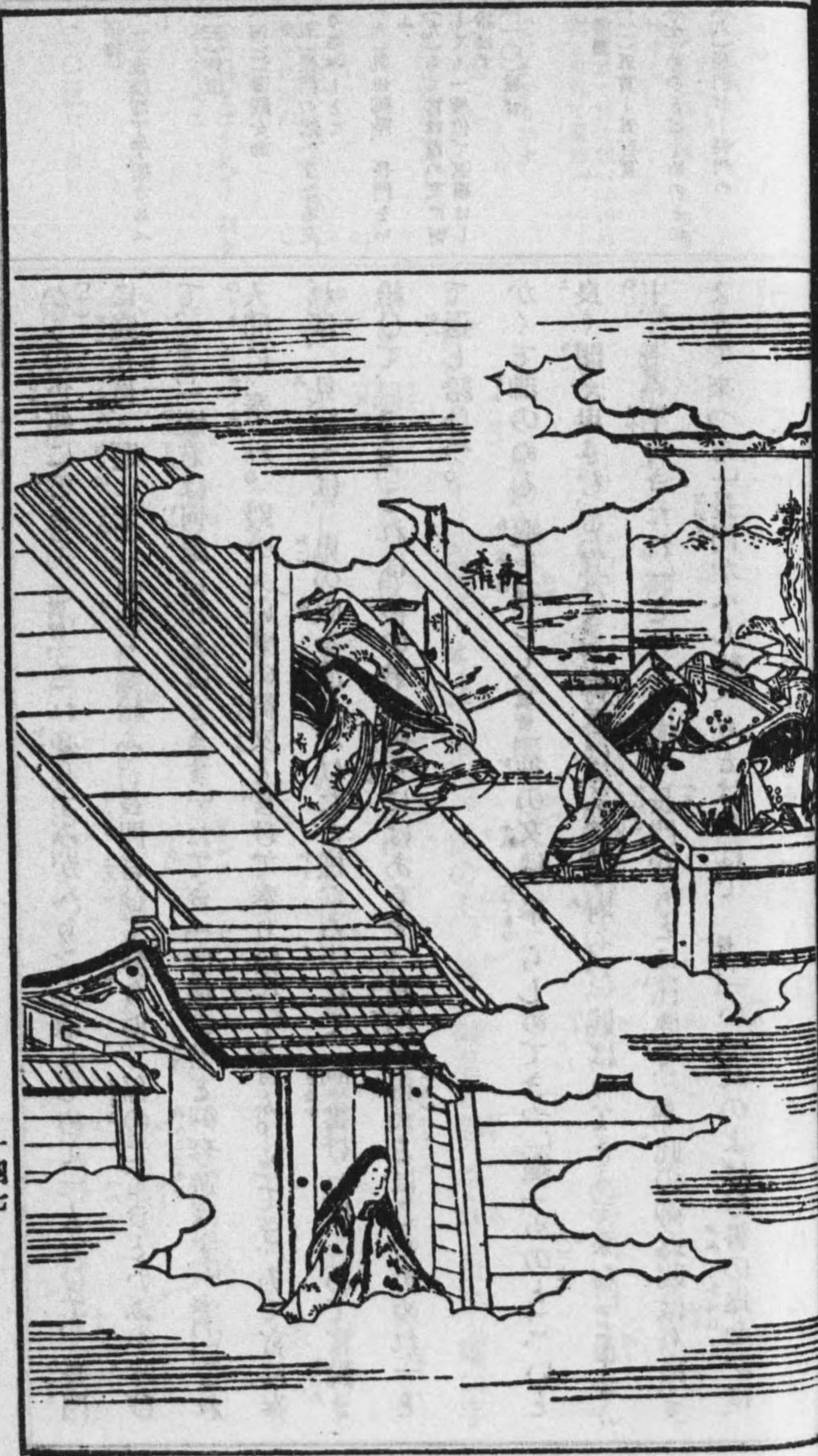
(考異)
(四)女人の一人は

(五)のみの野に

がいらへ、「大殿には、聞え給ふとも、疾にも成らじ。御文を賜はりて、あて宮に参らむ。姫は男君になむ仕う奉りて侍る。孫なむ、此の御方に仕うまつり侍る」主眞實、「よろしき事」とて、御文書かむとて帶刀に宣ふ、眞實「我斯くやもめにてあれば、ほれなくしきを、女人求めしめむとするに、艶書の和歌なきは、人侮らしむるものなり。和歌一つつくりて」と宣ふ。帶刀をかしう思ひながら、繁きおはさん宮仕のはじめに侍るに、名簿をも奉らしめむと思はしむるをや。不例重くすべかりし女人の、旅の空にかくれましにしかば、物語らひすべき人も無き所には、たゞ斯くなむおはしむる。

とて、
あさぢのみしける宿には白露のいとど翁ぞすみうかりける

刈りすて給はんや。
と書きて、帶刀「斯様にて如何あらむ」と聞ゆ。眞實「宜しかめり」とて、清らなる



藤原の君

〔語釋〕
(一) 香染即丁子染なるべし

(三) 仲澄

(四) 仁壽殿女御

(五) 長門の處へ來たる文なるべしとて

(六) 乳母御歎、長門をいふ

(九) あて宮は誰の文に對しても一度位で返事はし給はず

(一〇) 眞菅

〔考異〕
(二) 五貫―五百貫

(七) めのとごめめのとに

(八) 長門が―長門の

かうの色紙に書きて、眞菅「これ必らずみかへりごと取らしめて」と宣ひて、長門に錢五貫、姫に米二石取らせ給ふ。長門喜びて参りぬ。孫のたてきといふを呼びて、長門「姫君は何處にかおはします」たてき、「侍従の君と御琴遊ばす」長門「これ人間に奉れ。殿の大きい君の御文と言ひて奉り給へ」と言ふ。たてき、あて宮に奉れば、見給へば、鬼の眼を潰しかけたる様なる手にて、詞書ければ、あて宮驚き給ひて、あて宮「これは、彼の君の御文にはあらず。長門が得たるにこそあめれ」と返し給ひつ。

かくて帥のぬし、姫を召して、眞菅「彼の文は奉らしめてきや」姫「めのとごい、いと良く聞え申さむ」と宣ひき。御返はかならず有らむ。賜はりてまうで來む」と申す。主、眞菅「早行きたれ」といふ。姫、長門がもとに往きて、眞菅「此の御返賜はりにこそまうで來つる」長門かへし給へりとは言はで、長門「いづれのよばひ書の返をかは、一度には宣はむ。たびくの中こそ、一度もし給はめ」姫「さらば、ぬしの君

〔語釋〕

(一) 長門

(三) 直に御返事のある答はなし

(四) あて宮は我が手中の物と思ひて居給へ

(七) まぎらかず

(八) 與へし

(九) 官に訴ふべし

〔考異〕
(二) 御文を奉りて事の―御文に事の

(五) 詞をばえ見て―詞をみとがめて

(六) 様は―はに

(一〇) 様は―はに

の御許に、おとどの御文を奉りて、事の由聞え奉れ給へ」長門、「いとよき事なり」とて、

長門殊更におとどの御方に、聞えになむ奉る。彼の仰せごとはいと好き折に聞えさせてき。如何は、いつしかとは聞え給はむ。我がおとどの君、物な思ほしそ。あが物とを思はしたれ、姫侍らば。

と書き取らす。姫持てまうで奉る。帥の主、彼の御返と思ひて見るに、姫の手なり。詞をばえ見て投げやりて言ふ様は、眞菅「此の姫好き盗人なり。いかでか汝は、左大將ぬしの女の文とて、姫の文をば持てまうで來る。我を謀らしめむとて、もどろかしむるにはあらずや。事成せとておこなはしめし米二石、只今奉らしめよ。事を偽りて物を盗めるなり。公に只今奉らむ」とて、かみに繩をつけて、後手に縛り、大きな木に縛りつけたり。姫縛られ居りて言ふ様は、「彼の文は、猶見そなはせ。彼のめとの、事の由聞えつるなり」帥、投げやりつる文を取り

〔語釋〕
(三)あて宮の手に非ざりし故

(五)とんでもなき只今の無禮は

(七)此奴

(九)眞言があて宮の事を相談す

〔考異〕
(一)言ふ様―はに

(二)わ姫翁―わが女どもや―わがむもとや

(四)とちす―とちせ

(六)賜ひつる―賜へる

(八)財し―しナレ

て、下り走り、姫の許に往きて言ふ様。眞言「わ姫翁あやまち仕りてけり。彼の女人の文かとて見るに、手の非ざりつれば、然申しつるなり。彼の仲媒の、由言ひ送れるなりけり」とて、手づから解き赦して、率ていまして、簀子に席敷きなどして、物食はせたり。米二石、布十匹とらす。眞言「事成りなむ時、千匹の綾錦も渡さむ。怪しからぬ事は忘れてましね」姫「賜はることは尊けれど、御心も荒々しく、人縛らせ、賜ひつる物をも召し返せば、行く先も、御覽じあやまちなば、斯くこそはあらめ。事成りなん時、綾錦も賜はらむ」と言へば、又うち腹立ちて、眞言「大方は、姫のなど斯くは申す。くやつ、今又縛りかけよ。汝口入れずとも、我が財しあらば成りなむ」と罵り給へば、逃けて去ぬ。
斯くてあて宮の御方に、殿守と云ふ老人ありけり。それを家に迎へて、此の事言ふ。殿守「いと良き事なり」といふ。眞言「此の事成し給へらば、汝を白き頂の上にする奉りて、頂きに頂き奉らむ」と言ひて、綾十匹、錢二十貫取らす。

〔語釋〕
(一)實忠
(四)其時は恰もあて宮の戀しさを忘れさせ給へと祈り居りし時也
(五)御訪問がなかりし故
(七)父正頼
(一〇)我が比叡山に居る時に御返事を下されし故
(一一)御返事を
(一二)前のあて宮の歌
(一三)歌く人の數にも入らぬと自分を誇耀して塵に比したる也
(一五)氣をつけて取持ちて賜はれ
(一六)實忠には己に妻ありとあて宮が思ひ居られ、この書を三條の上といふ、嵯峨院以下に見ゆ
〔考異〕
(二)し給ふ―し給へり
(三)聞え給へりしを―聞えてたまはりしを
(六)中の―ナレ
(八)もとと大將
(九)さば―ナレ
(一四)類なく―た々限なく

斯くて例の宰相、兵衛の君を呼ひて、物語などし給ふ。實忠「一日、いと嬉しく御返りを聞え給へりしを、即ち贈り給へりし。比叡の御堂に、物忘れさせ給へ」と申しつる程になむ。兵衛「久しく御座しまさどりつれば、何處にならむ」と中々の大殿の君も聞え給ひ、大殿よりも聞え給ひしは、さば山籠りし給ひつるにこそありけれ。實忠「心靜かにてこそ、宮仕もすれ。世にあるべくもおほえぬには、誰が爲かは交らひをもせむ」と宣ひて、御返かく聞え給ふ。
實忠奥山に賜はせたりしかば即ちこそ、聞えさせむと思ひ給へりしか。塵の山はさのみやは。
とて、
實忠恨むれどなげくかすにもるぬ塵やふかきあたごの峯と成るらむ
とて兵衛の君に、實忠「これ參らせ給ひて、御返賜はりて賜へ。類なく嬉しかりしを命となしてなむ。猶御心留めて思ほせ」兵衛「さ思ひ給ふれど、故郷物し給ふ

〔語釋〕
(一)先妻を忘れ果て給ふ
様な薄情な君に新に契を
結ぶ事は考へものなるべ
し

(二)なぜ實忠如き人の處
へ行きしぞとあて宮に叱
られるべければ
(四)實忠に呼ばれても
(五)あて宮に
(七)あて宮の御前へ

〔考異〕
(三)宣はむものを一宣は
むも苦しきを
(六)など物語多くし給ひ
て一とてこと物語ども多
くし給ふ

(八)かどーかども
(九)物もーもナン
(一〇)などーナン
(一一)外より持てー外よ
りとり持て

とこそ思しためれ」實忠いで、まろぞ綻縫はむ人だにぞ持たらぬ。よし、見給へ」とて、綾搔練の鞋、一襲、こうちぎ、裕のはかま賜ふとて、

實忠から衣解きぬふ人もなきものを涙のみこそすよぎ著せけれとて取らせ給ふ。兵衛、「此の御綻こそ心憂けれ。

縫ひしをも綻ぶまでに忘るれば結ばむ事もいかゞとぞ思ふ更に見給へじ。何にか参りつると宣はむものを。召ありとも今は参り來じ」いら

へ、實忠怪しくも宣ふかな。對面したりつるとな聞え給ひそ」兵衛、餘も怖ぢ聞え給ふかな」など物語多くし給ひて兵衛はまうのほりぬ。兵衛、此の文奉りて、宣

ひしことども聞ゆ。いらへもし給はず。源宰相、中の大殿の簀子に立寄り給ひて、兵衛の君呼び出でて、實忠、如何にぞや」など宣ふ。いらへ、兵衛、いとよく聞えし

かど、物も宣はず」など聞ゆ。夕暮に、外より持て來たる鳥の子の囀も知らで鳴きありくを見給ひて、

實忠、巢を出でて囀も知らぬ雛鳥のなぞや暮れ行くひよとなくらむ

我一人にはあらざりけり」と宣ふを、内にも聞召すなるべし。

兵部卿の宮より、

兵部久しく思ひ給へわびつる心地も、ほのかなりし御返りになむ、思ふ給へ慰め

つる。

とて、

兵部夏の野にあるかなきかにおく露をわびたる蟲は頼みぬるかな

と聞え給へり。御返りなし。

右大將殿より、

兼雅かひなければ、聞えにくけれど、え然も思ひ果てぬものになむありける。

かくばかりふみ見まほしき山路にはゆるさぬ關もあらじとぞ思ふ

深き心は頼もしくなむ。

〔語釋〕
(一)寢所を得ずして泣く
者は

(四)露をあて宮の返事に
比す

(五)兼雅

(七)思ひ切れぬ

〔考異〕
(二)内に：ペレーあて宮
きこしめす

(三)わびつるーわびたる

(六)よりーよりも

と聞え給へり。御返りなし。
平中納言殿より

正明聞えそめては久しくなりぬれど、覺束なきは、如何なるにか。
とて、

幾度かふみまどふらむ三輪の山杉ある門は見ゆるものから
度々のは如何なりけむ。
(三)

とあれど、御返りなし。

人々の御返り聞え給ふを、三の親王、御前近き松の木に蟬の聲高く鳴く折に、か
く聞え給ふ。
(三)

思康かしかまし草葉にかよる蟲の音よ我だに物は言はでこそ思へ
すみ所有る物だに斯くこそありけれ。
(四)

あて宮聞き入れ給はず。侍従の君、御琴遊ばす序に、
(五)

〔語釋〕
(一)古今の「我が宿は三輪の山本戀しくばとぶらひ來ませ杉たてる門」を本歌にしてよめり

(二)今迄差上げし文は

(三)彌正宮忠康

(四)ましてすみ所なき我が思ひの如何に深きかを察し給へ

(五)仲澄

仲澄人を思ふ心いくらに碎くれば多くしのぶになほ言はるらむ

例の聞き入れ給はず。行政、あこ君して斯く聞えたり。

行政山がつのあとなる水も清ければ空行く月の影をまつかな
(二)

〔畫詞〕 此處は大將殿。あて宮おはず。侍従の君と御琴遊ばす。三の宮、御琴
遊ばす。御たちいと多く、うなるなどさふらふ。此處は北のおとど。宮、御臺
たてて物まるる。人の奉れる物いと多かり。帥の奉れるとて、すきばこ、辛櫃
に、絹、綾など入れて、陸奥守の奉れる、陸奥紙あり。宮、すき箱開けて、
綾など見給ふ。おとど、内裏へ参り給ふとて急ぐ。御車に装束して立てたり。

御殿よりうつし馬ども引きたり。御おくり、公たち打連れて参り給へり。
此處は政所。四位、五位、七八人ばかり、おろしを食ふ。此處はたてま所。厨屋
曹子、合せて五人ばかり。別當、預ども、著きたり。鷹飼、鷹すゑて、鶺鴒ども
あり。御鳥の悩むとみすとこさいども多かり。狙ども立てて魚つくる。

〔語釋〕
(一)山がつのあとなる水は流性いやしき行政自身をいひ、月はあて宮を喻へたる也

(二)正頼の妻大宮

(三)正頼

(四)乗りがへの馬

(五)もさがりの勝部

(六)未詳

(七)此處腹脱あるべし

眞實殿守を訪ひてあて宮の事を謀る。實忠との邂逅

〔語釋〕
 (一) 入内あるべしと
 (二) 五月深敷を忘むは此頃の風俗也
 (三) なすそは「なせそ」歟
 (四) 眞菅が外に女を持って居るをて官が聞召して
 (五) 我に前よりの妻妾ありて妨となる事の事あらばあて宮の方にて此縁談を断る様事もあらん
 (六) 我に妻の素性をいふ
 (七) 我にとての意ならん
 (八) 此句の上に出文あるべし、巨勢氏曰、あて宮を求むる由の義歟
 (九) あて宮を
 (一〇) 人の申込み置きたる領を官仕へに出すとはけしからん
 (一一) あて宮の姉に露殿
 (一二) 果してあて宮が手に入るものならば近々に連れて来て下されるか
 (一三) 考異
 (一四) 思ひ給ふるを召して
 (一五) 来し来しに
 (一六) わうたうわうと
 (一七) 上は「は」ナレ
 (一八) もてあはせはさせあはせもてあはさせ

かくて帥の主、九の君は宮仕したまふべしと聞きて、腹立ちて、殿守の曹子に忍びて入りて、眞菅「人のいましむる五月は去ぬ。今は彼の事成し給へ。物言ひきりになすそ。事は中撓ましむるは悪しきわざなり」いらへ、殿守「そは思ひ給ふる方の有り」と聞召して、煩らはしくぞ思ひ給ふる」帥腹立ちて、眞菅「持て侍る女人の無禮あらしめば、ひこじらひやせんと思はしめし。何か煩はしからむ。筑紫より登りまうで來し女人は、亡れましにき。豊後の介の愛女、わうたうにとてくれたりしを、此の春子一人生して、亡れましにき。童べをぞとりて侍る。さて國王に奉るべしと聞くは、何でふ事ぞ。何れの人の、聞え置ける女人をか然はせしむべき。能く思ひ計りて然はせしめむ」殿守「よに、然あらじ。内裏には女御の君御座しませば、如何はまたは参り給はむ」帥のぬし、「女人の見たいまつるべくば、近く率て給へらむや」殿守、「うたても宜ふかな。所謂あて宮ぞかし。何時しか我がぬしにもてあはせ奉らむ」帥「翁をし、彼の女人に合せ給へらば、何物かは乏しか

〔語釋〕
 (一) あて宮の姉妹皆夫を
 (二) 持ち居る中に
 (三) 庄物歟
 (四) あて宮一人に奉りの義歟
 (五) 殿守を奉にして通ひ給ふか
 (六) 手を打振りて
 (七) 殿守に通ふ事はよく考へての後にせんといふ事歟
 (八) あて宮
 (九) 食物を奉らん
 (一〇) 考異
 (一一) せうもち「さうもち」
 (一二) 只身一つに「たみ」ひとつ
 (一三) 御衣器物「御衣」だつ物
 (一四) 帥「うち」
 (一五) 横は「横」
 (一六) 宰相「外に出で給へり」ナレ

らむ。大ぞうにて、皆夫しましまさふ中に、やもめにて捨て置きたいまつるよりは、翁の片庵にゐてまして、食む物は、初穂ごとに取り、夜晝、魚を食はしめてこそは、かしづき置けらめ。せうもちらは、只身一つに奉り、御衣、器物までも、乏しくてはあらじはや。おもて勵まして、人の見奉るべくあらば、國王の一の妻になり給へらむにも劣らじをや」など言ふ程に、宰相の君、實忠「兵衛の君は」など言ひてさし覗きたるを見て、帥腹立ちて言ふ様、眞菅「それは實忠の宰相にあらすや」いらへ、實忠「然なり。などか此處には接みますぞ。此の殿守のおとども今は御夫も無し。かくてなむ物し給ふか」帥手かきをして言ふ様は、眞菅「なぞの寡婦のまします所にか、やもめ男はすましむる。心つけしめ給ふな。能く思ひ計りて然はせしめん」宰相をかすと聞き給ひて外に出で給へり。殿守「將に然ありななむや。さる御心も見えず」眞菅「抑、此の御正身は如何にぞ。御使だに給へらば、まうほりものたてまたせむ」など言ひて去ぬ。

七月七日正頼の家の女君等賀茂川に髪を洗ふ

(語釋)

(一)髪を洗ふ爲に

(二)正頼の妻大宮

(四)賀節の慶勝

(五)あて宮にはまだ逢ふ事を得ずして

(六)大宮の「の」行文なるべし

(七)織女は必今宵過ぎず夫に逢ふにいつも色づかぬ松の如きあて宮を如何せん

(九)今日の牽牛織女より

(一〇)あて宮を鳥に比してよめり、木綿つくるとは天下桑平の祈禱の爲に鶴に木綿をつけたるものを京の四境の間に放ちて祭をなす事ある也

(考異)

(三)賀茂河の邊に賀茂の河邊に

(八)何なり何なる

かくて七月七日になりぬ。賀茂河に御髪すましに、大宮より始め奉りて、小君たちまで出で給へり。賀茂河の邊に棧敷うちて、男君たち御座しまさふす。其の日節供河原に参れり。君たち御髪すまし果てて、御琴調べて、柵機に奉り給ふ程に、東宮より大宮の御許に、かく聞え給へり。

東宮 思ひきや我がまつ人は餘所ながら柵機づめのあふを見んとは

今日さへ羨ましく嫉くこそ覺ゆれ。

と聞え給へり。大宮の御返り聞え給ふ。

大宮 七夕はすぐさぬものを嫌松の色づく秋のなきや何なり

今日よりも有り難き人々になむ。

とて御使に女の装束一くだり賜ふ。宮、大宮「あてこその上につけて、人の御文見

るこそ哀なれ」とて、東宮の御文に斯く書きつけて、あて宮に奉り給ふ。

大宮すもりこと思ひしものを雛鳥の木綿つくるまでなりにける哉



とて奉り給ふ。あて宮打笑ひて、女御に奉り給へり。仁壽殿^(一)などかは聞え給はぬ」とて、

仁壽殿^(一)珍らしくかへるすもりにいかでかは木綿つけそむる人もなからむ

と聞え給ふ程に、夜に入りぬ。君たち、御琴どもかき合せて遊ばす程に、彦星^(二)天

の河渡るを見給ひて、式部卿の宮の御方、

五君 白露のおくと見し間に彦星の雲の舟にも乗りにけるかな、

中務の宮の御方、

中君 秋をあさみ紅葉も知らぬ天の川何を橋にて逢ひ渡るらむ

右大臣殿の御方、

六君 年ごとにあふと見ながら天の川幾世渡ると知る人のなき

民部卿の御方、

三君 手もすまに我がくる糸を彦星の夜の衣にをるやたなばた

〔語釋〕

(一)五の君

(三)中の君

(五)六の君、右大臣藤原忠雅の妻

(六)三の君、源實正の妻

(七)手もやすま

〔考異〕

(一)式部卿—民部卿

(四)秋を—をナレ

(八)すまに—やすま

左衛門 督の殿の御方、

七君 明けぬとて待つ宵よりも柵機は歸る晨や詫しかるらむ

宰相殿の御方、

四君 年毎に我がよる糸のたちかへり千歳の秋もくらむとぞ思ふ

中將殿の御方、

八君 柵機の稀にあふ夜の東雲は見る人さへも惜くもあるかな

いまは、

柵機の逢ふ夜ときくを天の川浮べる星の名にこそありけれ

あて宮、

柵機にあふ夜の露を秋ごとにわが貸す糸の玉と見るかな

など、これかれ御琴遊ばしなどするを、宰相川のほとりに眺め暮らして、あて宮

にかく聞え給へり。

(一)〔語釋〕
(二)七の君、藤原忠俊の妻

(二)四の君、源實賴の妻

(三)八の君もご宮なるべし、未だ中將に就せし事見えず誤あるべし

(五)實忠

(考異)

(四)糸の—はたの

實雨と降る涙はいつとわかねども今日は水泡となりくたす哉(二)

(三)彈正宮忠康

三の宮

忠康柵機のつま待つよひの露にだに濡れ見てしかな戀は醒むやと

(四)仁壽殿女御をいふなる人し

行政

我こそは柵機づめに劣らねど逢ふ夜をいつと知らずもある哉

など聞え給へり。御返りなし。

(考異)

畫詞

此處は河原に御髪すましたり。あて宮、琴の御琴、いま宮箏の御琴

(一)いつといつも

御息所琵琶、大宮倭琴、調べ給へり。東宮の御使に、物かづけたり。此處は人

(二)なりくたす哉なりくちす哉ありくちす哉

人、あて宮の御琴遊ばす聴くとて、河のほとりに居給へり。君たちの御前に、

(五)河の「の」ナ

浮れ女二十人ばかり、琴弾き歌唄ひて、御衣賜はれり。

(三)惡想人等あて宮と歌を贈答す

かくて歸り給ひぬ。

晦ばかりになりぬ。東宮よりあて宮の御許にかく聞え給へり、

東宮初秋の色をこそみめ女郎花露のやどりと聞くがくるしさ(二)

聞くことの様々なるこそ効なけれ。

と聞え給へり。あて宮、

秋の色も露をもいさや女郎花木隠れにのみおくとこそみれ

例の宰相

實思旅寐する身には涙もなからなむ常に浮きたる心地のみする

あて宮、

たびごとくに空に立ちぬる塵なれや露ばかりにも浮ぶなる哉(三)

右大將殿より、

兼雅わび人の涙をひろふものならば袂や玉のはこにならまし(四)

あて宮、

涙をも筥なる玉と見ましかば餘所なる人も拾ひ添へまし

(語釋)
(一)あて宮を我こそ手に入るべきに他人の物になりたる喻をきくがつちし

(三)君の身は塵の如く輕しと見ゆ塵ばかりの涙に浮ぶとは

(四)佗人は兼雅自身

(考異)
(二)くるしきくるしき

(語釋)

(二)前例に上れば此歌に對するあて宮の返歌あるべき也、脱したるか

(三)西正宮忠康

(四)以下卷未までの文、上よりの續き唐突なるのみならず季節も俄に變化せり或は他の處より搬入せるか

(考異)

(一)平一ナレ

(五)身のわびしく見まはしうみまこひしく

平中納言殿より、

正明沈みなむ身をば思はず名取川ふみ見てしがな淵瀬知るべくあて宮、

瀧つせに浮かべる泡のいかでかは淵瀬に沈む身とは知るべき

兵部卿の宮より、

かくばかり憂きには戀の慰までつらきさまぐ歎きますかな

三の親王、中の大殿にて、御琴遊ばし、物語し給ふ間に、御前なる燈籠に夏蟲の

入るを見給ひて、

忠康「獨り寐る身も夏蟲を見ざりせばかくしも戀に燃えずぞあらまし

いとど身のわびしく。如何ならむ」と聞え給へど、聞き入れ給はず。侍従の君、

仲澄人をおもふわが身の玉はなからなむ空しき骸は歎きしもせじ

いらへ給はず。兵衛佐行政

蚊やり火のけぶりも雲となるものを下草をしも結ばざらめや御返しなし。

忠こそ

● 橘千蔭の素性。忠こそその誕生。父母の鍾愛。母の逝去。● 千蔭の願ぐらし。一條の北方の懸想。千蔭心ならず一條に通ふ。● 五忠こそ帝の寵遇を受く。一條の北方の義経ある君の許に通ふ。● 月の節。一條の北方と忠こそと歌を贈答す。誤解。一條の北方、忠こそを陥れんとす。帝の紛失。博徒帝を藏人所に賣る。● 千蔭の黙止。一條の北方、祐宗を語らば。祐宗、忠こそを千蔭に譲す。● 忠こそその歸省。父の不興。托鉢の僧。忠こそ托鉢の僧に随ひて遁世す。● 暗部山の新入道。忠こそその搜索。帝千蔭を召す。詭計の露顯。千蔭の痛恨。● 千蔭、一條の北方に疎し。北方の憂慮。千蔭の悲嘆。北方の悲嘆。文情絶ゆ。一條北方の零落。● 千蔭の閉居。法會の奇蹟。千蔭の死去。

かくて又嵯峨の御時に、源の忠經と聞ゆる左大臣おはしけり。又右大臣橘の千蔭と申すおはしける。世の中に、かたち清けに、心かしくき人の一に立てられ給ふ。公に仕うまつり給ふにも、身の才人に勝り給へり。帝時めかし給ふこと限りなし。一年に二度三度つかさかうぶり賜はり、日ごとに位まさりつゝ、年三十にて

● 橘千蔭の素性。忠こそその誕生。父母の鍾愛。母の逝去。
(一)けるけり
(二)位一階

忠

こそ

(語釋)
(二)他に寵愛の女なく

(四)手を寵愛することを形容していふ此時代の語なるべし

(五)病の直るべき

(六)なしは「なく」

(考異)
(一)え給ひてーば給て

(三)母君ー母官

左大將かけたる右大臣になり給へり。御妻には、一世の源氏、かたち清らなる名取り給へるが、十四歳なるをえ給ひて、棲み給ふ程に、十六歳といふ年の五月五日に、玉ひかり輝きたる男の、いとをかしけなるを産み給へり。名をば忠こそといふ。その御妻を、またおもふ人なく、比なく限なき御中にて、これも彼も、互に御志ふかく、宣ひちぎりて、經給ふほどに、忠こそおひ出で来るまよに、かたち清らなること限なし。三つになるに、心のさとくらうくしきこと限なし。父母、撫で養ひ給ふこと限なし。母君は、いたゞきの上を蓬萊の山になさむとも、掌の内に黄金の大殿を造らむといふとも、忠こそが言はむことは違へじ、と養ひ給ふほどに、忠こそ五つになる年の三月に、母君俄にかくれ給ひぬべし。殿の内ゆすり満ちて、山々寺々に、おこたり給ふべき事を祈らせ給ふに、驗なし。母君思す事また二つなし。忠こその上を思す。父大殿に聞え給ふ、母おのれ世に思ふ事なし。忠こそが事を思ふなむ、此の世は離れがたく思ふ。これが人となりて、おの

(語釋)

(三)我と異なりて腹黒き繼母を取りて忠こそに憂き目を見するな

(四)逆なき事をいふ此頃のためへなるべし

(五)かたへは片方の義にて半分は妻と見半分は子と思ふといふ事歎

(考異)

(一)うしろめたく憂き事ーうしろめたく憂き事

(二)女君ー母君ー姫君

れが亡き世にも心安くならむを見、つかさかうぶり得るまで見生さんとこそ思ひしか。悪し善しもまだ知らぬ嬰兒を見捨てむ事の、うしろめたく憂き事」と宣ふ。大殿萬に聞えなくさめ給ひつよ、泣き惑ひ給ふこと限なし。女君きこえ給ふ、母誰も誰も親にはものし給へど、少き時は、女親に如くことはあらぬものなり。よし、如何はせむ。おのれにかはりて、腹きたなき人につきて、悪き目見せ給ふな。腹きたなき人ありて、悪きこと聞ゆる人ありとも、言はむ人の罪になし給へ。凡てわが子の爲あしからむ事をば、水の上にふる雪、砂の上におく露となし給へ」と聞えおきて隠れ給ひぬ。大殿、もろ共に死なむとまどひ給へど効なくて、後々の御わざどもし給ふ。かくて經給ふ程に、年頃、女といふもの、目に近く見給はず、忠こそを、妻にもかたへ子にもかたへ、と頼み思して、撫で養ひ給ふ程に、世の中にありとある上達部、御子たち、女子もち給へるは、女方より、名だかき大殿にもものし給へば

(一) 源忠經
 (二) 一條の北方といふ
 (三) 天大臣在世中より引續きて
 (四) 千藤
 (五) 此北方より勝れたる女よりの申込をさへ受付けぬ千藤故
 (六) 以下北方の心
 (七) 千藤に直接に
 (八) 娘の身ならば直接に言寄るが恥かしくもあれどは恥かしくもなし
 (九) 千藤を外にしては
 (一〇) 亡夫
 (一一) 乳母の生みたる子
 (一二) 王一主
 (一三) 一つ子ひとり子
 (一四) とかくはかく
 (一五) 女にもあらず然らば一女にもあらず妻にもあらずさあはらば一女にもあらずかの妻のあらば
 (一六) 否にてはなちて
 (一七) 陸東一結東を
 (一八) 聞えてしてナシ

とて、降る雨の如に言ひ來れど、女君の宣ひしことを思ひて、聞き過し給ふに、その時の大臣かくれたまひぬ。その北の方、ならびなき世の財の王なり。はじめより後まで、いさよか立ち並ぶ人なくて、一つ子にいますかりけり。よき人の女などあまた集めて、豊に著せ食はせ、大殿の御時より、今に仕うまつる御たち多かり。殿の中いきほひて經給ふに、斯く大殿の妻失なひてもものし給ふと聞きて、北の方、この大殿に御心つきて思せど、よきをたに聞過し給へば、まして思しもかけず。女君、とかく思ひて、山々寺々に修法おこなひ、佛神に大願をたて給へど、しるしなし。北の方おほかたは神佛にも申さじ、この人に、我かく思ふと言はむ、我、人のかしづく女にもあらず、然らばこそまばゆくもあらめ、これを否にて、妻なき人のよろしきは、何處にかあらむ、恥を捨てて言ひ出でむ、と思して、かの大殿の御乳士の女、あやきとて、めでたくかたちある童をつかひ給ふ、それには難き装束せさせて、かく聞えて奉り給ふ、



- (一) 養生ふる宿は妻を失ひたる千蔭の家をいふ「しげし」は「しげき」とあるべき也
- (七) 以下千蔭の心
- (八) 我を世間面の男と思ひて
- (一〇) 深く契りて死せし妻に對して我は仇心を持たじ
- (一一) 以下千蔭の分別
- (一二) 一條北方の
- (一四) 亡き妻の事を忘れたるは思からんが忘れさせねば一條へ通ひてもよからん

- (一) 思召しし思し
- (二) 奉り奉れ
- (三) 御殿もとど
- (四) 左大臣殿「臣」ナシ
- (五) 御文を「を」ナシ
- (六) 折らせて「は」らせて
- (七) 障の「露」と
- (八) 止みなば「や」みなむ

北方このみや淺茅しけしと思へどもまた葎おふる宿も有りとか
同じくばおなじ野にや思召し給はぬ。

とて、をかしき淺茅に御文さしたり。さて奉り給ふ。あやき、千蔭の御殿に参りて門に立てり。殿の人見つけて、あやしく清らなる童かなと見て、「何處よりぞ」といふ。あやき、「左大臣殿より」と答ふ。驚きて御文を取り入れて見給ふ。あやしく、如何に思はして宣ふならむ、世の人と思して、獨りあれば宣ふにやあらむと思はして、長き葎を折らせて御返し、

千蔭人はいさかれじとぞ思ふ頼めおきて露のきえにし宿の葎は
とて奉り給ふ。これよりうちはじめて、女は、をかしき事も、哀なる事も、聞き給ひつと、「恥見せ給ふな」と聞え給へば、やんごとなき人の切に宣ふを、聞き過して止みなば、情なき様にもあり、人の御恥にもあり、さりとて、昔を忘れればこそあらめ、時々は通ひてまうでむかし、と思して、まうで通ひ給ふに、男はたど

- (一) 千蔭の亡き妻をいふ
- (二) 珍らしき睡ましさに
- (三) 亡妻に似たる
- (四) 一條はたまきかにのみ行きて
- (五) 千蔭のもてなした妻中になりてわが家人の衣食の世話もせぬ故
- (六) 是ではたまらぬと
- (七) 格別北方を愛しても居ぬ千蔭が動もすれば來なくなりそら故
- (八) 食物
- (九) 千蔭の見るべき
- (一〇) 千蔭に
- (一一) なる一なりける
- (一二) のみ「み」ナシ
- (一三) 稀々「一」夜がれに「ま」れに
- (一四) わが「一」ナシ
- (一五) よう「一」よく

今卅餘、女は五十餘ばかりなり。よき程なる親子と見るばかりなる中にも、千蔭のおとどは、忠こそその母君より外に、女二人と見給はず、かたち清らに、らうらうじく、年若きを見給ひて、難かるべき契をして經給ひし程に、別れ給ひしかば、如何ならむ世に、おほえ給へらむ人をだに見むと、吹く風ふる雨の脚にだにつけて、歎きわたり給ふほどに、心にあらぬ人の、年老い容貌見にくきを見給へば、いと昔のみ思ひ出でられて、稀々にもものし給ひつと、心解けたることも無くてもれども、北の方は、財をつくして勞り給ふこと限なし。わが殿人の食ひ著し物をも知り給はねば、昔の世の君の御時には、豊に食ひ著し者は「身滅ほす」と、集まりて、この殿人は泣き侘ぶることも知り給はず。ことなる思なき人の、ようせずば絶えもしぬべければ、山々に修法を行はせ、夏冬の御装束、朝夕さりの御物に多く物をつくして、頭より脚末まで綾錦を裁ち切りて、見給はむ草木まで著せ飾らむ。この大殿に仕うまつらむ上下の草刈牛飼まで、飽き満たせてあらせむ、と

(語釋)
 (一)北方が我身のどの様
 にならぬ懼はす
 (二)珍らしき食物を並べ
 (三)千蔭の様子
 (四)あつて何になる
 (五)「くち」は「うち」の誤
 にて眉をひそむる事なる
 (六)北方一人だけ得意
 になりて
 (七)亡妻に仕へ居し侍
 女はすて思こそ仕へ
 しめんの意歎
 (八)此邊誤脱あるべし
 (九)法華八講、僧を招
 じて法華經の講釋をせし
 むるに會
 (一〇)「せむ」は衍文歟
 (考異)
 (一)立てて立て
 (二)思はせば思はず
 (大)人も「も」ナレ
 (八)様「まね
 (一)給ふをば苦しけれ
 ど一給ふ事は苦しけれど
 (二)給ひつゝ給ふ
 (一四)「まごご」と
 (一五)「まごご」と歟

て我が身のならむを知らず、まして仕うまつらむ人のならむ、はた知らず。大
 殿稀にももし給へば、箸觸れもし給はぬ御臺を七つ八つと立てて、有り難き物を
 しする、身にも觸れ給はぬ御衣を、綾かさねを、御衣掛にいろくに縫ひかけ、
 興ありと思されむとて、箏の琴、琵琶など取り出でて、萬の聲にしらべて弾き給
 ふ。聞きめで給はで、逃げなまほしく、かしかましく思ほせば、御前なる人も、「た
 いだいしき様しつゝ何にするもの」とくちひそむも知らず、上中下すけなき遊を、
 心一つやりて他心なし。この大殿、ことにももし給ふをば苦しけれど、山々に修
 法行ふ力になむ、年月の経るまゝに、志は劣れど、なほ絶え給はざりける。
 忠こそ十歳になる年、殿上させ給ひつ。帝思すこと限なし。父おととも、女子
 ものし給はねば、忠こそその母君に仕うまつりし限は外にやらじ、我世の限はまなご
 とぞ宣ひし所にさふらはせむ、月に一度故君の御爲に八講し給ふ、莊の内に出で來
 む物をばせむ、忠こそ一人に、萬のものを取らせむとこそ思へ、斯う財をつくし
 (一四) (一五) (一六) (一七) (一八) (一九) (二〇) (二一) (二二) (二三) (二四) (二五) (二六) (二七) (二八) (二九) (三〇)

(語釋)
 (一)一條北方
 (二)千蔭
 (三)一條北方
 (四)父の行く處故
 (五)思こそに惚れて理想
 だちたる挨拶をする
 (六)思こそ帝の寵遇を受
 く。一條の北方の養姪あ
 こ君の許に通ふ
 (考異)
 (一)なく一なし
 (二)にぞ生ひ出でける
 (三)にぞ生ひ出でて
 (四)世なりや一世や一世
 (五)思はして一もぼして

て惑ふ人に、霞塵、物取らせむの心なく、年月になりぬれど、さるいみじき御徳
 に、紙一枚をだに奉り給はず。この北の方は、出で來添ふ物はなくて、御櫛匣の
 物、さては田畑、賣りつくして、數知らずつかひ給へば、限なき財といへど、貧
 しくなりぬ。
 畫詞 ことば千蔭の殿。
 かくてこの大殿、なほ絶えはて給はで時々き通ひ給ふに、年月過ぎて、忠こそ十
 三四になりぬ。かたち清らに、心のなまめきたること限なし。よき程なる童にて、
 遊いとかしこく、こともなき色好にぞ生ひ出でける。女御たちをも見馴らして、
 帝限なく時めかし給ふ。たと今の世には、忠こそにまさる容貌なく、才なべて
 ならで、限なき人にて、「忠こそが世なりや」と言はるよまで、いとめでたし。か
 かる程に忠こそ、大殿のものし給へば、時々、内裏より一條殿へまかでなすれ
 ば、この北の方、いとめでたしと思ほして、見知らぬいらへなどし給ふ程に、忠
 (一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (一〇) (一一) (一二) (一三) (一四) (一五) (一六) (一七) (一八) (一九) (二〇)

(語釋)
(一)思經

(二)千蔭は無沙汰勝ちな
るに

(三)思こそはよく来て下
さる故

(四)かこつけて

(五)古今集「ここのみ
わが世は経なむ菅原や伏
見の里の荒れまくも惜
し」

(六)打棄て置く障にも行
かぬとて

(考異)
(七)返事「かへし

こそ故大殿の御姪に、あこ君とてかしづき給ひしに、忍びて通ふ。この北の方、い
とかしこく心づけて、一條「おとどの見えがたくし給ふに、いと嬉しく見え給へば、
御代になむ頼みきこゆる。御後見は、いとよく仕らむ。あだにな思しそ」など宣
へど、知らず顔にてあり経る程に、千蔭のおとど内裏に参り給ひて定め給ふ事あ
るにつけて、いと久しく此處に見え給はず。この北の方、思ひ入られて、湯水も
まゐらず、侘しけに待ちわたり給へど、御文をだに聞えて、月頃になりぬ。北の方、
待ちわづらひ、術ながりて斯く聞え給ふ。

一條菅原や伏見の里をわするよはわが荒れまくや惜まざるらむ

と聞ゆれば更なりや。いみじき恥をも見せ給へるかな。

と恨み聞え給へれば、大殿見給ふに、いとど志劣ることちし給へど、さてあら

むやはとて、返事かき給ふ。

千蔭なやましく侍りて内裏へも参らず、まかりありきもし侍らねばなむ、其

處にもまゐり來ぬ。今ためらひて。まことや菅原は、

荒れまくは君をぞをしむ菅原や伏見の里のあまた無ければ

身こそ餘所なれとかいふ。思ほし屈せざらめ。

と聞え給へり。大殿、いとほしがりて、かく宣ふを今宵ばかりはまうでむかしと思

して、その夜さり、一條にものし給ひて、下りて入り給ふまでは、なほ絶え給はじと

思す。内に入り給ふすなはち、ありし様に、何しに來つらむと思ほして、立ちかへ

り去なまほしく思せど、人目を思してしばしものし給ふに、心地も空にて、物もい

はで居給へるに、この北の方は、心もとなく珍らしく物し給へれば、喜びながら出

であひて物まるりなどし給ひて、月頃のつらさを恨みなどし給ひてよしばみ給へ

れど、をさく答もし給はず。この北の方を見奉り給ふに、病の重る心地し給へど、

氣色にも出ださじと思して、心にもあらぬいらへなどし給ひて、しばし物し給ふは

どに、いと苦しう覺え給へば、何事にかことつけて去なましと思すに、北の方

(語釋)
(一)可時休息してやがて
参るよし

(三)こころ無沙汰はせじ
と

(五)あぢをやり

(考異)
(二)夜さりー夜さは

(四)立ち…人目を思して
ーナン

(六)北の方を「を」ナン

(語釋) (一)夢見あしければ今日
は出て給ふな杯といふ也

(二)六帖「何せむに玉の
臺も八重葎生へらむ宿に
君とこそ寐ぬ」

(四)此歌誤りあるへし意
味通じがたし

(考異)

(三)一條殿「殿」ナン

(五)見し人―ねし人

(六)床の：かくちむーや
どの下にはかすもかへな
む

出だしやらじとて、萬に言ひ留め、御前なる人も、夢語などして、聞え留むるけ
しきの著く見えければ、大殿をかしと思しながら、二三日ものし給ふ。さて、四
日といふに、出で給はむとするに、一條物忌し給ふべき夢を見つ」と聞え給へど、
千蔭「内裏より召あり」とて急ぎ出で給ひぬ。かくて我が御殿におはして、やすら
かに物などまるりて大殿、千蔭「あやしく物こそ食はるれ。かの一條は、口こそ悪
くなれ」忠こそ、「さるは、彼處にこそよき物は待らめ」と申し給へばおとど、
千蔭「玉の臺もといふは、それぞかし」と宣ひて、北の方の御帳のうちに、御座所し
て、御殿籠りなどするに、忠こそ、「今宵は一條殿にはわたらせ給ふまじきにや」と
きこえ給へば大殿、
千蔭 年ふれど忘れぬ人の寐し床ぞひとり臥すにも嬉しかりける
とて臥し給へば、忠こそ、
見し人もなみだの上に臥すものを床の下には數もかくらむ
(四)五

畫詞

こよは千蔭の大殿。

かくて久しく、大殿一條殿へまうで給はず。忠こそ、あこ君の許へ時々かよふを、
繼母の北の方、羨ましと思しけれど、いと片思なり。氣色ある消息きこえ給へど、
心得たるいらへなどもし給はぬ程に、五月五日になりて、節供などいと清らに調
じて、大殿やものし給ふとて、例の人にも食はせて待ち居給へるに、忠こそひと
り來ぬれば、一條よし、彼の御代に」とて、忠君の御前にまゐり給ひて、小き菖
蒲に斯く書きてはしのだいに置きたり。
(五)六

一條 今日だにも生ふと知らなむ菖蒲草なみだの河の深きみぎはに
(七) 忠君見て、いとあやしく、斯く宣ふは、大殿にあしと思はせ奉らむと
にやあらむ、と思ふに、ましていとほしければ、たど斯くなむ、
(九) 忠こそ「よる浪のすよぎわたれば菖蒲草なほ思ふこそ苦しかりけれ
(一〇) かしこき事ならましかば嬉しからまし」と聞え給へり。北の方これを見給ひて御

(四) 五月の節。一條の北
方と思こそと歌を贈答
す。誤解。一條北方思こそ
を昭れんとす。帯の紛失、
帷徒帯を藏人所に賣る。
(語釋)
(一) 無想の意をほめか
したる
(二) 思こそは知らぬ顔し
て居たるに
(三) 一條北方が
(四) 御馳走をならべて
(五) 箸の毒歎
(七) 君を思うて我が流す
涙の川は菖蒲の生ふる程
に深きをせめて今日でも
察してくれよかし
(八) 忠こそその心
(一〇) 北方に他の男も通
ふ故相手になりにくしと
父に代りてよめる歎
(考異)
(六) はしのだいに置きた
り―置きたりはしのだいに
(九) いとほしければ―は
とはしかりければ

(語釋)

(一) 歌の意を誤解して

(二) 難くせをつけん

(三) 千蔵

(四) 正月廿一日仁壽殿に行はる宴會

(五) 用ひし儘に

(七) 五代六代

(八) 窮迫し切りたる

(考異)

(六) 給へりける一給へる

(九) まことやまことに一まことは

心あやまり給ひて、我に恥見すること、いかでかこれが報せむ、と思ひなりて、何事を言ひつけむと、目をつけて見給へど、言ひつくべき事もなし。強ひて思ひたばかる。父大殿の御許に、親の御時よりつきく傳はれる名だかき帶、内宴にさし給へりける儘に、一條殿におき給へりけるを、この北の方とり隠し給ひて、失せぬとのよしり給ひけり。大殿おどろき騒ぎ給ふこと限なし。さまざまに、これが出で来べき法を行ひて、千蔵こよら五つぎ六つぎと傳はれる帶を、かく我が代にしも失ひつる事」とて、心をまどはして歎き給ふ。千蔵この帶をさすこと、大嘗會、今年の内宴になむさしつる。大嘗會の年さしたりしを、上御覽じて、「この帶奉らば、位をも譲らむかし」と仰せられしを、しばし思ふ心ありて奉らざりし。いとほしく失ひつる事」といみじく思しなげく。北の方、いかで、この帶を忠こそ取りたる、と父大殿にきかせ奉らむ、と思ひて、世の中にかしこき博打の、せまり惑ひたるを召して、一條「まことや、わが言はむこと聽きてむや。あり

(語釋)

(一) 千蔵

(二) 「いつらぎぬ」とかける本もあり。「いつらぎぬ」にて伊豆國のきぬなちん歟

(三) 又與ふる事もあるべし

(四) 「いでたる」は「さだしたる」歟

と有る財、皆わたさむ。願はむことは、難かるべき事なりとも、さながら成さむ」と宣へば、博打、「おほせ給はむ事は、難かるべき事なりとも、承らむ」と申す。北の方、この帶と絹十匹あまりとを取り出でて、一條「この帶、右のおとどの内裏へ参り給へらむ時、藏人所に持てゆきて、賣る物なり」とて出だせ。價問はれば、千五百貫といらへよ。切めで問はるゝ物ならば、人に聞かせずして、大殿に、「忠君のせさせ給ふなり。おのれがする事にあらず」と言ひて、「持てありけど、買ふ人もなければ、持てまゐりたり」と言へ」と宣へば、博打「うら傾きて、とみに取らず。北の方手を摺りて、いつらぎぬ五十匹とらせて宣ふ、一條いと少けれども志なり。いま又もありなむ」とてとらせ給ふ時に、博打「いと易きことに侍り」とて去ぬ。

博打、内裏へ大殿もまゐり給ひ、上達部、御子たち多くまゐり集まり給ひ、忠こそもさふらひ給ふ時、藏人所に帶を持て来て、博打「賣るなり」とていでたる時、藏

(語釋)
(一) 敏達なる

(二) よく似たり

(四) 「給ふを」は「給ひしを」なるべし

(考異)
(三) Sと一ナレ

(五) なしつらめーならめ

人在原滋家心つきたる人にて、かしこく驚きて、滋家「これは、世の中にあり難き物
 持ちたる人かな。(二) 許多見つる中に、これに似たる帯なし。内宴に右の大臣殿のさ
 し給へるにいとおほえたり。さりととも其れならむやは」左衛門尉なる人のいら
 へ、「その帯は、上の御覽じて、奉れとおほせ給ひしを、累代に傳はれる帯なり。
 千蔭が後出でまうで來ずば奉らむ」と奏し給ふを、忠「その帯にこそなしつらめ」
 など言ひて、「さばれ、上に御覽せさせむ」と言ひて、持てまゐりて、賣ると奏す。
 上御覽じて、いとかしこく驚き給ふ。敏達「これは、千蔭のおとどの帯にこそあめ
 れ。うれたき人かな。わがぢひしには、「子出で來なば取らせむ」と言ひしを、さ
 にこそありけれ。不思議なることかな」とて右大臣を召して、敏達「いとかしこく
 惜まれし帯は、出だし立てられにけりや」とて笑ひ給ふ。おとど驚きかしこまり
 給ひて、千蔭「この帯は、去ぬる二月十二日に、忠經の朝臣の家にて盗まれ侍りし
 帯なり。これによりて、萬の神佛になす願し申しつる」と申して、すなはち帯を



(語釋)
 (一)内裏の東門の衛士の詰所
 (二)一條北方に致へられし通り白狀す
 (三)忠こそ以外に世帯に近づく人もなかりしといふ事歟
 (四)博打をつれて
 (五)此事を考へる丈にて
 (六)千藤
 (七)「ざれども」歟

(九)忠經
 (一〇)博奕に打ちみて
 (十一)取りてしてナン

取りて、博打を左衛門の陣に召して問はせ給へば、博打責められ困じて、かのたばかりごとを申す。おとど聞き給ひて、心たましひ惑ひて、萬の事おほえ給はず。返すぐ、あらじと思せど、寄る人もなかりしを思すに、いふかひもなくて、千藤よし、言はぬものを強ひても問はじ」と宣ひて、ゆるさせ給ひて、率てまかづ。さて博打召し寄せて、絹三十四匹賜ひ、千藤天の下さかさまになるとも斯かる事あらじと思へども、かけても心たましひ騒ぎて、いといみじければなむ、え確に問ひ定めぬ。このこと人に漏らすな」と宣ひて、ゆるさせ給ひつ。

おとど返すぐ思ほすに、怪しく、あらじと思ほせど、失せ様の怪しかりしを、何でふ事なり、とおほすこと限なし。さりとも、忠こそに、「かよることなむ人言ふ」とも宣はず、北の方にも、「この帯出で來たり」とも申し給はず、事無ければ、北の方し煩らひて、又たばかる様、故大殿の御甥、祐宗といひて少將にて有りける、心よろしからず、博打不孝の者にて、身の装束などは皆うち入れて、せむ方

(語釋)
 (一)忠經逝去後は一向御出もなかりし故此方から殊更に親しみ寄るでもなしと思ひて過ぎたり
 (二)衛府の役人の油断に
 (三)博打に打ち入れて失ひたるを斯くいふ也
 (四)なぞ斯く〜と知らせては下されぬ

(考異)
 (一)身は女なり身には女也
 (二)内裏へはしはしナン
 (三)侍らひし侍りし

なく籠り居たるを、この北の方呼び取りて、物語などし給ひて、一盤昔は、睦まじき者には君をこそ頼み聞えしか。されども君隠れ給ひにしかば、つれなきをしもなにかは、とてなむ。おのが身は女なり、睦まじき人しなければ、君一人をこそとさまかうさまに頼み聞ゆれ」祐宗、「甚だかしこし。年頃も、宮仕なども忙しく侍るうちに、仰もなければ、畏まりてなむ、昔の如も候はぬ」北の方、「さりとも、此處には、昔忘れがたさに、年頃のつらさをも忘れて聞ゆる。如何に、此の頃は内裏へは参り給ふや」祐宗、「さいつ頃、侍り所に、衛府づかさどもや知らず侍りけむ、心にくと思ひて、盗人入りまうで來て、一つ二つ侍ひし装束なども皆さがし取りて、彼處に侍る、物のいさよかなる調度など、皆あさり取りてまかりにしかば、俄に装束えし侍らず。この頃、内裏に召し侍れど、え参らでなむ」北の方、「いとほしき事かな。などかは然も物し給はざりむ。いさよかなる事は仕うまつりてまし物を。今、よからずとも御装束は調じて奉り侍らん」祐宗、「いと嬉し